Unattribute〜アン・アトリビュート〜

acrux

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｕｎａｔｔｒｉｂｕｔｅ～アン・アトリビュート～

【Ｎコード】
Ｎ１７９３Ｃ

【作者名】
ａｃｒｕｘ

【あらすじ】
環境破壊によって公然と降り注ぐようになった太陽光の影響で、特殊な力を扱える“ＡＰ”と呼ばれる人間が現れ始めた、３０世紀前半の世界。ＡＰが世界中で内戦を引き起こす中に、金銭次第で同じＡＰや一般人を大量に、誰にでも派遣する巨大傭兵会社ＳＣが存在していた。そしてこれは、そのＳＣに所属する一人の青年の物語である。

RECORD0：プロローグ

―３０世紀前半―

人類はその生活圏を地球の外側にまで延長し、世界一周旅行並みの費用があれば誰でも宇宙ステーションに宿泊する事が出来るようになっていた。
治安については２０世紀前半の世界大戦を境に、国同士の大規模な戦争は起きていない。

…いや、正確には起こす事が出来なくなってきたのだ。
物資が底をついた訳ではない。むしろ資源については２５世紀頃から世界規模での節約、再利用が行われ、２７世紀の中盤には第三次産業革命によって画期的な技術が多々発表され、もはや資源の心配は無用と化していた。

その理由は、２８世紀に起こった事故。いや、「事故」の一言では済まされないかもしれない。
誰もが予想しえた事なのに、誰も気にとめようとはしなかった事。
突如世界数十箇所の上空でオゾンホールが出現し始めたのだ。
原因は工業からの排煙、都市部からの排ガス。
資源問題が解決した影響でかえって工業の発達が鈍ってしまったのだ。
材料の心配がなくなり、誰も作る過程である工業に目を向けなくなっていたのである。
数千の化学物質が穿（うが）った穴は大きいもので直径１キロメートルに達し、そこから有害な太陽光線が直に地表に降り注ぐこととなった。
これに伴い国連は緊急サミットを開き、世界中の学者を招集し事態の打開に乗り出した。

しかし、地上ではすでに変化が起き始めていた。
被害地で生活する人間の中に不思議な力を持つ者が現れ始めたのである。
感情が昂ると周りの物が割れる者や、手をかざすだけで物を宙に浮かせられる者、怪我をしても異常な速度で完治する者など、力の性質は多種多様でその数は全世界で数十万人となった。
そしてそうした者達はその力を周りの者から気味悪がられ、差別の対象とされた。
国もそういった者達を「マイノリティー（少数者）」と呼んだため、溝は一層深まり各地でデモや暴動が起こる事もあった。
それでも、その能力を生かして危険な仕事に就いたり、差別から逃れる為に故意に力を使わない者が現れたことによって差別意識は徐々に薄れ、彼らの呼称も「ＡＰ（アビリティ・パーソン）」と呼び改められた。
だが、オゾンホールから注ぐ光は全ての人類において変化をもたらす。
それは犯罪者やテロリストも例外ではなかった。

２９世紀後半から、世界各地でテロが発生。
それぞれのグループ同士で統制は無いものの、どのグループもメンバーにＡＰを含んでいた為、正規軍ですら苦戦を強いられる激しい戦闘に発展した。
その後、世界各地で燻（くすぶ）っていた傭兵会社が一斉に商売に乗り出し、高報酬で一般人・ＡＰを問わず幅広く人員が募集される事となる。

そして今。
世界各地の傭兵会社の７割を締め、世界中どこにでも兵士を派遣できる巨大な傭兵会社、「サボーディネーション・コープス（通称ＳＣ）」が設立される。

そしてこの物語は、ＳＣに所属する一人の男から始まる…

RECORD0：プロローグ（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

ここまで読破して頂きありがとうございます。作者のａｃｒｕｘです。

今回初めてここに小説を投稿させて頂きました。

まだまだ駆け出しの新人ですので途中、見辛い点が多々あるとは思いますが、正直作者の現時点の文章力ではアレが精一杯なのです（汗

ですが指摘を受ければ可能な限りの努力はしますので、感想・評価など時間があれば是非書き込んでって下さいな。酷評も心して受けとめますので。

さあ、プロローグ終りまして、次回より本編スタートです。

もし面白いと感じて頂いたのなら、本編も是非御覧下さい。

RECORD1：目覚めの朝

「当機は間もなく目的地に到着します。皆様、お手元のシートベルトをしっかりとお締め下さい」
機内に業務口調のアナウンスが響く。
ある者は耳につけていたイヤホンを取り、ある者はノートパソコンを閉じ、またある者はカップの残りを飲み干し、銘銘(めいめい)着陸の準備を始めだす。
「ねぇ母さん！あの雲見てよ！」
「ねぇねぇ母さん！あの小さい島に降りるの？」
「ねぇねぇ…」
そんな中、嬉しそうな幼い声がする。
十二・三歳くらいだろうか、少年がシートの上に膝立ちになって外の景色を見ながら、そばにいる若い女性にしきりに話しかけている。
その声にはフライトの疲れは全くなく、かれこれ十数分ははしゃぎっぱなしだ。そんな少年に微笑んで相槌を打ちながら、ベルトを着ける　母子(おやこ)の風景は周りの空気を和ませていた。

しかし、その和やかなムードは簡単に崩れ去ってしまう。

「本日は、当エアラインを御利用いただき、誠にっ…」
アナウンスが唐突に切れる。
何が起こったのか理解する前に、耳を劈(つんざ)く激しい爆発音。
そして、世界が大きく揺れる。
視界が一瞬暗転した後眩しく光り、上も下もわからなくなる。
混濁した意識の中で人の叫び声が聞こえる…

「っ！！」
男が飛び起きる。が、そこは機内ではなく部屋の中、無駄に硬い安物ベッドの上。叫び声もしなければ、自分以外誰もいない。聞こえるのは真下にある錆びたスプリングの軋む音だけ。
その髪はあちこちに飛び跳ね、蒼い瞳はくっきりと見開かれている。
男の名前はリース・レイナード、年齢は２３。
職業――傭兵。

「ん……」
首を捻り、時計を見る。
…早朝４時。いつもより１時間も早く起きたことになる。
早春のこの時間はまだまだ暗い。さらに今日は日曜日、ほとんどの人がまだ夢の中だ。
（……夢…か）
顔に片手を押し当てて、鉛を吐くような重いため息をつく。
夢の余韻か、まだ息が荒い。こころなしか手も震えている気がする。
それにしても…
「――随分寝覚めの悪い夢だったな」
誰にともなく呟く。
まだあの光景が頭に焼き付いて離れない。叫ぶ声、飛び散る破片、目も眩む光…。

自慢じゃないが、傭兵という職業柄短時間しか睡眠が取れない為、短時間でも夢を見ずにぐっすりと眠れ、起きたい時間に起きられるようになっていた。そんな中で夢を、それも飛びっきりの悪夢を見たのはそれこそ数年ぶりかもしれない。
「…シャワーでも浴びるか」
頭が冷えてくるにつれて、今度は肌に張り付く不快感が大きくなってきていた。
着ているシャツの濡れ具合が悪夢の影響を雄弁に語っている。

着替えを用意して、オート開閉のドアから外に出る。

ここは傭兵会社サボーディネーション・コープス、通称ＳＣ直轄の傭兵用施設である。中には居住スペース、浴場、食堂、娯楽施設と食う・寝る意外にも結構充実している。

ＳＣに所属していれば誰でも無条件に施設が利用でき、値段も破格なので利用する傭兵は多い。

共同のシャワールームに行き、脱衣所に入る。まだ早いせいだろう、そのだだっ広い空間には誰もいない。

服を脱いで中に入り、冷水を浴びる。春の早朝に水は肌を切るように冷たい。だがお湯よりもこっちの方が目が覚めるし、身体は丈夫な方だからこれで風邪をひいたこともない。

俺は傭兵になって2年になる。だがこの業界で2年と言うのは非常に浅い部類に入る。

理由は、「2年ではまぐれか実力か分からない」から。

大国の正規軍にも匹敵する兵を持つＳＣでは、今や傭兵と一口に言ってもその依頼内容は多種多様で、紛争地の白兵戦に放り込まれる事もあれば、「要人の護衛をして下さい」というものだったり、はたまた「戦闘スキルのレクチャーをしてくれ」なんてのもあるからだ。

俺みたいな若造は普通なら即刻依頼を受けて前線真っ只中に飛んでいくのだろうが、俺がこなす仕事はもっぱら後方支援、輸送機での救援物資輸送。そしてその他雑用各種。

前線での依頼が無い理由は俺の能力テストの結果。ＳＣでは定期的に傭兵の質を数値化して顧客に見せるのでこのようなテストが年二回ほど行われる。

そのテストで銃の扱いはかなり評価されたが、いかんせん近接戦闘全般が散々だった。

他にも特技はあるのだが、ばれたらまず死と隣り合わせの過酷な依

頼をご丁寧にも最優先で回されることになりかねない。
もちろん、見返りに莫大な報酬が約束されているのだが、俺が傭兵になったのは報酬の為じゃない。傭兵になったのはあくまで目的の為の一手段であって、みすみす死に急ぐのは極力遠慮している。
よって過酷な依頼を避けるため、俺の名前は何千とある顧客リストで下から数えた方が早い位置を常にキープしている。
ちなみに近接戦闘のテストの際に手を抜いたのは対戦相手と俺だけの秘密である。
…まあ、そんなこんなで俺は今のヒマな状態に収まっているわけである。

――5～6分たっぷり冷水を浴びた後、まだ誰もいない脱衣所に出る。
…そりゃそうか、こんな朝っぱらからシャワー浴びる奴なんて俺ぐらいだよな、と一人合点する。
「ふぅ～、スッキリした」
バスタオルで髪を拭きながら鏡の前に立つ。
「……」
そこには、普段はまじまじと見ることは無い自分の姿が映っている。
恐らく、彼を知らない人が見ればとても痛々しい表情をするであろう、その姿。
その左胸には肩から脇にかけて歪（いびつ）な曲線の生々しい手術の跡がのぞいている。
「っ…」
ほんの一瞬、目を凝らさないと分からないほど一瞬だけ、傷痕を見る表情が険しくなる。よく見ればその表情は痛みからではなく、憎悪からのそれだと分かる。
無言のままで着替えを済ませ、脱衣所を出る。

「あ、鍵…」

出ようとしたところで部屋の鍵が無い事に気付く。
振り返ると数メートル先の棚に鍵を置きっぱなしにしてあった。
（誰もいないよな…）
二～三度辺りを見渡して、周囲に人がいないことを確認する。
（よし…）
誰にも見られていないことを確認すると、棚にある鍵に右手を向ける。

ヒュッ。

すると空気が一瞬震えた後、あっさりと棚から鍵が離れリースの右手に収まった。
「よし、好調好調」
そしてリースはわずかな笑みを浮かべてポケットに鍵をしまい、少し早めの朝食をとるために食堂へと向かった…

男の名前はリース・レイナード、年齢は２３。職業、傭兵。
彼の特技――ＡＰ「アビリティ・パーソン」として色々と特殊な力が使えること。

RECORD1：目覚めの朝（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

どうも、ａｃｒｕｘです。
一話目は何とか無事に終りました。
これからどんどん連載して行こうと思いますので、どうぞ気楽に見守ってやってください。
あと、登録カテゴリにシリアスのほかにコメディにもチェックを入れてますが、堅い話で終始進むのもなんなので時折交ぜて行きたいと思ってます。
ではでは、第二話に続きます。

RECORD2：出発

食堂にはすでにちらほらと人がいて早めの朝食をとっていた。
若い者はほとんどおらず、おじさんたちがコーヒーにトーストの組み合わせで新聞を読みふけっているのが大体を占めている。
「お～い、リース！こっちだ～！」
トレイを持って座る場所を探していると、聞き慣れた声に名前を呼ばれる。
振り返ってみると同じ位の年の男がホイホイとこちらに手招きしている。

その程よく筋肉がついた肌は少し日に焼けていて、金髪の整った顔つきに紅い眼が映えるその顔は誰が見ても二枚目に分類されるだろう。
だが、笑顔で立ち上がって目前の特盛りカレーを食べるのに使っていたであろうスプーンをブンブン振り回すことで見事にそのイメージを粉々にしている。
―そしてそのせいでさっきから周りの視線が非常に痛い。まあ当の本人は気付いていないようだが。

「おいウィル、分かったからその子供っぽい呼び方は止めてくれ」
トレイを置いて男の向かい側に座りながら先程の行為を諭す。
「え、何の話だ？」
「いや、もういい…」
多分言っても無駄だろう。元々そういう奴だ。それよりもさっさとトレイの中身を胃に流すほうがよっぽど時間の有効利用というものだ。
そう思ってトレイのサンドイッチに手をつける。

そしてこの、スプーンを手に俺の向かいに座っている男がウィリアム・キース。俺よりも一つ年下の２２。
コイツとは知り合ってから3年の仲になる。
知り合ったのは能力テストの模擬戦闘。そう、お互い合意の下、迫真の演技で八百長試合をした時の相手こそがウィルである。あの時、格闘テストの時は俺が、そして射撃テストの時はウィルがわざと手を抜いて互角にした。
向こうも似たような理由で、入隊はしたいが危険な依頼は極力避けたいというもの。
ちなみに彼は俺がＡＰである事を知っている数少ない一人でもある。

「それにしてもお前はよく朝からそんなに食えるよな」
ウィルが朝から大量に、それもカレーを食べているのを見て思わずそんな言葉がもれる。
目の前の2人前はありそうなカレーがみるみる内に減っていく様はなかなか壮観だ。
「お前の方が食わなさすぎなんだよ。サンドイッチなんざ女の食いもんだっ」
スプーンを一語一語に合わせて振りながら熱弁する。
「んなこと誰が決めたんだよ。ただ今朝寝覚めの悪い夢を見たから食欲無いだけだ」
パンからはみ出かけたレタスを押し戻しながら今朝悪夢を見たことを話す。
「お前が悪夢？めずらしいな」
「ああ、何年振りかもな」
「……」
ウィルが驚いた表情をした後、何かを考え込むように押し黙る。
「ん、どうした。福神漬けが合わなかったか？」
うつむいた顔を覗き込みながら冗談半分に問いかける。
「――それって空に関係する夢か？」

詮索するような目でウィルが問いかける。
「…そうだけど、どうして？」
「それも航空機絡みの？」
的確に言い当てるウィルに、リースは身体を戻して席に着いた。
「……確かにそうだけど、どうして分かった？」
（コイツが他人の夢を言い当てるなんて、気味が悪いな…）
そう思っていると、ウィルが何かをゴソゴソと取り出した。
「これだよ」
そしてリースに向かって本のような物を差し出す。
「お前の体内時計はかなり精密みたいだな」
――それはどこにでもあるような週刊誌だった。
そのなかのページの端を折り曲げている所、ゴシップ記事のスペースにそれはあった。

『史上最悪の惨事から１０年、歪曲された情報の真実に迫る！！』
という活字が大きく印刷されている。
『我々取材班は信用できる筋の協力を経て、１０年前の旅客機空中衝突事故の事後情報が虚偽の報告ではないかという情報を入手した。この事故は、空港付近で着陸態勢に入る９８０人搭乗の大型旅客機に、近くを飛行中の戦闘機が空中衝突をするという痛ましい惨事である。
あまりに惨い事故である為「神の気まぐれ」とまで呼ばれるようになったが、墜落した航空機の残骸から乗客十数名が生きて救出されたという奇跡に近い生還劇もあり、「神の気まぐれ」たるもう一つの所以となっている。
この事故に対して空軍関係者は、「当時、機体の計器類が原因不明の故障を起こし、マニュアル操縦に切り替えている最中に起きた不慮の事故である」としているが、我々が入手した情報により様々な説が浮上した――――』

それより後は情報を元に立てたたくさんの仮説が書き連ねてあった。まともな物では戦闘機パイロットの不注意説、管制塔の指示ミス説、旅客機側の不備を指摘する説などだが、後のほうに来ると第三者が撃墜したという説、乗客の中に軍にとって不都合な人物がいて、口封じの為に突っ込んだという説、挙句の果てには衛星兵器の誤射でＧＰＳ関係の機器が誤作動を起こした説等、にわかには信じ難い物まで様々だ。

「…これが今朝の夢に関係あるって？」
「無いとも言えないだろ？お前には馴染み深い出来事だしな」
テーブルに肘を突いて手に頭を乗せ、もう片方の手で垂直に立てたスプーンを器用に回しながらウィルが問いかける。
無論、すでに皿の中のカレーは跡形も無く消えている。
「この雑誌、しばらく借りてもいいか？」
「やるよそんなもん。俺に有益な事は書いてないからな」
それを聞いてからサンドイッチの最後の一切れを放り込み、雑誌を丸めて仕舞う。
「じゃ、部屋に帰って暇つぶしに読みますか」
席を立って大きな伸びをした後、部屋に戻ろうとする。
「帰って読むって…おいリース、これから任務だろ？準備できてるのか？」
「……へ？任務？何の？」
つっけんどんに聞き返す。そんなの初耳だ。身に全く覚えが無い。
「昨日エイドから連絡あっただろ。ここから半日位ＭＨで飛んだところにある町で、俺は護衛任務、お前は物資の輸送任務、って」
「……」
「まさか、お前のエイドから連絡もらってないのか？」
無言で首を振るとウィルが絶句する。
「そんなバカな。エイド全員に連絡は行ってるはずだぞ」

――エイドというのは傭兵が志望すれば安値で雇える補佐の事で、必要な依頼のより分けをしたり、傭兵のための細かい物資調達や体調管理なんかを請け負ってくれる。
細かい仕事を正確にこなさなければならないので、エイドは基本的に女性が多い。
かくいう俺も去年からエイドを一人つけている。
どうしてかというと、依頼の取捨選択や金銭勘定に俺がとことん弱いから。
報酬が良く危険ではない任務を数多の中から選び出すのは非常に骨が折れる仕事である。だから依頼と金銭関係は全てエイドに一任して、必要に応じて連絡を入れてもらっているのだ。

「お前のエイドって…イルマちゃんだよな？」
心底心配そうな顔でウィルが聞く。
「確かにイルならやりかねん。だけどな、ギリギリで連絡入れたことはあっても連絡し損なった事は今まで一度もなかったぞ」
「だけどイルマちゃん、すこし抜けてるとこがあるっつーか、なんつーか――」
「リースさぁーん！！」
ウィルの話を遮るように再び食堂に俺の名前が響き渡る。しかも女性の。
そして例の如くまた集まる視線。さらに今度は時間が経った分、数が増えている。
……痛い、みんなの目線がひたすらに痛い。なんか勘違いの殺気も混じってる気がする。
（今度から外を出歩く時は注意した方がいいかもしれないな…）
そんな人の思いをよそに、少女が一人人垣を掻き分けて近づいてくる。
ショートカットに切られた茶髪は走るごとに肩の辺りを舞い、髪色に近い透き通るような鳶色（とび）の瞳には、今しがたまであった焦りと探

していた人を見つけられた喜びが半々に出ている。
「リースさん！えと、そのっ！大事な話が――」
ズデンッ！ツツーー。
目の前まで来て前のめりに転ぶ彼女。そしてそのまま俺とウィルの足元まで滑って来る。
「…おーい、イルゥー。大丈夫か？」
しゃがみ込んでうつ伏せの頭をツンツンと突く。
「うー、大丈夫です…」
――エイドを雇った時の俺は金がほとんど無く、破格の値段で募集したのを今でも覚えている。
そのダメ元で出した募集にたった一人だけ立候補が上がったのが、目の前で涙目になって起き上がる彼女、イルマ・キオーリッシュである。
歳は教えてくれないが、この前乗り物の免許を持てないとぼろを出したので２０以下というとこまでは目星がついている。ちなみに俺とウィルの間では１８～９くらいと言う事で折り合いをつけている。
「ハッ！！それよりも大事なお話が――！！」
「ああ、任務の事だろ？さっきウィルから聞いたぜ」
慌てて立ち上がろうとするイルマを制して隣のウィルをあごで指す。
「あっ、キースさん。伝言どうもありがとうございます。それにいつもシルビアさんにはお世話になってます」
ウィルに気付いたイルマが深々と頭を下げる。ちなみに、シルビアとはウィルが雇うエイドの名前で、かなり厳しい事でちょっとした有名人になっている。彼女はイルマの指導者兼良き友人でもある。
「おぅ、あんなのでよかったらいつでも貸し出してやるよ」
ウィルが周りに密告者がいないことを確かめてから胸を張って言う。

正直、ウィルも彼女には頭が上がらないところがある。
「それよりイル、一体どうしたんだ？当日になるまで連絡を寄こさないなんて。何かあったのか？」
「そ、そんな事ないですよっ！逆に私がいくら連絡してもリースさんが返事してくれなかったんじゃないですか！！」
「そんなバカな」
「本当です！ちゃんと端末に連絡入れたんですから」
頬をぷぅと膨らませるイルマ。どうやら本当らしい。
とりあえず、ポケットに入れてる連絡用の携帯端末を取り出す。
「でもなあ、端末に連絡入った覚えは……ア」
「どうした？」
ウィルが尋ねる。
「…電源が入ってない。っていうか、バッテリー切れてる」
その一言にウィルは呆れ、イルマは非難の声をあげた。
「だって仕方ないだろ？使う事なんて最近無かったんだから―」
「だからって、充電もしないで放っておくなんてあんまりです！」
イルマの目が釣り上がる。
「分かった分かった！今回は俺が全面的に悪かったよ！だから帰ってきたら何か甘い物おごってやるから機嫌直せ、な？」
「まあそれなら、別にいいですけど…」
そこまで言ってやっと機嫌を直す。
甘い物で釣るのは俺がこの一年で覚えたイルマの機嫌回復法だ。
「そろそろ部屋に戻らないか。食べ終わったのにいつまでも食堂にいたんじゃ悪いだろ？」
「人も増えてきたしな」
ウィルも賛同する。正直、あの視線から離れたいというのもあった。

それから三人で雑談をしながら人気の少ない通路を移動する。
「えーっと、バッテリーが切れてるんだよな」
端末を裏返してカバーを開け、使用頻度の少ないバッテリーを取り

出す。
コイツが消耗する電気の割合の一番を占めるのはおそらく待機電力であろう。
そのまま指でバッテリーの電極の突起部分を持つ
「もしかして、アレで充電するのか？」
ウィルがため息混じりに聞いてくる。
「え、アビリティを使うんですか？」
イルマの目が興味の色に染まる。
「まあ、この方が手っ取り早いし、電気は俺の十八番（おはこ）だからな」
誰もいないことを確認してから、指先に精神を集中する。

パチ、バチバチッ…

特有の光とスパーク音を立てながらバッテリーに電力が供給される。
「うわぁ、すごい……」
イルマが感嘆の声を漏らす。
「そういやイルマちゃんは属性のあるアビリティはまだ扱えないんだっけ？」
「はい、訓練は受けてるんですけど、まだそこまでは…」
ウィルの質問に残念そうに答えるイルマの表情が少し曇る。
「まあその分イルは一生懸命頑張ってるし、何より機械の知識は教授以上だからな」
「へへ、そうですか？」
リースの言葉に彼女の表情が少し和らぐ。

ＡＰが持つアビリティという能力にはある程度傾向があり、子供や訓練を受けていない人でも物を浮かせたり割ったりといった能力は使えることが判明している。
そして、火や水、俺のように電気といったその場に無いものを作り出す能力は、訓練を受けないと習得するのは難しいと言われている。

「—よし、これくらいでいいだろう」
放電を止めてバッテリーを端末にセットする。
「うわっ、すごいな…」
電源をつけた端末にはイルマからの２０件余りのメッセージ履歴があり、彼女がどれだけ頑張ったかが一目に分かった。
「集合まではまだ２０分あるぞ」
腕時計を見たウィルが言う。
「それだけあれば十分準備が出来るな」
「今回リースさんは輸送任務だけなので、今日の夜には帰還する予定になってます」
歩きながらイルマが説明する。
「おっと。じゃ、俺はこっちだから」
「おう、また後でな」
「シルビアさんによろしく伝えておいて下さいね」
ウィルが差し掛かったT字路で二人と別れる。
「…リースさんが帰ってきたら何を奢って貰いましょうか？」
イルマがうっとりと幸せな妄想に入り込む。
「何でもいいが財布を空にするような物だけは頼むなよ」
「分かってます。リースさんの台所事情は私のほうが良く知ってるんですから」
「それもそうだな」
そこまで言って二人でくすくす笑う。イルマとは普段あまり話す機会が無いので、こういった雑談は結構新鮮に感じる。
「お、ついたな」
そこには見慣れたドアが主（あるじ）の帰りを待っていた。
「じゃあ、帰られたらまたここに来ますね」
「あぁ。その時までには何奢ってもらうか考えとけよ」
「はいっ」
イルマと別れて誰もいない自室に入る。

「さあて、準備しますか」
そういって任務に持っていく荷物をまとめ始める。
５分ほどで荷造りが終わり、中サイズのアタッシュケース一つと、１メートルはある直方体のケース一つに必要な物をすべてしまい込む。
「ほいじゃ、行きますか」
ドアにロックを掛けて、二つのケースを両手に輸送機の発着場に向かう。

発着場では三機の機体がアイドリング状態で待機していた。
――ＭＨタイプと呼ばれるこの機種は、２７世紀の産業革命の時に誕生したいくつかの新技術で出来ていて、タイヤと呼ばれる物は一切無く、着陸脚と呼ばれる三本の脚で離着陸時の機体を支える構造になっている。
ＶＴＯＬ（垂直離着陸）の機能も有する為滑走路が一切必要なく、高出力のエンジンにより非常に高い機動性を得たため、主翼も廃止されている。この機体の登場によりヘリは退役に追い込まれ、今はＭＨがヘリと変わって兵員輸送、低空での航空支援等の任務をこなしている。

ここにある三機もＭＨ型だが、そのうち二機には一切武装が無く、機体の凹凸といえば機首に尾翼、機体を支える脚だけという、何ともシンプルなフォルムをしている。
残る一機はそれに武装を足したような機種で、機体の随所にミサイルポッドが付き、機体の下部には銀色に光る大口径ガトリングが装着されている。

「よっ。遅かったな、リース」
後ろからウィルに声を掛けられる。

「ちょっと荷造りしてたんでな」
そういって両手にあるケースを持ち上げてみせる。
「一日ポッキリの仕事にそんなデカイもんを持ってくのか？」
異様に直径が長いケースを指差してウィルが驚く。
「両方とも保険だよ、保険。非常時に役に立つ道具が入ってるんでね」
「非常時ねぇ…、おっと、任務説明が始まるみたいだな」
エンジンをふかす輸送機のそばに人だかりが出来ていた。
その中にリース達が混ざると、大柄な恰幅（かっぷく）の良い男性が書類の束を片手に歩み寄ってくる。その胸には２０年以上ＳＣに所属した事を証明するバッジが着けられている。
「…そこに並べ。任務の説明をする」
男の声は低くしゃがれ威圧的で、全員を整列させるのに十分なものだった。
「座れ…。私はルドビッチ・ハインケル。この傭兵会社に入隊して今年で３５年になる。今日は貴様達に任務の説明をするために来た」
一同を睨みつけ、咳払いを１回してから話を続ける。
「ここに居る４３名が本日の任務に参加するメンバーだ。
今から６分後に、お前達には後ろのＭＨ二機と護衛用のＭＨ－Ａ一機にそれぞれ乗ってもらう」
そう言って後ろの三機を顎で指す。輸送機は二機ともカーゴルームの扉が開いていて、その内の一機には銃や弾薬といった兵器が黙々と積み込まれている。
「兵員の内わけはそれぞれにパイロット１名ずつ、残りは全員一号機に搭乗してもらう。パイロットはダグラス、機体のコードネームはリーマー１」
そこで紙を一ページ捲り、新たな書類に目を通す。
「…二号機には武器と弾薬を積み込んでいる。パイロットはレイナード、コードネームはリーマー２」
ハインケルは一瞬だけリースのほうを睨み、再び書類の束を捲った。

「三号機はＭＨ－Ａ、護衛機だ。二機を目的地まで無傷で運んでもらう。パイロットはハイネマン、コードネームはリーマー３だ」
そこまで言って書類を脇に仕舞う。
「目的地は東の町ミレース。ここからＭＨで６時間の位置にある山岳地帯の町だ。
所要時間は向こうでの滞在を含めて１３時間。兵員４０名に武器弾薬、ＭＨ－１を依頼主に配送し、パイロットはリーマー１に搭乗、帰還する。以上だ。質問はあるか？」
そういって兵員を見わたす。すると若い傭兵が手を挙げて立ち上がる。
「何だ、言ってみろ」
「はい。ここからミレースまでの道中はそのほとんどが森林地帯です。ミレース自体も治安が悪いわけではないのに、何故これだけの武装を、それも護衛つきで運搬するのでしょうか？」
威圧的な言葉に気圧されつつも男はこれだけを言ってのけた。
「…中々いい質問だ」
ハインケルがキズのある顔をニタっと吊り上げて笑う。
「確かにミレースまでの道中は森林地帯で武装集団が発見されたことも無い。しかし、発見されて無いだけで現時点では偵察すらなされていない。
幸いクライアントからの購入依頼があったため、上空を通過するに際し万が一対空砲火を受けることがあったとしても、対地攻撃能力を備えたＭＨ－Ａ型を護衛につける事で被害を最小限に抑えることができると司令部が判断した次第だが、理解できたか？」
そう言って質問した兵に向き直ると、兵士は頷いて再び座った。
「他に質問は無いな？よし、それでは時間だ。諸君、楽しいフライトを満喫してきたまえ」
それだけ言うとハインケルは書類を持って立ち去って行った。
「指定時刻になりました。各員、輸送機に搭乗してください」
発着場に抑揚の無いアナウンスの声が響き、皆がぞろぞろと機体に

乗り込みだす。
「じゃあなリース。向こうに着いたらしばらくお別れだ」
乗り込む間際にウィルがリースに話しかける。
「そうだな。帰ってきた時には土産話を一つ頼むよ」
「でかいのを持って帰ってやるさ」
最後にもう一度手を振って、リースは武器を満載したＭＨに、ウィルはもう一機のＭＨのカーゴルームに他の兵と共に入っていく。

タンデム式のそこそこ広さのあるコクピットに入り、前の席に座って両肩の二本のベルトをクロスさせ、シートに着ける。
イヤホンとマイクが一体になっているヘッドギアを頭に取り付け、いくつかのスイッチを操作し、コンピュータの電源を入れる。
「――システム起動。ＭＨ機にようこそ。私はナビゲーションＡＩのクレアです」
機械の作動音と共に無機質な機械音声…ではなく、かなり本物に近い音声がイヤホンから発せられる。
「私の機能はこのＭＨ機の管理と点検、及びシステム面での修復で、必要に応じてパイロットに代わり機体の操縦も行います」
「それは中々頼もしいな」
離陸の為の様々な手順をこなしながらＡＩの説明を聞く。
「クレア？」
「はい、何でしょうか？」
待機モードになり指令を仰ぐ。その間にもエンジン音は次第に大きくなり、リースが手順を確実にこなしていく。
「操縦関係は俺に任せて、君はレーダーのチェックを重点に置いてくれ。今から飛ぶ場所ではレーダーでの早期警戒が必要になる。分かったかい？」
そこまで言うと、ＡＩが返答する。
「了解しました。操縦をパイロットに一任、レーダーによる早期警戒システムを最重要項目に設定します」

返答と同時にコクピットについているカラーディスプレイに目まぐるしく文字の羅列が流れ、ＡＩの活動を示す小さなオレンジのライトがチカチカと点滅する。
「設定が完了しました。フライトを開始してください」
離陸準備を整えた事をＡＩが知らせる。
「それじゃあ、荷物の宅配を始めますか」

スロットルを上げて、操縦桿を引き上げる。
辺りに強力なダウンウォッシュを起こしながら、三つの機体が晴天の空に舞って行く。
そして二機の輸送機と一機の護衛機が目的地に向かって基地を飛び立った。

RECORD2：出発（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

二話目の投稿も何とか間に合いました、ａｃｒｕｘです。
できれば週一のペースで連載したいと思うのですが、早くもバテ気味です。
次は十日に一話になるかもしれません。
あと、一つの話に色々詰め込みすぎたと少し反省しています。今後の連載の大きな課題になりそうです。

それでは、次の話に続きます。

RECORD3：白い雲

ミレース近郊に広がる壮大な森林地帯。
上空のオゾン層が破壊されていない自然のままのその森はまさに絶景そのもので、野生動物にとっては数少ない大切な生活場所の一つとなっている。一年を通して木々の実りが絶えることが無く、数多の根によって浄化された新鮮な水が、全ての生き物に注がれる――
そんな大森林の上空を、三機のＭＨが高速で通過していく。
「なあリース。後どのくらいで着きそうだ？」
……かれこれ二時間ほど。

「あともう少しだ」
そう言い放つと、隣りを飛ぶＭＨとリンクするイヤホンから舌打ちが一発。
「もう少しもう少しってなぁ、その答えを一体何回聞いたと思ってるんだ？」
「なら同じ質問を何度もするなよ！」
森に入って一時間が経ったあたりからウィルはずっとこの調子だ。
周りを見渡しても見えるのは一面の緑だけ。
最初はその美しい風景が癒しに一役買っていたが、さすがに延々と同じ景色が続くといい加減飽きてくる。
まだ操縦するという仕事がある俺とは違い、カーゴルームでただ座っているだけのウィルがいち早く痺れを切らしたのだ。
「だけどな、飛んでも飛んでも森・森・森だぜ？緑意外に何か芸は無いのかよ？」
「全く――」
なまじ同じ気持ちな為に、あえて声に出して聞かされると段々イライラしてくる。
うっそうと茂るこの森はその広さゆえに変化に乏しく、景色が変わ

るといえば川に崖、丘に差し掛かった時ぐらいしか無い。さらにヘリより速いＭＨのスピードではほんの数瞬で過ぎ去ってしまうのだ。
「一つ質問するがな、その愚痴を俺が何回聞いたと思ってるんだ？」
口元の小さなマイクに向かってイラつき気味に言葉を投げかける。
「先程の発言を含めて９回目になります」
「…え？」
聞こえてくる予想外の返事に思考が一瞬フリーズする。数秒経ってから、その返事の主がウィルではない事に気付く。
「…いやクレア。ただの雑談だから真面目に答えなくてもいいんだ」
『質問』に対しいち早く答えを弾き出した彼女にため息をつく。どうやらこのＡＩは雑談でもお構い無しのようだ。
（っていうか、こんな雑談さえ記録に残るのか？）
ＭＨには何度も乗ったことがあるが、そんなことは今まで一度も考えた事が無かった。
頭の中に一瞬嫌な予感がよぎるが、かぶりを振って意識の外に追い出す。
「それにこんなに長い時間座ってたら体が訛（なま）っちまうよ」
言葉と同時にウィルが伸びをしているであろう音がイヤホンから聞こえてくる。
「とにかく、後一時間で着くはずだからもう少しだけ辛抱しろ」
「へいへい、りょーかいしましたよ」
ウィルがぶっきらぼうにそう言ったのを最後に、俺達は通信を切った。

「――マズイな」
無線で話していた三十分ほど前とはうってかわって、今の自分の声には一切余裕が無いのが分かる。
原因は目の前の雲だ。

山全体を覆わんばかりの大きな雲が、見事に三機の進行方向を塞いでいる。
ＭＨの搭載しているエンジンは出力の高さも長所の一つだが戦闘機ほどの高出力ではない。まして元々低空での輸送や航空支援が主目的の機体では、いくら高出力とはいえ目の前に重く垂れ込む雲の上を越えていくのはかなり無理がある。
「山の天気が変わりやすいとはよく言ったもんだな」
前進を止めて空中静止した機内でぼやく。こうして話しているうちにも雲はなくなる気配を一向に見せない。
「どうします？あと２～３０分の距離にありますが、このまま突っ込みますか？」
隣で緩やかに上下するリーマー１から再び無線が繋がれる。が、今度はパイロットのダグラスからのものだ。
「迂回するという手もありますが、それでは一時間ほど余計に掛かることになります」
「ん～、直進するのが最善の方法だとは思うんだがな」
「何か問題でも…？」
歯切れの悪い言い方にダグラスが理由を尋ねる。
「ちょっと気になることがあってな」
口元に手を当てて少しの間考え込む。
――確かに、この雲を直進すれば３０分と経たずにミレースに着く。それをもし迂回するような事になれば、時間がかかる上に間違いなく予定に支障が出る。
しかし……
『武装集団は発見されて無いだけで現時点では偵察すらなされていない――』
『上空を通過するに際し万が一対空砲火を受けることがあったとしても、被害を最小限に抑えることができると司令部が判断した――』

任務説明の時のハインケルの言葉が気になる。
（まるでこの辺りに何かいるのを知っているような話し方だった…）
あの時の彼の、何かを思い出すような少し物憂げな表情を俺の頭は鮮明に記憶していた。
「任務説明の時のハインケルの話なんだけどな」
「…途中に武装勢力が出るかもしれない、っていうあの話ですか？」
どうやらダグラスもあの話を覚えていたようだ。
「ですが、もう予定航路のほとんどを飛んでいるのに今の今まで一度もそんな物騒な物には遭遇してませんよ？」
――そう、その通りだ。
これだけの距離を移動しているのに武装勢力らしきものは全く見当たらない。普段の自分なら気にも留めず雲を通るはずなのに……
はずなのに……なんだろう、この胸騒ぎは？
何か良くないことがこの白い塊の向こうで起こりそうな気がする。
そんな漠然とした不安がドロドロと身体の中を這い回っていた。
「やっぱり――」
「私はダグラスに賛成するね」
『最後まで油断はできない』と言おうとしたのを遮って、後ろのリーマー3から通信が入る。
「彼の言う通りだ。既に予定の9割以上を飛んでいるのに、我々は武装兵は愚か、人一人発見していないではないか。目と鼻の先に目的地があるというのに、いるかも分からない敵に怯えて迂回路を取るのは時間の無駄だと私は思うのだが？」
少々高慢で刺々しい口調だが、言ってる事は的を射ていた。というより、胸騒ぎがすることを除けば自分も全く同意見だった。
（そうだ…）
敵はいるのかすらも分かっていない。それならさっさと用事を済ませて帰った方が良いに決まってる。

（どうせ何も出ないさ…）
そう自分に言い聞かせ納得させる。
「…これで決まりだな」
口元から手を離して再び操縦桿を握る。二対一、それも「ただ不安だから」なんて理由では、もはや自分に選択の余地が無いことは明らかだった。
「そいじゃ、雲の中を行きますか」
ほんの少しの不安と共に、再び前進を開始した三機が山に架かる雲の中を突き進んでいった。

「幸い、雷雨を伴う雲ではなかったようですね」
白い視界の中、目視が出来ない為レーダーを頼りに機体を進める一行にダグラスが僅(わず)かな励ましを掛ける。雲に撹乱されて長距離のスキャンができない中、三機の進むスピードはとてもノロノロとした物である。
「クレア」
「はい」
目の前で勝手に動く操縦桿を眺めながら、第二のパイロットへ声を掛ける。
出発前には「操縦は俺に任せろ」なんて言っていたが、さすがにこの視界では自分の技量で安全に操縦することはできない。
だから俺は早々とＡＩに操縦を任せた。プライド？生憎命の方が大事なんでね。
「さっきの迂回路の話について君の意見を聞かせてくれないか？色んなデータや計算なんかをもとにして」
まだ頭の中で燻(くすぶ)っていた事を、手近な話し相手に聞いてみる。
「了解しました」
クレアが言い終わるか終わらないかのうちに、離陸前のように再び目の前のディスプレイに目まぐるしく文字やグラフが流れていく。

そしてＡＩ用のオレンジの小さな表示灯も点滅を始めた。
「…データの統合が完了しました」
終るまでに一分もかからなかった。
レーダーを頼りに機体を操縦しながらの早業に、ＡＩと分かっていながらも感心してしまう。
「あらゆる方面からのデータを収集し計算した結果、ダグラス操縦士とハイネマン操縦士の提案は正しいものであると判断しました」
ある程度覚悟していた答えだが、いざ言われるとなるとやっぱり気が滅入る。
「そうか…」
小さく返事をしてから、目を閉じてシートに少し身体を沈める。少々粗い作りだが、座り心地は悪くない。
……不安はまだ消えないが、内心この答えで良かったと思う。
高度な演算をもってしても危険が無いことが証明されたのだ。多少時間は食ったが、これならきっと予定通りに到着して、イルの待つ夕刻までには帰れるだろう。
「ですが…」
そんなことを考えていた俺に、クレアが更に言葉を続ける。
「ですが、あらゆる可能性について考慮することも時には大切です」
予想外の言葉に閉じていた目を見開く。
「その点では、他の二人の操縦士よりもレイナード操縦士の方がより現実的だというのが私のもう一つの意見です」
静かに締めくくる。
その後しばらく静寂がコクピット内を包んだ。聞こえるのは背後でエンジンの駆動する音と目の前で細やかに揺れる操縦桿の音だけ。
ＡＩがお世辞を？そんな考えが自分の頭の中をよぎる。思いのほか柔軟に設計されている彼女に俺は再度感心した。
「……ありがとう」
「いいえ、計算結果を報告したまでです」
そんな言葉を交わした後、俺は再び瞳を閉じた。

それからしばらくは誰も話さなかった。というよりも、六時間の飛行に疲れてとても話す気にはなれなかった。皆雲に入ったときからとっくにオートパイロットに切り替えているし、あと数十分で着くという安心感も相まって、皆シートに身体を埋めてうつらうつらとしている。
俺以外は。
「リース、まだ雲を出ないのか？」
「お前はまだ黙らないのか？」
あれから再び通信を繋げてきたウィルに、休むに休めずずっと起こされたままだ。
帰りは全部クレアに任せよう。俺はそう決心した。
「全く。窓を見れば今度は白一色と来たもんだ。塗りつぶす意外に能がないのか？」
「何の能だよ、何の」
「大体、何で雲なんかに入ったんだよ？」
他の傭兵達は静かに眠ったり音楽を聴いたりしているのにコイツだけは黙ることを知らない。「口から生まれる」という言葉は奴のために存在すると言っても過言ではないだろう。
ちなみに雲に入る前の相談はパイロット以外には聞かれていない。余計な不安を煽ることになるからだ。
「雲を出るぞ。目的地はすぐそこだ、全員起きろ！」
ハイネマンの声が轟き、それと同時に辺りの風景が今度は白から茶に彩られる。三機は再び山の中を飛んでいた。が、今度は両側が切り立った高い崖というかなり狭い場所を移動していた。所々鋭く突き出した岩を見る限り、多分クレアが操縦していなければ今ここに自分はいなかっただろう。それくらい幅の狭い場所だった。そして水の浸食作用によって削られたのであろう、眼下には流れの速い川が見える。
「お、やっと目的地に到着か！」

ウィルの心底嬉しそうな声が聞こえてくる。恐らくイヤホンの向こうではガッツポーズを決め込んでいることだろう。
「もうこんな景色は見飽きたからな。大体風景っつうのはだな――」
しかし結局、「風景」というものがどんなものなのかウィルの口から聞くことは無かった。

なんとなく川の方に目をやった時、奇妙な物体が視界に入る。
最初は白い点、そして段々と筋のように白い糸を引いて真っ直ぐに昇ってくるそれ。
その白い筋が白煙と気付き、先端に円柱型の人工物を認めたのと、コクピットのアラームがけたたましく鳴り響いたのはほぼ同時だった。
「警告、接近する物体を感知、地対空ミサイルと思われます」
命令によってレーダーを最大限使用していたクレアがいの一番に危険を知らせる。
が、警告を受けても回避するのは不可能だった。
理由は、雲の中を移動していた為に非常に低速度だった事と、両脇を断崖絶壁に挟まれていて身動きがとれなかったこと。
そしてなにより不意打ちだったのが運の尽きだった。
だから、高速で昇り詰めたその白い直線がすぐ背後を飛んでいた機体を貫いても、俺達には何もすることは出来なかった。

予想していた不安が、最悪の形で現実の物となる。

轟音と共に機体が炎に包まれ、爆発の衝撃波でコクピットを覆っている厚さ十センチはあろうかという防弾ガラスがビリビリと振動する。
「リーマー3との通信途絶。交信が不能になりました」
ミサイルが命中したのはハイネマンの機体だった。

外部情報を映す小さなモニターには、ゆっくりと機首を垂れて墜ちていく護衛機が映っている。かろうじてコクピットは無傷のようだったが、もはや垂直に落下する機体からの脱出のチャンスは無いに等しかった。
そして、空中で再度の爆発。
仲間と自身を守る為に着けられた無数の兵器が仇となり、爆発に拍車を掛ける。もはやコクピットからも赤い炎が巻き上がり、機体はほとんど原形を留めていなかった。
「そんな、護衛機が！！ハイネマン！！」
無線からダグラスの悲痛な声が聞こえる。そして間髪を入れずに濁流に衝突した、もはや巨大な鉄の塊と化した物体が三度爆発、霧散する。
「リーマー3からの各種信号が消滅しました。パイロットの生死は不明。ですが、非常に高い確率で死亡したものと思われます」
死体を見ていないため、クレアは「死亡」とは確定しなかったが、激しい川の流れに飲まれてゆく護衛機の残骸を見ればパイロットの生死は誰の目にも明らかだった。
「クソ！スロットル全開、この場を離脱するぞ！」
「りょ、了解！」
嘆き哀しむ時間は無い。今はとにかくこの場を離れることが先決だ。二機になったＭＨがフルスロットルで崖の間を突き進んでいく。
「クレア！操縦をマニュアルに、それと何か護身できる物が装備されてないかチェックしてくれ！」
「了解、マニュアル操作に切り替えます」
先程まで機敏に動いていた操縦桿がピタリと止まり、同時にしっかりとそれを握り締める。本来自動操縦の方が狭い地形では安全だが、敵からの攻撃に対して柔軟な対応が取れなくなってしまうからだ。
「機体装備の再チェック開始」
ディスプレイに機体の上方、前方、横方向から見た簡易図が表示され、部位ごとにチェックが始まる。

そこでまたアラーム音が鳴り響く。
「警告、後方から更にミサイル接近。形勢は極めて不利です」
「あぁ、わかってるさ」
今までこれほどまでに狭い地形をこんな高速で飛んだことは一度も無い。そのせいか、操縦する手が僅かに震えている。ついさっき墜落するＭＨをとらえていたモニターに、今度は胡粉（ごふん）色の煙を出しながら真っ直ぐ追ってくるミサイルが映される。
「レイナードさん！この先で川が二股に分かれてます。それを使いましょう！」
ダグラスの言葉を聞いて前をよく見ると、一キロほど先で濁流がＹ字に分かれ流れている。
「よし、二手に分かれてミサイルを撹乱するぞ！」
「了解！」
追ってくるミサイルは一発。二手に分かれれば片方は助かる可能性が高くなる。
「ミレースでまた会いましょう！」
「ああ！」
『どちらにミサイルが付いても恨みあいは一切無し』
そう暗黙の約束を交わし、俺が右に、ダグラスが左に操縦桿を傾ける。
並走する二機が、同時に二股に分かれる川を左右に飛んで行く。そして二機を追えないミサイルは標的を一機に絞り、そして……右に旋回した。
「チッ！今日はツイてないな」
「同感です」
毒づく俺にクレアが賛同する。
ギリギリの幅しかないゴツゴツとした崖の間をＭＨとミサイルが疾走してゆく。
「機体の装備のチェックを行った結果、現在の状態で有効な防衛策がとれる装備は搭載されていませんでした」

「そりゃマズイな」
本日二回目のセリフを吐く。
上昇して崖を抜ければもう少し派手に動けるかもしれないが、ミサイルの方が遥かに高速なために間違いなく途中でドカンだ。だからといってこのまま飛んでも追いつかれるのは時間の問題だ。
（何か、何か手は無いか……？）
脳みそを普段無いほどに絞り助かる方法を考える。
そして不意に浮かぶ一つの手段。
「そうか……そうだ」
どうしてこんな簡単なことに今まで気付かなかったんだろうか？自分にはあのミサイルを止めることができるじゃないか。
「クレア、操縦頼む！」
ベルトを千切るように外しシートから立ち上がり、コクピットを離れる。さして広くない通路を走り抜けカーゴルームのドアを開けると、依頼主に納入される予定の武器が鋼鉄製の棚の中で整然と並べられているのが視界に入る。パスワードが無ければ開かないその棚の脇を通り過ぎ、荷物運搬用のハッチの前に立つ。
「クレア！カーゴルームのハッチを開けてくれ！」
「了解しました」
天井の隅にぶら下がるスピーカーからクレアの声が響き、機体の後ろに向かってハッチがその口を開けていく。風が辺りを駆ける中目を見開くと、ハッチの向こうに真っ直ぐこちらを捉え追ってくるミサイルが見える。
「目にものを見せてやろうじゃないか」
ハッチが開くと共に伸びてゆく支柱を左手で掴み、右手を標的に向ける。その間にもミサイルはぐんぐん近づき、あと数十メートルという所まで接近している。
その時、自分の手を何本もの眩い光の線が包む。バチバチと音を立てながら光が腕の周りを舐めるように這うその姿は、さながら雷を腕に巻きつけているようである。

「またな、デカ物」
そう言い放ち腕に精神を集中させると、腕の辺りを漂っていた雷(いかずち)が標的めがけ一斉に放たれる。そしてそれらはミサイルを喰うかのごとく包んでいき、その内部の電子回路を破壊していく。
標的を追う能力を失ったミサイルは突如空中で爆散した。
「よっし！」
左手はそのままに右手だけでカッツポーズを決める。
しかし詰めが甘かった。今までミサイルに追われた事など無かった自分に、ミサイルの爆発力を知る由など無い。だから、その爆風と破片が間近に迫ってやっと「あの距離での爆発じゃ無事ではすまない」事を理解する。
「クレア！！今すぐハッチを閉めてくれ！！」
「了解しました」
スピーカーからの声と共にハッチがゆっくり閉じられていく。しかし、とても迫り来る破片に間に合うスピードではなかった。
「うわっ！」
納入品の棚の後ろに飛んだのと同時に、金属片がカーゴルーム内に吹きつける。機体が揺れ、辺りに摩擦で火花が散ったが、数秒で静寂が戻った。
「痛つっ」
飛び込んだ拍子にしこたま打ち付けた頭をさすりながら起き上がる。ハッチが閉じきった部屋の中は薄暗く、微かに鉄と炸薬の香りが鼻を抜けていく。天井に付いた電灯の明かりだけが辺りを照らしているが、それすらも突き刺さった破片で消えていたり明滅していたりして、何とも不気味な雰囲気を醸(かも)し出していた。
「……戻るか」
ポンポンと身体の埃を払い、ポツリと呟いて一人カーゴルームを出る。
「何とか助かったみたいだな」

コクピットに戻りベルトを着けながら束の間の勝利に浸る。
「レイナード操縦士」
「…ん？」
「二つ……大事な報告があります」
不意に名前を呼ばれる。ＡＩにそんなことができるのかは知らないが、心なしか声が沈んでいるような気がした。
「言ってみてくれ」
促すと、彼女は語り始めた。

「――以上の二つです」
「……」
クレアが報告を終え、機内を再び静寂が包む。
ただ少し違うのは、後ろのエンジン音が少し大きくなっていることと、自分の気持ちがどうしようもなく沈んでいるということ。

本当に、束の間の勝利だった。

クレアが報告した二つの事。それは良い知らせではなかった。
一つ目は、ミサイルの爆発で機体と機能の一部が破損したということ。
しかしこれは許容範囲内だ。無線装置が吹っ飛び、エンジンが少し焼けてしまったが、無理な飛行をしなければミレースまでは十分飛べる程度の物だそうだ。
そして二つ目。
まだハッキリとは分からないが、俺がカーゴルームへ行っている間にリーマー１が撃墜されたらしいということ。
聞いたときは一瞬耳を疑った。
あの機体には４１人の傭兵が乗っていたのだ。それにダグラスとは「またミレースで会おう」と固く約束した。

そして何より、あの機体には自分の親友が乗っていたのだ。
まるでナイフで心臓を抉られたような気分だった。
クレアが言うには、墜落したのを確認したのではなく、機体からの信号がキャッチできなくなったから、それも爆発とほぼ同じだったので機器の故障かもしれない、という事だが、この状況では余り説得力が無かった。
「とにかく、まず目的地に向かいましょう。このままではいつこの機が再び攻撃を受けるか分かりません」
「……そうだな」
励ましなのか、嫌気がさしたのか……いや、そもそもそんな感情がＡＩにあるのかすら分からないが、少し強めの口調で急かすクレアに渋々従う。
「クレア、確かこのＭＨには射出できるタイプのフライトレコーダーが積んであるよな。それもＧＰＳ発信機付きの？」
「はい、緊急時用に一基積まれています」
「それにリーマー１の情報と現在の状態、それと後続の部隊を要請するように追加で書き込んでくれ」
「了解しました」
モニターに図や文字が流れ、オレンジの表示灯が点滅する。
「完了しました」
「よし。それじゃ、発見しやすそうな場所を探そう」
３０秒もかからずに書き込みが終わる。
ＭＨは既に崖の間を抜け出して、再び森の中を目的地に向けて進んでいた。
その途中に小さな平地を見つけ、ゆっくりと上空を通過する。
「やってくれ」
「了解、フライトレコーダー射出」
一度バンという破裂音がコクピットの後ろで聞こえた後、機体の中央付近から少量の燃料を積んだ小さな箱が打ち上げられる。

シュウウウウ……バフッ！
燃料に点火してしばらく上昇した後、箱の上からパラシュートが展開され、ゆっくりと平地に落ちていく。
「射出完了」
「…行こう」
箱が無事に平地に落ちたのを確認してから、俺達は目的地に向かった。

「……今日は本当にツイてないな」
「同感です」
あれからミレースまで１０分とかからなかった。今俺達はミレースの上空を飛んでいる。
……誰もいない、静寂に包まれた町の上を。
町はまるで小さな紛争の後のようだった。
元々余り大きくない町のようで、高い建物と言っても十階くらいのビルがせいぜいだったし、どの建物も余り新しい物ではなかった。
それがあちこち壊され、崩れている家もあれば公道で炎上する車もあり、何より人っ子一人居ないゴーストタウンの様なこの有り様はかなり不気味だった。
「一体何があったんだ……？」
「恐らく戦闘の類のものが起きた様ですが、死体すらないのは不自然です」
「そうだよな…」
もはや基地に帰れるだけの燃料も残っていない。どこかで補給を受けなければ自分達の命も危うい。
「もう少し見てみよう」
「了解」

そのまま町の外周を飛んでみると、何かの工場が目に入る。
この町には不釣合なほどにその工場は大きかった。広い敷地には建物がいくつかのブロックに分かれて建ち、何かの貯蔵タンクのような巨大な円柱形の塔もある。どうやら今は稼動していないようで、数本突き出た高い煙突からは煙が出ていなかった。
「警告、工場の中央部から微量の放射線を感知」
「放射線？」
突然の警告に首を傾げる。この工場では一体何が作られていたのだろう？
結局、それ以上接近できないためにそこでの収穫は何も無く、人も居ない上に疑問がまた一つ増えてしまった。
「分からないことだらけだな…」
そう呟いて操縦桿を傾け、もう少しだけ町の外側に向かって飛ぶ。
ここまで来ると建物といえば家がまばらに立っている程度だった。
「この辺りは平原地帯で人口の施設はほとんどありません」
「みたいだ…な……？」
クレアの言う通り、町の外れにあったのはなだらかな平原だった。
そこだけは木の変わりに踵にすら届かないような丈の短い草が生い茂っている。
そして、そこには４つの影が動いていた。
「やっと人に会えたな」
「ですが、あまり穏やかな雰囲気ではないようです」
「ああ」
そこには４つの影があった。が、正確には人一人を3台のジープが追い回していた。
追いかけられていたのはどうやら女性のようだ。遠目ではっきりとは分からないが、走る背中で髪が波打っているのと、手の振り方が女性の物だった。
「どうしますか？」
「助けるしかないだろう！」

そう言って一気にジープに近づく。
なんとなくだが、町をあんな状態にしたのはあのジープの奴らの様な気がしてならなかった。
「ですが、この機体には攻撃の為の装備は……」
「無けりゃ作ればいい！」
ある程度接近するとジープ側も気付いたのか、後部座席の銃座から一斉に発砲する。しかし、自分達が危険な状況にあるにも関わらず、銃口の先はこちらではなく走る女性の方に向けられる。余程逃したくない相手なのだろうか。そして足元を撃たれて女性が転倒する。
「一撃で行くぞ！」
もはや一刻の猶予も無かった。機体を操作して垂直着陸モードに切り替え、エンジンをフルスロットルに上げそのままジープの上を通過する。
「警告、エンジンに過負荷がかかっています。停止の危険あり」
「あともう少しだけ耐えてくれ！」
コクピットに響く警告に無意味に怒鳴り返す。
『彼女を助けなければ』
その想いだけが今の頭を占領していた。
あの女性は町に何があったのか知っているかもしれない。もしかしたら、彼女があの町の人なのかもしれない。
聞かなければ。絶対にあの町の、依頼主の情報を手に入れなければ。そうしなければ消えていった奴らが……ウィルが……浮かばれない。
今まで後方に噴射していたジェット排気が真下に向けられ、数千度の熱風が三台のジープを直撃する。そして熱に耐え切れなくなった三台のジープは見る見るうちに炎上し、爆発していった。
「彼女はどうなった！？」
旋回して女性の安否を確認しようとする。が、操縦桿がいうことを聞かない。
「動力部と各種配線が破損しました。操縦不能です」
「な…」

気付けば背後のエンジン音がありえないほどに大きいものになっていて、時折ゴンゴンと不規則な機械音を出している。
アラーム音が鳴り響き、点滅する警告灯によってコクピット内が血の色に塗り替えられた。
少しだけ右に傾きながら、平原近くの森に向かって真っ直ぐに突っ込んでいく機体。
「クソ！ここまで来て…！！」
自分の声が空しくコクピットに響く。

そしてなす術も無く機体は木々に衝突し、俺の意識は闇に呑まれていった……

RECORD3：白い雲（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

今週もなんとかアップできました。
最近本当に時間がありません。平日には書ける時間がほとんどないし、休日は他の趣味に没頭してしまいます。
十日で一話、トイチの更新になるのは時間の問題のようです。
小説の方も少しずつ軌道に乗って……きたんだろうか。
こんな物でも読んで下さる方が僅かながらいらっしゃるようで嬉しい限りです。

さあさあ、次回に続きますよ。

RECORD４：襲撃、そして救済

少女は息を潜めてその時が来るのをずっと待っていた。
…いや、正確には『恐れていた』と言った方が良いだろう。
年の頃は１９くらいだろうか？イスに座って、本来は研ぎ澄まされたサファイアのような露草色の瞳を閉じ、華奢（きゃしゃ）な腕をテーブルの上に乗せて両手を組み、祈るような格好をしている。彼女の腰まで届く黒を織り交ぜたような栗色の髪が微かに震え、彼女の今の心境を具（つぶさ）に語っていた。

少女の名前はフィノール・レセル。

彼女は何も無い部屋の中にいた。まるで引越しした後か、そうでなければ引越しした直後の様な有り様。あるといえば比較的大型の必要最低限の家具しかない。
この家にあった荷物は昨日までに全て他の所に移していた。この家とは……多分今日でお別れだから。
まるでその部屋だけが時間の歩みを止めているようで、壁にかけてある丸い時計だけがカチ、カチ、と静かに時を刻んでいる。
できることなら来て欲しくなかった……いや、いまでも来て欲しくないと思っている。
部屋の窓から見える町並みには誰もいない。
山岳地帯にあるため元々小さく坂道がとても多い町だが、それでも数百人の町民が明るく平穏な毎日を送っていた。

だがそれも昨日までの話。
町から見渡せる森の一角に、深緑に紛れて装甲車が群れをなしてやってくるのを見張りの人が見つけるまでの事だ。
少女は青い瞳を開け、テーブルの上においてある写真立てを見つめ

た。
その古ぼけた写真立ての中には3人分の笑顔が納められている。
柔和な微笑みを浮かべる美人の女性に、満面の笑顔を振りまく小さな女の子。そしてその女の子を抱きかかえて女性の横に立ち、快活そうな笑顔を見せている男性。
思えばこれが少女にとって最初で最後の家族写真だった。
母はこの写真を撮った次の年に病気で死んだ。元々病弱な母だったからある程度覚悟しなければいけなかったのに、葬儀の時にはまだ幼かった事もあって一晩中泣き続けていたのを覚えている。
そんな少女を一生懸命支えてくれたのが父だった。でも、その父も2年前に癌を患って死んでしまった。
だから今、彼女は父ととても仲の良かったおじさんの家に居候させてもらっている。

フィノールの父は先月閉鎖された町外れの大きな工場で働いていた。町の外に工場があることは彼女も知っていたが、何をつくっているのかはそこで働く上層部の人以外には秘密にされていた。何でも、前町長の時に取引先がお金にものをいわせて建てた物だそうで、余程まずい物を作っているのか、詳しいことを知らない警備の職員にすら緘口令（かんこうれい）が敷かれている程だ。そしてそこで働いている人から次々と病人を出しているいわく付きの場所でもあり、作業員のほとんどが気味悪がりながらも賃金の為に嫌々働いているきらいがあった。何の工場なのか上層部に勤めていた父に尋ねてみた事もあったが、ただ首を横に振るばかりで他の人に聞いても皆同じようなものだった。
それでも少女は、日に日にやつれてゆく父に見兼ねて一度激しく問い詰めたことがあった。その時にも彼は、「決して人に話して誇れる物では無いんだ」とだけ答えて、それ以上は頑なに口を閉ざした。
今思えば、あの工場が全ての始まり――
少女は組んでいた手を解き、イスから立ち上がって壁に掛けてあっ

た上着を羽織り、家の外に出た。

春の山は都会から見ればまるで真冬のように寒い。上着無しでは間違いなく風邪を引いてしまうだろう。

少女は一度身震いしてから、今日で別れる事になるこの通りを見渡した。

町は朝からシンと静まり返っている。

耳が痛くなるほどの静けさに冷たい風が身を切るように吹き付け、昨日降った雨の名残りが石畳の坂をキラキラと濡らしている。

そして、耳をすませば何十もの低いエンジン音が聞こえてくる事からして、もうここに居られる時間はほとんど無いようだ。

「フィンちゃーん！！」

自分の愛称を呼ぶ声に振り向くと、坂の上から一人の男が走り寄って来る。男の背丈は１７５センチくらいで、首にかかるくらいの黒髪に細長い銀縁の眼鏡をかけている――近所の喫茶店で働いているお兄さんだ。

「フィンちゃん…ハァ…やっぱりここに、フゥ……いたのか…」

両手を膝に乗せ肩で息をしながら、彼は安堵の息を吐いた。

「どうしてお兄さんが？アーサーおじさんが来るはずじゃ……？」

そう言うフィノールを制して、彼は彼女の腕を掴む。

「君のおじさんはこんな状況だから、仕事が忙しくなってこっちに来れなくなったんだ。代わりに僕が頼まれた。急ごう、奴らがすぐそこまで来てる！」

「え、あ、はい！」

そのまま彼女を引っ張って石畳の町並みを疾走して行く。

途中に、街路に向けて張り出した小さなカフェテラスのある店舗を横切る。自分も何回か行ったことがあって、キャラメルマキアートがとっても美味しいと女の子の間で評判になっていた喫茶店だ。

「全く、あの店もやっと８年目に入ったっていうのに」

そして、隣を走りながら毒づく彼の経営する店でもある。

（あそこには父さんと母さんと一緒によく行ったっけ…）
家から近いこともあって休日には家族と何度も通っていた、とても思い出深い場所。
「……あ！写真！！」
次はいつあのお店に行けるんだろうと考えていた時に、両親の形見を部屋のテーブルに置き忘れていたことに気付く。
「写真？……え、おいフィンちゃん、何処に行くんだ！」
失礼だとは思いつつも、彼の腕を振りほどき、フィノールは今来た道を戻って行った。
「忘れ物を取って来るだけですから、お兄さんは先に行っててください！」
振り返りそう言いながら、転がるように雨で湿った坂道を下っていく。さっきの喫茶店を通り過ぎ、見慣れた町並みを走りぬけ、やっとのことで自分の家に着いた。
中に入ってテーブルの上の写真を上着のポケットに仕舞い込み、急いで家を飛び出す。さっきよりも幾分か大きくなった軍勢の迫る音を背に、再び坂道を駆け上った。
しかし、別段鍛えているわけでもない少女の身体では、この坂道をもう一度登るのはとても無理な事だった。再びカフェテラスの前まで来た所で、疲れのあまり立ち止まってしまう。
「ハァ…ハァ…、あと…もう少し、だから……」
自分にそう言い聞かせながら、疲労が溜まる体に鞭打ち再び走り出す。
お兄さんと別れたところまで戻ってくると、既に彼の姿はなかった。
恐らく彼女を信用して先に出発したのだろう。
フィノールも後を追おうとそこを通り過ぎようとした、その時。
ブロロロロロロロロロッッッ！！
「！！」

突然近づいてくる車の音に、彼女が咄嗟(とっさ)に建物の陰に身を隠す。
「この町の人間を探せ！！一人でいい、奴等の居所を何としても聞きだすんだ！！」
恐る恐る覗いてみると、薄汚れた迷彩服を着た白髪交じりの初老の男が、十台ほどあるジープを率いて拡声器で後続車に命令を出しているのが見えた。そして彼女が隠れている物陰の前をジープが次々と通り過ぎ、その先にある十字路でみな散り散りに走っていった。
（どうしよう……）
皆がいるところまではまだかなりの距離があるのに――
写真を取りに戻ったことを若干後悔したが、今となっては後の祭りだ。
（でも……行かないと）
こんな所に隠れていても状況が好転する訳ではないし、見つかるのは時間の問題。それなら、見つかるのを覚悟で走ろう――
そう思い当たって、上着からあの写真を取り出し、笑顔の両親をしばらく見つめる。
「……」
両親に願掛けをした後写真を上着に入れて、路地から見える通りに誰もいないことを確認してから、少女は勇気を振り絞って再び走り始めた。

「ハァ、ハァッ…！」
「いたぞー！！町の外れに女がいる！！」
後方のジープから声高に叫ばれる報告が、彼女に見つかってしまったという事実を叩きつける。
町中では上手く切り抜けられた。小さい町は隅々まで知り尽くしていて自分の庭のようなものだったから、徘徊する敵の狭間を縫うよ

うに進むことができた。それでも、周りに身を隠せる場所が無い郊外の草原となれば話は変わる。
高い所でも膝にすら届かない程度の雑草しか生えていないこの平坦な土地では、土地勘云々以前にまず敵の目に触れることとなった。
「絶対に傷つけるな！無傷で捕まえて残りの居場所を吐かせるんだ！」
後ろから響くその言葉に全身に鳥肌が立つ。その一言で、自分が走るのを止めた時一体どんな目に遭うのかが容易に想像できた。もはや逃げ切れないという思いが頭の中を支配する中、それでも自分の本能が警鐘を鳴らす間はその足を止めようとはしなかった。しかし現実は非情なもので、追ってくる3台のジープは瞬く間に彼女との距離を縮めて行く。
町から出る途中、彼女は自分の故郷を救ってくれるかもしれない最後の望みを絶たれていた。

（聞いたか？ここの奴らが呼び寄せた用心棒、全滅したらしいぞ）

身を潜める自分の前を通り過ぎていく二人の男の会話に、彼女は自分の耳を疑った。
（不意打ちかけたらあっという間に粉々だったらしいぜ）
（だけど一機だけは墜落したのを確認してないんだろ？）
（ろくな装備も積んでない輸送機如きが逃げ切れると思うか？今頃そいつも川の底さ）
その二人の会話は彼女に……いや、町の人全てに向けての死刑宣告そのものだった。
工場の閉鎖は、誰でもない町長自身の独断で決められた。

しかし、町長に与えられたのは批判でも中傷でもなく、最高級の栄誉だった。労働者から次々と病死者を出す工場との――この町と奴らとの――忌々しい繋がりを断つ為に、既に町民の決心は一つに固まっていたのだ。
契約は一方的に断ち切られ、向こうが黙っているはずがないと踏んだ町長は、奴らと戦う為に自らの貯えを削ってまで傭兵をかき集めたのだ。
そして、町の人達がここまで一致団結出来ているのは、確かに町長の手腕とカリスマ性の賜物でもあるが、何より自分達に心強い味方が付くという気持ちがあったからこそだった。
その唯一の頼みの綱が切れたとなれば、戦う力が無いに等しい町の人達に残された道は『死』しか無い。
（今頃そいつも川の底さ――）

それでも……それでも……！！

再び頭の中に響く声を振りほどき、彼女は走り続ける。
たとえそれが無駄なことだとしても、今の自分にはそうすることしか出来ないから。どんな時でも決して諦めるなと、父から教わったから。
だから――少女は走る。止め処なく溢れる涙を振り払い、己の力の限り。
その時、辺りの地面が激しく抉れ、土の塊をあちこちに撒き散らしていく。後ろからは激しい銃声が絶え間なく響き、自分を追ってくるジープとの距離はもう５０メートルと離れていない。

ドスッ！！

刹那、そこら中で聞こえていた低音がすぐ足元で響く。と共に大きく開いた穴に足をとられ、視界が揺らぐ。長い髪が宙を舞い、その

まま前のめりに倒れてしまった。
「いっ！！」
身体をかばう為に突き出した右腕に鋭い痛みが走り、苦痛に顔を歪める。もう起き上がる体力も残っていない。自分に迫ってくる死の音が確実に大きくなる。
（もう駄目……）
悔しさに雫を溜めた瞳を閉じ、彼女がそう思ったとき――

「キィィィィィィィンッッッ！！」

不意に空に響く、耳を引き裂かんばかりの高い、鋭い音。
それが地上を走る車のエンジン音でも、辺りに硝煙の匂いを撒き散らす銃声でもない事は、うつ伏せに倒れている自分にもはっきりと理解できた。頭を上げて後ろを向いたときに見えたのは、紅蓮の炎に焼かれる三台の鉄屑（ジープ）と、その上を滑空しながらあたりに熱風を巻き起こす一機の輸送機だった。
流線型など微塵も念頭に入れていない無骨な作りの機体。シルバーに統一されながらも所々剥げ落ちている塗装。就役してから１００年以上経つにも関わらず未だ現役であり続けられる、繊細で、それでいてタフな設計。そして、機体の側面に描かれている、大きな『ＳＣ』の文字。
見間違うはずが無かった。
それは、この町の皆が待ち焦がれていた一筋の光。そして、町で『消えた』と自分が聞かされていたもの。
草原に突如現れた一機のＭＨは目の前で彼女に迫る追っ手を瞬く間に灰に帰していく。しかし、全滅したはずの部隊がどうしてここにいるのかはともかく、その機体がまともな状態で無いことだけは一瞬で理解できた。
自分を助けてくれたＭＨはその後ろ半分、特に尾翼の所が酷く傷ついていて、それが影響しているのかさっきからバランスを保つのが

やっとの状態で飛んでいる。片方のエンジンからは異様な音と共に黒い煙が絶えず噴き出していて、自分が見ている間にもどんどん高度を下げていく。
「そんな、ダメ！！」
無傷だった左手を伸ばして必死に叫ぶが、その声が届くはずも無く、少女の命を助けたＭＨはその少女の目の前で森の中に墜落していった。
「――ンちゃーん！フィンちゃーん！！」
今ならまだ間に合うと、ボロボロになった身体を立ち上げ森の方へ向けようとしたとき、町中で聞いたのと同じ声で再び自分の愛称を呼ばれる。振り向くと、町のほうからあの喫茶店のお兄さんが血相を変えて走って来るのが見えた。
「フィンちゃん！良かった、無事だったんだ……って、フィンちゃん、大丈夫かい！？」
近くまで来てやっとフィノールが怪我をしていることが分かり、慌てて彼女に肩を貸す。
「私は…大丈夫です。それよりも、あの人が……あの人が……」
「あの人？森に誰かいるのかい？それにこの有り様は――？」
フラフラになりながら尚森に向かって歩こうとするフィノールをなんとか宥め、彼は事情を尋ねた。

「――本当にすまない。あの時君の事をずっと待ってたんだけど、途中でジープの奴らが来てしまって隠れるしかなかったんだ。いなくなるのを待ってから戻ったんだけど、フィンちゃんが来る気配は無いし…。もしかしたら先に行ったのかと思って町を出たら、大きな爆発音が聞こえたんで急いで駆けつけてみたんだけど……」
森の奥に向かって歩きながら、もう一度自分の肩に腕をかける傷だらけのフィノールを見、遥か後ろで小さく燻ぶっている元ジープを遠目に見た。

「だけどフィンちゃん、本当に――？」
立ち止まりフィノールを支えながら、男は情と悲しみの混じった目で彼女を見る。すると少女は沈んだ顔で男を見て静かに頷いた。
「そうか、傭兵達は全滅したのか……」
彼はそれだけ呟いて、再び歩みを進めはじめた。
話は大体彼女から聞いた。装甲車の部隊が自分達が雇った傭兵達を攻撃して、それによって部隊が全滅したという話を漏れ聞いたこと。ジープに追われたときに、全滅したはずのＭＨに助けてもらったこと。そして、自分の命を救ったＭＨが目の前で墜落したこと――。二人はゆっくりとした足取りながら、森の中をまるで自分の家の庭のように苦も無く進んで行った。二人ともこの森については詳しいし、何より木の間から見える高く立ち上る煙のおかげで目標を見失うことは無かった。
「だけど、全滅したはずなのにどうして一機だけ残ってたんだろう？もう僕達には増援を雇うお金は無かったはずなのに……」
「私が町で聞いた話では、不意打ちをかけて攻撃したけれど、一機だけは墜落したのを確認していないとも言っていました。たぶん、その一機が逃げ切ってくれたんだと思います」
男の頭に最後まで残っていた疑問に、フィノールが自分の推測を繋げた。
「お、もしかしてあれじゃないのか？」
頭を上げて彼が指差した方を見ると、地面に横たわって辺りに煙を撒く巨大な影が見えた。その影に木漏れ日が当たり、シルバーの機体に擦れた『ＳＣ』の文字を浮かび上がらせている。
「昨日雨が降ってたのが幸いしたようだね」
墜ちた機体を詳しく調べながら、彼は辺りの地面を指差した。見てみると、自分達が立っている場所は酷いぬかるみの上だった。それがクッションになったようで、墜落したにも拘らず機体はほぼ無傷の状態を保っていたのだ。
……余談だが、その雨を降らせた雲のせいで彼らがこんな目にあっ

たという事実を二人が知ることは、後にも先にも無かった様だ。
「確かに、これは僕らが傭兵を雇った会社の輸送機みたいだ」
機体を調べてぬかるみに埋まったカーゴルーム以外からの入り口を探しながら、彼が確信したように言う。
「損傷が少なくて良かった。この一機だけでもエンジンを交換したり修理すればまだ動きそうだし、もしかしたら中には搬送されるはずだった武器もあるかもしれない――」
「お兄さん！！」
機体側面にあったパイロット用のハッチのロックをいじりながらそんなことを言う彼に、普段は滅多に怒ることがないフィノールが痛みを堪えて声を張り上げる。
「不謹慎です！！中にはまだ人が取り残されてるんですよ！？」
「あ…」
それを聞いて彼はバツの悪そうな顔をする。
「……すまない。確かに君の言う通り、ちょっと軽率だったみたいだ…」
「分かってくれたなら、ここから最初に連れて行くのは武器や弾薬じゃなくて人間にしてあげて下さい」
彼は再び優しい声に戻った彼女に「分かった、そうしよう」と答えて、再びハッチと対峙した。すると、一分と経たずに『ガチャリ』という音を立ててハッチが機内に引っ込んだ後、横にスライドして中に続く狭い通路を露呈させた。
「よし、これで中に入れる」
「コクピットはこっちですよね？」
「あぁ、ちょっと待ってくれ！」
オレンジの非常灯が明滅する薄暗い通路を歩き始めたフィノールを彼が慌てて制する。
「まずはこの機体の状態を確認しないと。……違う、そういう意味じゃなくて！これがすぐに爆発しないとも限らないだろう？ここが本当に安全かどうかの確認をするだけだから！」

一瞬自分の発言に眉を吊り上げた彼女にたじろいだが、両手を振って弁解する。
「でも、それを確認するのにもコクピットに行くのが最も適切だと思うんですけど？」
「僕もそう思う。だから僕が最初に中に入ろうと思うんだ。君は僕が安全を確認するまで出口のそばで待っててくれ」
力説する彼にフィノールが渋々了承すると、彼は僅かに表情を曇らせた。
「それに、フィンちゃんも分かってると思うけど、この先にいるのは怪我人じゃなくて死体かもしれないんだ。それにもしかしたら会社が同じってだけで僕等が雇った傭兵かどうかも分からない。もしもの時に君だけでも逃げ出せるように、僕が呼ぶまで出口の所にいて欲しい。それからもし、１０分経っても僕が何も言わなかったら、君一人だけで皆の所まで行くんだ。いいね？」
最後にもう一度同意を促して、彼はコクピットに続く通路の先に消えていった。

「フィンちゃん来てくれ！大丈夫だ、パイロットも生きてる！」
彼女が待ち望んでいたその言葉をかけられたのは、彼が去ってから４分が経った時だった。声が聞こえるとすぐに、オレンジ色に染まった通路を、痛む体が耐えられる限りの速さでコクピットに続くスライドドアまで走る。そのまま狭いコクピットに入ると、彼がシートに寄り添ってパイロットの様子を診ていた。
「どうやら気絶しているだけのようだね。息もしてるし、脈もある」
そこは思いのほか綺麗だった。
縦に長い複座のコクピットは機体と同じにほぼ無傷のままで、全面に張られている強化ガラスのような物も一枚も割れていなかった。
ただ、消えた照明、頻繁に計器から飛ぶスパーク、ディスプレイに

表示されている「ＳＹＳＴＥＭ（システム）　ＡＬＥＲＴ（アラート）」の文字、そして気絶しているパイロットが、この輸送機が確かに墜落した事を物語っている。
そこでフィノールは初めて命の恩人の姿を見た。
シートに身体を預けて静かに息をする様は、恐らくこの状況を知らない人が見れば休憩していると勘違いしただろう。
恐らく年は２０代前半くらい。少し癖っ毛のある黒い短髪に、バランスのよく取れた体つき。瞳の色は分からないが、その整った顔はモデルとしても通用しそうな程だ。左耳には通信用のヘッドギアを着けていて、細いマイクが口元まで伸びている。
そして、お兄さんが彼を背負った時に身長が高いことも判明した。
「な、何だ？こりゃまた随分と軽いな、彼は」
まるで全然重くないリュックでも背負っているかのように、彼はその場で何度か跳ねて見せた。
「さ、フィンちゃん」
そしてフィノールに手を差し伸べたが、彼女は首を横に振った。
「私はもう大丈夫です。それに、お兄さんも二人は大変でしょう？」
左手で力こぶを作りながら微笑みかけると、案の定、彼は苦笑いして目線をそらした。
「い、いやあ、助かるよ。さすがフィンちゃんは鋭いなぁ。確かに、いくら君らが軽くても二人運ぶのはちょっと骨が折れるかなぁと思ってたんだ」
そう言って背中の男をあごで指す。
「でさ、助かるついでに一つお願いがあるんだけど、いいかい？」
「何ですか？」
聞き入れる体勢をとると、彼はシートの横から二つのアタッシュケースを出してきた。そのうち一つは何処にでもある普通の大きさのケースだが、もう一つのケースは中にバイオリンか何かが入ってるんじゃないかと思うくらいに長かった。
「これ、彼の個人的な所持品みたいなんだけどね、次にここに来る

のがいつになるか分からないから持って行ってあげようと思うんだ。もしかしたらとても大事なものか、役に立つものが入ってるのかもしれないしね」
フィノールが頷いて左手を出すと、彼は小さい方のケースを彼女に手渡し、自分は長いケースを手に取った。
「よし、早いとこ彼を診てもらわないといけないし、そろそろ皆の所に行こうか。ここからなら３０分とかからないだろうし」
「そうですね」

唯一の生存者であり、少女の命の恩人でもある男を伴って、二人は『目的地』を目指し歩き始めた。

ＲＥＣＯＲＤ４：襲撃、そして救済（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

皆さん再びこんにちは。懲りずに続編の投稿を続けるａｃｒｕｘです。

今回の話は御覧のとおり「ＲＥＣＯＲＤ３」の別視点バージョンです。この一話で前回の話の疑問部分を補完していただければ幸いです。

次回からはちゃんと進行しますので、定期購読されたい方は以後も本作を観察してやってください。

といったところで、次回に続きます。

RECORD5：一つの質問と三つの視線

夢には、いろんな種類がある。
嬉しい夢、楽しい夢、信じられない夢に、悲しい夢もあれば、起きた時の機嫌が悪くなるほど神経を逆撫でする夢もある。
そして、悪夢。

リースは目を覚まして、ゆっくりと起き上がった。
と同時に、頭に走る鈍痛と眩しい閃光にすぐに瞳を閉じる。
「っ…」
頭に手を当ててみると、痛みと共に手に伝わる布の感触……包帯だ。
それからゆっくりと目を開けると、辺りの様子がだんだんと映ってきた。
そこは病室だった。
見てくれはかなり古ぼけていて、薄汚れたリノリウムの床に、壁の所々にシミがついて、天井のタイルに至っては一部が剥がれているような有り様なのだが、自分が寝ていたベッドのシーツと毛布、それに隣の小さな棚に乗せているコップと水差しはどれも真新しく、清潔だった。コップは丁寧に逆さまにしてナプキンの上に置いてあり、水差しには澄んだ水が入っている。
どうやらここは個室のようで、割と広い部屋にしてはベッドが一つしかなく、ベッドの脇には背もたれの無い丸いパイプ椅子がいくつか置いてあった。そして閉めきった部屋の窓からは温かな日光が降り注いでいて、リースは一目でさっきの光の正体がこれだと分かった。
「ここは……」
だが残念な事に、リースにはここが一体何処なのか皆目見当がつかなかった。自分はこんな部屋を今まで見た事が無いし、第一、自分

がどうしてこんなところにいるのかも分からない。まだ回転数が上がっていない頭で混濁した記憶を必死に手繰り寄せると、やがて一つの結論に達した。
「そうか……俺は墜落したのか」
苦々しく吐いた言葉に、それまでの記憶が矢のようにリースの脳裏を駆けていく。
基地での話、山を覆う雲に、突然の不意打ちで消えていった仲間達。誰もいない廃墟の町に、放射線を吐く謎の工場。そして……
「そうだ、あの子は――！？」
リースは自分が助けようとした少女の事を思い出した。
ジープに追われて必死に草原を走っていた彼女。三台のジープを何とか潰して、それから――。
あの時は気を失ってしまったせいで、結局彼女がどうなったのか覚えていなかった。
これからどうしようかとリースが途方にくれていると、不意に部屋の扉が開いて外から二人の人間が入ってくる。
「お、やっとお目覚めか！」
「…ご気分はいかがですか？」
一人は、厚手のシャツにジャケットを着込んでいるラフな格好の恰幅のいい中年の男性で、人の良さそうな優しい顔にちょっぴりのヒゲを蓄えていた。
「やあ傭兵くん。気分はどうだね？」
男は快活そうに笑いながら、手近にあった安物のパイプ椅子を手に取りその上にどっかり腰掛けた。そして胸元に閉まっていた煙草とライターを取り出して火をつけるまでの間、子供のような黒い瞳でずっとリースの事を観察している。
「おじさん、煙草は…」
「え？おお、いかんいかん」
隣からそう言われて、おじさんと呼ばれた男は「ついいつものクセでな」と恥ずかしそうに煙草の箱とライターをしまった。

そして男を「おじさん」と呼んだのは、さっき彼と一緒に入ってきた少女。
その容姿はリースよりも背が低く年も下のようで、青に統一された落ち着いた服装とズボンに、それに合わせた色の厚手のストールを羽織っている。腰の辺りまで届く長い髪は黒と茶の混色で、濃い栗色に黒曜石を溶かしたような黒が見事にマッチしていた。
そこまで眺めていると、リースの頭の中にわいてくる妙な既視感。
そのぼんやりとした何とも形容しがたい感覚は、令嬢のような清楚で整った顔つきと、リースよりも幾ばくか光の透く、大人びた露草色の瞳を見たときに確信へと変わった。
「君はあの時の……」
「その節は本当にありがとうございました」
少女は両手を前にそろえて瞳を閉じ恭しく頭を下げた。彼女はまさにＭＨのコクピットから見た女の子と同一人物だった。
「どうやらワシの愛娘が君に命を助けられたようでの、色々と話すついでに一つ礼を言いたくて来させてもらったのだ」
「おじさん…」
彼の口から出る『愛娘』の言葉に少女は気恥ずかしそうに顔を赤らめた。
「とにかく、まずは礼だ。娘を救ってくれてありがとう。本当に感謝しておる」
「いえ、自分もここまでして頂いて感謝の言葉もありません。それに大事な荷物まで巻き込んでしまって……」
「構わん。万の金より一つの命の方が大事だ。それに、君の輸送機の荷物は全て無傷だったから無事に回収させてもらったのでな」
おじさんはフンと鼻を鳴らしてキッパリ言い張った。
だが、本当に大丈夫なはずが無いとリースには分かっていた。何の為に使うのかはともかく、１機の武装ＭＨと４０人分の兵力を使う前から失ったとなればただ事ではないはずだ。
それでも気丈に振舞う彼にリースは謂(いわ)れの無い罪悪感を感じた。

「まあ、それは置いといて自己紹介といこうじゃないか。ワシはアーサー、アーサー・ロクヒードだ。だが別に何と呼んでくれても構わんよ」
ロクヒードが人当たりの良さそうな笑顔でそう言うと、後ろでずっと立っていた少女が一歩前に出てきた。
「私はフィノール・レセルです。今後しばらくの間よろしくお願いしますね、『レイナードさん』」
フィノールが優しく微笑んで一礼する。
「ああよろしく……え？」
まだ微笑み続けているフィノールをリースは目を丸くして見た。
「…どうして俺の名前を？」
「レイナードさんは傭兵ですから」
笑顔で人差し指を伸ばしてしれっと説明する彼女。
「……なるほど、リストか」
「当たりです」
基本的に、ＳＣに派遣を依頼した雇用主には隊員の情報が載ったリストが送付される事になっている。リースが出勤する時はいつも配られていたはずなのだが、名前で呼ばれることが無かったのでついそのリストの存在を忘れていた。
とその時、病室の扉が再びガチャリと開く。入ってきたのは自分より年上の眼鏡をかけた黒髪の男で、急いで来たのか服装が乱れ少し息を切らしている。
「すみません…はぁ、ちょっと用事が込み入って、ふぅ…」
「あ、お兄さん」
「随分と遅かったじゃないか、店長や」
身だしなみを整えて、ポケットから出したハンカチで額の汗を拭いながら弁解する彼に二人が声を掛ける。
「すいません、ちょ……ロクヒードさん。カーゴルームのハッチが泥に浸かって使えなくて……中身の運搬に思った以上に時間がかかったんですよ」

何かを言いかけた男はロクヒードの鋭い目線にセリフを呑んだあと、名前の部分を微妙に強調して話を続けた。
「そうか、それなら仕方あるまいな。まあ傭兵くんも今目を覚ました所だ、『質問』するのにさして問題はあるまい」
「あ、やっと目を覚ましましたか」
ロクヒードの言葉に男は嬉しそうに銀縁眼鏡を押し上げた後、リースの方に向き直って握手を求めた。その碧（みどり）の瞳は言い知れない好奇心に満ち溢れている。
「おはよう、傭兵くん。そして初めまして。店長ってのは僕のあだ名でね、町で喫茶店を経営してたもんだから、ロクヒードさんみたいに町の皆は僕の事をそう呼んでいるんだよ。まあ、そんなことは置いといてだね、君に一つ質問したいんだ」
「質問？」
自己紹介も程々に何かを聞きたくてたまらない様子の男に、ロクヒードはゆっくり瞳を閉じて聞き入る体勢に入り、フィノールは椅子から少し身を乗り出して興味津々な眼差しでリースを見つめた。
「そう。だけど、今からするやり取りは残念ながら他言無用には出来ない。ここでの噂の広がる速さといったら、３日もあれば全町民に伝わるくらいだからね。そして、今から聞く内容は既に『噂』として広まり始めている」
彼は皮肉るように苦笑いした。
「それでも、君は質問に答えてくれるかい？」
「ええ、構いません」
リースがそう言うと、黒髪の彼は再びニッコリした。
「じゃあ質問。ズバリ、君はＡＰ、アビリティ・パーソンかい？」
「え？」
「結構プライベートな質問に入るから答える、答えないは君の自由だけど、僕等は今広がっている噂じゃなく、真実を知りたい。君の口からね」
彼は好奇心の入り混じった目で熱を込めて言った。

「……」
二つの視線を感じながらもリースは迷っていた。
彼らになら言っても良い気がしたが、リースにはアビリティに対して苦い記憶しかない。
例えば、初めてアビリティを使った日だ。
あの日は不可抗力で大勢の人目がある中で能力を使ってしまった。
あの時ほど胸が高揚して、一人の人間に感謝されて、誇らしくて――
そして、あの時ほど周りから蔑まれた日は無かった。
言いたくない理由はただ一つ。「言えば差別される」からだ。
その日から、そこで住めなくなるほどにリースは周りから蔑まれ続けた。
気持ち悪い、バケモノ、怪物――
だからリースはアビリティという能力を「便利だ」と思った事はあっても、「感謝した」ことは一度たりとも無かった。
そんなリースの心を知ってか知らずか、眼鏡をかけた彼はフィノールにある質問をかけた。
「ねえ、フィンちゃん」
「はい？」
「アビリティってどんなものか知ってるかい？」
「それは……」
リースの返答を今か今かと待っていたフィノールは、突然の質問に人差し指を口元に当てて少しの間考え込んだ。
「アビリティといえば、壊れたものを修理できたり、怪我した人を癒したりできる特別な能力ですよね？」
その言葉にリースは思わず顔を上げた。

「レイナード君。僕らは何も君がアビリティを使える、使えないでどうこうしようと思ってるんじゃないんだ。彼女の言葉を聞いただろう？ここの皆はＡＰに対して全くマイナスのイメージが無いんだ。ただでさえ陸の孤島と化したこの町で、悪事に能力を使おうとする人なんか一人もいないし、来る事もないからね。この質問に気を悪くしたんなら謝るよ。ただ、これだけは分かって欲しい。ここにいる人間は皆、アビリティが使える人間を尊重することはあっても、決して差別したりはしないんだ」
真剣にそう言った後、彼は表情を緩めた。
「ただ、物珍しさでちょっとチヤホヤされるかな。この辺り一帯の空はまだオゾン層が残っているから、ここでは外来の医者や看護師くらいしかＡＰが居ないんだ」
そして彼は細長い眼鏡を外し、手にとってリースを見た。
その瞳はとても優しいものだった。
「そこに君がＡＰかもしれないっていう話が持ち上がってね。噂が本物か確かめてみたかったんだ。それにロクヒードさんも知りたがっていたしね」
彼が視線をロクヒードに向けると、ロクヒードはいつの間にか開けていた目を天井の剥がれた部分に泳がせた。
「本当に…本当に、アビリティを使えるんですか？」
そしてフィノールは力説する彼の横で陶酔しきった目でリースを眺めていた。どうやらアビリティに対して相当な憧れと関心があるらしい。
そしてそんな瞳でそこまで言われると、最早リースには言わない理由は無かった。
「まあ、少しなら使えます」
「やっぱり噂は本物だったか」
「うわぁ……」
頷いて納得する彼に、瞳の輝きを更に増やすフィノール。
「でも、どうして分かったんですか？」

「ああそれか。精密検査だよ」
「検査？」
「そう。君もこの部屋を見てある程度察しはついていたかも知れないけど、ここは昔廃棄された病院なんだ。設備は多少古いかもしれないけど、未だに現役なんだよ。そこで、君の回復を第一に考えて色々と検査をしたらしいんだけど、ＡＰっていうのは能力を使った後だと詳しい検査で分かるみたいなんだ」
そう言って彼は「知らなかったのかい？」というような顔をした。
「で、その能力なんだけど――」
彼は言うべきか言わざるべきか複雑な表情に顔を歪めた。心の中で何かと葛藤しているらしい。
やがて決心したように口を開いた。
「できればちょっと見せてくれないかな？」
「こ、ここで？」
「私も見てみたいです」
「コホン！」
だが、二人の願いも空しく突然の咳払いによって部屋は一瞬にして静まり返った。
「『質問』はそのくらいでよかろう？」
会話に更に熱が入ってきた二人に、唯一「見てみたい」という欲望に打ち勝ったロクヒードが優しく諭す。穏やかな声なのに、内に秘められた威圧感はリースにもハッキリと感じる事ができた。「もうその話は止めてあげなさい」と暗に言われている気がして、二人は渋々それ以上の追及を止めた。
ロクヒードはそれを確認してからゆっくりと立ち上がり、優しい顔をリースに向けた。
「ところでレイナード君」
「…はい」
「腹は空かんかね？」
「……はい？」

余りに予想外の言葉に思わず声が裏返りそうになる。
「だから、空腹ではないかの？君は昨日から何も口にしておらんからな」
「ええ、まあ多少は…」
言われてみれば少しばかりお腹が空いていたのでそう答えると、ロクヒードは嬉しそうに頬を緩めた。
「なら丁度いい。ワシも今から朝食をとろうと思っていたんでの、君もここで食事を済ませるといい。その後でお互いに情報交換をしようではないか。積もる話もあるだろうが、まずは食事からだ。この食事は薄味だが美味くてのう、特にハムエッグはワシの大好物なのだ」
部屋のノブに手をかけながら、ロクヒードは美味しい空想に浸っていた。
「では、また後で会おうぞ」
そういい残して、彼は意気揚々と部屋から出て行った。

RECORD5：一つの質問と三つの視線（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

今年の正月辺りに購入したＰＳＰが九月にニューバージョンに変わるというニュースを見て、ショックを受けているａｃｒｕｘです。いよいよ病院で対面を果たした二人ですが、この後一体どうなるのでしょうか？

次回をお楽しみに。

RECORD6：二つの頼みごと

「な、な……！！」
「そんなに驚かんでもよかろう」

あの後リース達は朝食を済ませ、同じ病室で色々と情報交換をし合っていた。
部屋では、ベッドで上半身だけを起こしているリースを三人が囲むように座っている。
時間はそろそろ午前も終わろうかと言うところで、水差しの置いていた小棚には空のトレイが置いてあり、半分ほど水の入ったコップは昼の日の光にキラキラ光っていた。
結局ほとんど朝昼兼用の食事になってしまったのだが、ロクヒードの言った通りに、きちんと栄養管理された食事は薄味ながらもどれも美味しく、ハムエッグは確かに美味しかったとリースは感じていた。

この話し合いで、リースは様々な事を三人から（主にロクヒードからだが）話してもらった。
今教えてもらったのはこの町の近年の状況で、リースは今回の傭兵派遣に至るまでの大体の話を聞かせてもらった。

今回のことの発端は8年前の工場建設の話から始まる。
当時、今より一代前の町長がある人から多額の寄付金を受け取って、その代わりにとある工場建設の許可を出した。
その工場はとても奇妙な所で、ろくな仕事も無いのに賃金がやけに

いいことと、下っ端の作業員にまできつい緘口令（かんこうれい）が出されていたことが町では噂になっていた。
皆どんな工場かは知らなかったが、実りのいい話に乗せられて多くの人間がそこへ働きに行くことになる。
いつしかその工場の噂は町の外にまで広がって、どこからかやって来たたくさんの出稼ぎ達で一時期ここはとても賑やかになった。
この病院も、その時町外れの森の広い土地に建てられたものだそうだ。

だが盛者必衰の理（ことわり）に漏れず、いつしかこの町の運命もゆっくりと傾き始める。

突如、謎の病で次々と倒れていく作業員達。
症状は皆同じで、最初は胸焼け、悪心、身体の倦怠感（けんたい）があり、次に身体の節々が痛み出す。症状が酷ければ嘔吐や下痢、身体のあちこちに紅斑ができ、最後は死に至る。
医者達は必死になって原因を調べたが、彼らには一切の外傷はなく、病原菌も見つからない。
懸命な努力も空しく、冬場は症状の発生率が低いということ以外は何も掴むことはできなかった。
そんな原因不明の病気を恐れて、我先にと出稼ぎたちは町を離れ、再び町は廃れていった。
残った者達も働くことを拒もうとはしたが、小遣い稼ぎに来ていた出稼ぎ達とは違い、この職で毎日の食事を賄（まかな）っていた者も少なくなく、とてもじゃないが辞めることなどできなかった。

そして先月、この町は大きな転換期を迎える。
１０年に一度の町長を決める選挙が行われたのだ。
それに当選した現町長こそが、わずか一ヶ月で強制的に工場を閉鎖

し、新しい職場をたて、リース達傭兵を呼んだ張本人であり、驚いて声も出ないリースの目の前に座っているロクヒードその人であった。

「あ、あなたが町長？」
「左様。その通りだ」
リースの反応に満足したのかロクヒードはとても嬉しそうだ。
「そういえば、契約書類にそんな名前が書いてあったような…」
「大事な書類にはしっかり目を通さんとのう」
ロクヒードは両手の親指をクルクル回しながら、驚いているリースの顔を子供のような無邪気な目で見た。
「いやぁ、これでいつも通りに呼べるよ。ねえ町長？」
隣にいた眼鏡の男が安堵のため息をついた。リースが見てみると、フィノールも似たり寄ったりのホッとしたという顔で胸をなでおろしていた。
「今朝になって急に『部屋ではワシの事は名前で呼んでくれ』なんて言い出すもんだから、正直随分と焦ったよ。この人、他人を驚かすのには手段を選ばないからね」
眼鏡を指で押し上げながら彼はやれやれと肩をすくめてみせた。
「だがの、無理矢理つけられた肩書きよりも、慣れ親しんだ呼び方の方がワシは好きなのだ」
「無理矢理？」
「おじさんは本当は町長になりたくなかったんです」
少し不機嫌になっているロクヒードを宥(なだ)めるような目で見ながらフィノールが説明する。
「元々誰かに命令したり、人の上に立つのが好きじゃない人だから。それでも、周りの人からの信頼はとても厚いんですよ。だから今回の選挙ではみんなからの推薦がものすごくて…」
「まあ、このゴタゴタが一段落すればすぐに辞任できるように手筈は打っておるから、それまでの辛抱だ」

ロクヒードはフンと鼻を鳴らした。
だが、すぐに真面目な顔に戻ってリースを見た。
「時にレイナード君。折り入って君に頼みたい事がある」
「俺にですか？」
「そうだ」
ロクヒードの漆黒の瞳は真っ直ぐにリースを見据えている。何もかも見透かすようなその黒に、リースは黙って次の言葉を待った。
「この病院はの、さっき話したように、町の全盛期に郊外のこの森に建てられたものだ。町に近いほうが良かったのだがな、立派な病院を建てるにはここが丁度いい土地だったのだ。平坦な広い地盤に、周りは美しい森。患者の快復には最適だ」
そこでロクヒードは一度窓の外を見た。昼の光に照らされて、森の緑が美しく映えている。
「あまりに広いもんでの、今は町の皆の隠れ家に使わせてもらっとる。それにここの場所はあまり土地勘のない奴らには見つけにくいのでな。だが、それも時間の問題だ」
ロクヒードの言葉にフィノールたちが悲しそうに目を伏せた。
彼は再び窓からリースに視線を移し、言葉を続ける。
「ここが見つかるのは明日か明後日か、ともすれば、もう見つかってるやも知れん。しかし、ワシらには戦う意思がある。残念ながら戦力は万全ではないがの」
そしてロクヒードはすぐに「君を責めとるわけではないぞ」と継ぎ足した。
「あれは不可抗力だ、君に落ち度は無い。むしろワシらは君に感謝しとる。この老いぼれにも戦う事のできる矛を、ここまで届けてくれたのでな」
ロクヒードは自虐的とも取れる寂しげな笑みをリースに見せた。
彼の言葉に合わせて、フィノール達も賛同の意をこめて頷く。
「君のおかげで随分と有力な情報も手に入ったしね」
「そうです。レイナードさんは十分に尽力してくれています」

三人の力強い言葉に、リースは言うべき言葉も見つからなかった。
そこでロクヒードがパンと両手を叩く。
「それでだ。君に幾つか頼みたい事があるのだ」
「頼みですか？」
ロクヒードが頷く。
「言いたい事は二つあってのう。一つは、この病院にいる患者の事なんだがな。不甲斐ないことに、未だに病の正体が掴めとらん。工場にはろくに立ち入れんかったし、今となっては最早工場の中を調べるのは無理なこと。おまけに、検査では虫や妙な生物も見つからなければウイルス一匹たりとも発見できん始末だ」
ロクヒードは悔しそうに奥歯を噛み締めた。
「奴ら、ワシらを捕まえたら間違いなく殺さずにもう一度働かせるに決まっとる。なんせ徹底抗戦を決めたときに奴ら、一度降伏勧告をしよったからな。万が一、ワシらが苦渋の敗北を喫することがあったとしても、病にかからぬ対抗策があればこれ以上犠牲者を出さずに済む。甚（はなは）だ違算だとは思うがの、今は君くらいしか頼れる者がおらんのだ」
ロクヒードはすがるような目でリースを見つめた。
「何か、この病について少しでも知ってはおらんか？」
リースは今までよりも強い視線を感じていた。
もちろん、三人が静まり返った部屋でリースの言葉を待っているからなのだが、フィノールの視線が他の二人とは異質な事に気付くのに大して時間は要さなかった。
他の二人のものとは違い、フィノールの瞳は複雑な感情を映していた。
たとえるなら、試験や検査の結果を待つような、期待と不安が入り混じった目だ。
聞かなければいけないのに、心のどこかでは聞きたくないと思っている――リースにはそんな目に見えた。

だからこそ、リースは迷っていた。
自分には心当たりがある。しかしあまりに確証が無かった。与えられた情報だけでは推測する事しか出来ないからだ。
自分が生半可な憶測を言っても、彼らをぬか喜びさせるだけではないのだろうか？無駄な期待を煽るだけではないだろうか？
だから、リースは躊躇っていた。
「レイナードさん」
そして、そんなリースにフィノールが声を掛ける。
少し身を乗り出して発した声は少し強いものだった。
「お願いです。少しでも知っていることがあるなら、包み隠さず教えてください。どんな些細な事でもいいんです。どんなに確証が持てないことでも構いません。たった一握りの手がかりでも欲しいんです。私達にはもう…もうあなたしか居ないんです」
余程思いつめていた事なのだろう。リースはフィノールと知り合ってまだ数時間しか経っていなかったが、彼女の真剣な露草色の目と、今までで一番語気を強めて言ったその言葉にそう思わずには居られなかった。
「フィノール……」
それからフィノールは身体を元の位置に戻して、すぐに謝った。
「ごめんなさい。急にこんなことを言って……」
「いや。謝るのはこっちの方だ」
彼女の心からの訴えかけに、リースの決心はついた。
「分かりました」
リースは真剣な目で真っ直ぐ三人を見た。
「これは俺の知識の一つに過ぎませんが、知り得る限りの事をお話します」
そう言って棚に置いてあったコップの水を飲み干し、手元に置いた。
「ロクヒードさん。話す前に二つ、三つ、聞きたい事があります」
「ああ、何でも言ってくれ」

もう一度椅子に座りなおしたロクヒードが軽く頷いて構えた。
「病気の症状が出始めたのは工場で働いてからどのくらいですか？」
「大体…1年から2年くらいだ」
ロクヒードが目を閉じて思い出しながら答える。
「では次の質問ですが、病気にかかった人の中で、失明か、或いは視力が弱くなった人はいませんでしたか？」
「あー……、おお、そうだ！確かに何人かが目が見え辛くなったと言っておったぞ」
知らないはずの事を的確に言い当てたリースに、ロクヒードの表情が驚きと期待の色に染まる。
「やはり…何か心当たりがあるのだな？」
「はい。ですが……」
「どうした？」
言葉を濁すリースにロクヒードが気遣わしげに聞く。
「この時代にはあるはずのない物です。それに、工場で製造する意味もほとんど無い。矛盾する点が多すぎます」
「一体、それは何なのだ？」
構わんから言ってくれ、と急かすロクヒードに、リースは重い口を開いた。

「強力な放射性物質――多分、ウランかプルトニウムの類です」

リースの言葉に、数秒間病室の空気が止まったように静まり返った。当たり前だ。この30世紀では『まず聞くことがない』単語なのだから。
「ウラン？ウランって、あのウラニウムのことかい？」
最初に沈黙を破ったのは眼鏡の男だった。目は見開かれ、その声は驚きに満ちている。
それにリースが無言で頷く。
「本当なのかい？だってそれは――」

「４００年以上前にこの地球上から無くなったはずの物質、です」
彼の言葉をリースが取り繋いだ。
「地球上でのウラニウムの採掘可能年数はとっくの昔に過ぎてます。事実、ここ数百年ウラニウムは一切採られていない。それにプルトニウムは精製にウラニウムを原料とするから、生産できる量はウラニウムの採掘量に深く依存しています」
「……それなら私も、歴史の本で見たような気がします」
フィノールが口元に手をやって思慮深げに言った。
「とても強力なエネルギーを抽出できるけど、需要が多くてすぐに掘り尽くされてしまったって」
「通りで医者も発見できないわけだ」
眼鏡の男が腕組みして険しい顔で言った。部屋の周りを先ほどからゆっくり歩き回っている。
「大昔に無くなった物の影響かもしれないなんて考えもしなかっただろうし、特別な機器が無いと検知も出来ない」
「……ち、ちょっと待ってくれ！」
勝手に進みだす三人の会話に、一人だけついていけなかったロクヒードが「降参だ」と言わんばかりに諸手を挙げてブレーキをかける。
「もし、もし奴らがそのウル……分かっとる！もし奴らがウラニウムを作っていたとしてだな、その用途は一体何なのだ？」
途中、フィノールに単語の手直しを受けながらロクヒードが質問する。どうやら彼はこの分野はあまり得意ではないようだ。
「多分、核燃料です」
手元で器用にコップを転がしながら、リースが答えた。
「昔はそれで原子炉というものを動かして、一時期は船や飛行機、果ては宇宙ステーションの動力源にも使われてたんです。非常に燃費が良いし、取り出せるエネルギーも膨大だから」
ただ、とても危険な物なんです、とリースが続ける。

「原子炉自体、不安定な物質が安定した別の物質に変化する時のエネルギーを取り出す機関なので、取り扱いがとても難しいんです。事実、原子炉ができて間もない頃は施設の崩壊事故が幾つか起きて、そのたびに十何万の人が放射線の被害に遭いました」
「では、その放射線が病の元凶なのだな？」
「そうすれば話が合うんです。少量なら数年経たないと自覚症状が出ないし、冬場に症状の発露が少なかったのも、多分厚着をしていて放射線を受ける量が減ったからでしょう。それに目の中にある水晶体は身体の中でも特に放射線の影響を受けやすい。失明もそれから来るものです」
そこまで言うと、ロクヒードは深いため息をついた。両手を顔にあててしばらく下を向く。
今までの会話の内容を整理しているようだ。
そんなロクヒードを横目に見ながらリースが口を開く。
「でも、そうなると矛盾点が色々出てくるんです。まず第一に、最初に言った通り、ウラニウムはもうこの時代では採り尽くされてるはずです」
「それは、まだどこかに鉱脈があったとすれば何とか説明がいくね」ようやく歩く事を止めた眼鏡の男が耳元のフレームを弄りながら言った。
「第二に、無くなったウランの代替エネルギーとして、２７世紀の産業革命の時にバルジウムが発明されています。こっちは人体には無害だし、ウランなんかよりも出力できるエネルギーは高い。コストも製造法もバルジウムの方が安易なのに、どうしてわざわざウランなんかを作るのか分かりません」
そう、この時代のエネルギーの主流は新物質のバルジウムである。安価で、安易に製造でき、ほぼ無尽蔵に精製できるこの理想のエネルギーは２７世紀に発明され、今では使われている全エネルギーの８割強を占めている。

悲しい現実だが兵器にももちろん使われていて、リースが乗っていたＭＨはもとより、中に積んであった小銃やランチャーのバッテリーにも使われているほどだ。

「……何か、バルジウムでは至らない点があったのでしょうか？」
フィノールも知恵を絞っているが、いい答えは出ないようだ。
「そして最後に、どうして精製する工場を放射線が洩れるほどに脆い作りにしたのか。これが一番の謎です」
「単に技術が無かっただけではないのか？」
頭の中の整理を諦めたのか、ロクヒードが再び会話に加わる。
そんな彼にリースは首を横に振った。
「それは違うと思います。大昔のウランの製造法を知っているのに、それを覆う工場の設備が作れないはずがありません。それに、工場で働いている者に被害が出れば、秘密裏に製造していたものを怪しまれるし、何より必要としていた労働力が減ります。これでは向こうにはデメリットしかない。それに放射線に曝（さら）されるのは向こうの人間も同じなんです」
「うむ、確かに……」

再び部屋を静寂が包んだが、しばらくすると眼鏡の男がそれを破った。
「……だけどレイナード君、どうしてそんなに昔の物に詳しいんだい？」
唐突に出された彼の問いに、リースは言いにくそうに少しだけ顔を逸らした。
「俺の趣味なんです。昔の物を集めたり、起こった出来事を調べたりするのが好きで…」
「そうだったのか。いや、僕も昔歴史を齧（かじ）った事はあったけど、君ほど詳しくはなれなかったよ」
彼の言葉にリースはそれ程じゃないです、と謙（へりくだ）った。

そして、質問の答えを出すべくロクヒードの方に向き直った。
「ロクヒードさん。もし予想が当たったとして、患者の治療と症状の予防ですが」
「どんな事をすればいいかね？」
期待をこめたロクヒードの意に反し、リースは表情を曇らせた。
「……残念ながら、今のところ効果的な治療法は見つかってません。というのも、病人がいない今、治療法の研究自体が止まっている状態だからです」
「そうか……」
「一番の治療、予防法としては、その物質が置いてある場所、つまり工場に近寄らない事です」
「分かった。貴重な情報、色々と助かったぞ」
急に深々と頭を下げたロクヒードをリースは両手を振って慌てて制した。
「いいえ！今はこれくらいしか役に立てませんから」
「だが、これで尚更負けるわけにはいかなくなったな」
再び頭を上げたロクヒードの顔には、新たな決意が滲み出ていた。
この戦いに負けるという事は、同時に更なる犠牲者を出すことを意味する。
「はい」
「これ以上無意味な被害を出せないからね」
「町の皆で力を合わせればきっと大丈夫です」
三人がロクヒードの言葉に続く。
ロクヒードはそれに耳を傾けた後、リースの蒼い瞳を静かにジッと見据えた。
「ところでレイナード君。君に頼みたい二つ目の事だがの……」
「何ですか？」
何を言われても期待に沿おうと意気込んでいるリースに、ロクヒードは一瞬だけ窓の外に目をやり、すぐにリースの目に視線を合わせてから、朝からずっと言おうとしていた事を告げた。

「輸送機が直り次第、君にはここから離れてほしいのだ」

その後の病室は、とても静かだった。

RECORD6：二つの頼みごと（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

とうとう一日オーバーしてしまいました。
楽しみにしてくださっていた方、すみません。
不甲斐ないことに日曜のほとんどを寝過ごしてしまい、徹夜で仕上げようとしたら途中でウトウト。
目が覚めたら日にちが変わってました。
次は頑張って日曜中に仕上げたいと思います。

それでは、また次回。

RECORD7：定まらない決意

柔らかな西日が差し込む、病院の一室。
ついさっきまで４人の話し声が聞こえていたその部屋には、今は１人しかいない。

「傭兵、か……」

窓の外に輝く日暮れの太陽に向かい合うようにベッドに腰掛け、リースはさっきここで行われた会話を思い出していた。

「輸送機が直り次第、君にはここから離れてほしいのだ」

ロクヒードの口から言い放たれたその一言に、部屋はしばらく水を打ったように静かになった。
彼の言った事の真意が分からず、皆言葉が出ない。
瞬きの音さえ聞こえそうなその部屋で、最初に口を開いたのはリースだった。
「そんな……自分も戦います！」

「いや、君にはやって欲しいことがあるのだ」
西日に当たったロクヒードの顔には先ほどの覇気が無く、日に照らされた明るい部分よりも浮き彫りにされた影の部分の方が目立った。
「今、町の男共が墜落した輸送機を森からこの病院まで1日かけて運んでおる。もうそろそろ着く頃だろう」
ロクヒードは右腕で銀色に光る腕時計をチラリと見た。
リースもそれに視線を合わせると、時間の他にも年月日が分かるようになっている高価そうな文字盤が一瞬見えた。
が、彼は時間を見るか見ないかのうちにそれを戻した。
「それからすぐに修理に取り掛かり、完了次第、君には荷物を積んですぐに基地に引き返して欲しいのだ」
その口からはっきりと帰還の要請を出したロクヒードに、間を置かずにフィノールが抗議の声を上げた。
「そんな！おじさんどうして…！？」
切実にあげられる彼女の不平不満を、ロクヒードは片手を以て抑えた。
その表情は朝のものとは到底似つかないほどに固い。
目を閉じて、唇を真一文字に結んでいる。
リースにはその顔が何かに苛まれている様な苦悶の表情に見えた。
そんなロクヒードの様子を見て、フィノールもやむなく言葉を呑み込む。
彼女がこれ以上騒がないのを確認して、手を下ろしたロクヒードはもう一度リースの方を向いた。
「ワシが頼みたいのはそれだけだ。分かってくれたかの？」
彼の静かな問いに、リースは答えることが出来なかった。
この戦いに協力してくれと言われると思っていたからだ。
町の皆と一緒に力を合わせて、この町を守って欲しい、と。

リースの方にもその覚悟が出来ていた。
いつもは危険な任務をエイドのイルマに撥(は)ねさせ、それでも当たった危ない任務は極力裏方に回り、元から持ち合わせていない傭兵としてのプライドよりも自分の命を重きに置いてきたリースだが、彼らとは命を懸けて共闘しても決して後悔はしないだろうと感じていた。
知り合ってから短い時間しか経っていないが、それでも彼らに協力したいという強い気持ちが自分の中にあったことにリースは内心驚いていた。
その原因はよく分からないが、傭兵になって2年間、これほど雇い主(クライアント)に感情移入させられたことは今までに数度とない。

「何故……突然そんな事を？」
「突然なんてことはない。君は元々輸送機のパイロットだろう？」
まるで聞かれることを分かっていたかのようにロクヒードの切り返しは速かった。
「本来なら昨日のうちに帰っているはずの身だ。問題はあるまい」
さも当然のように言うロクヒードに、フィノールは愕然とし、眼鏡の男は目を閉じ、リースはまだ釈然としない気持ちを抱えていた。
しかし彼にはもうこれ以上話す気は無いようで、小さいパイプ椅子からいそいそと立ち上がってリースにその大きな背を向けた。
それから気付いたように背中越しに声をかけてくる。
「おおそうだ。今晩はもう一度ここに泊まるといい。部屋は若干余裕があるのでな。それと、この病院はちと広いからな、後でフィノールに案内させよう。院内くらいは一通り知っておいた方がいいからな」
ロクヒードはそれだけ言って、フィノール達の方には目もくれずドアの方に歩んでいった。
「最後に……一つ質問させてください」

しかしそれをリースの声が追いかける。
その静かな声に、ノブにかかったロクヒードの手が止まった。
フィノール達もリースの方を見る。
「…何かな？」
言葉は素っ気無いがロクヒードは嫌がってはいないようだ。
ただ、何か言われる事を恐れているかのような……突然目上の人に呼び止められた時のような、そんな声だった。
「俺が戦力にならないと思ったから、こんな事を言うんですか？」
正直に思ったことを聞いてみる。

通常、今のように臨時に兵力が必要になった時、クライアントが戦闘要員以外の傭兵も戦力として使うことが多々ある。
パイロットやドライバー、技師や整備士なんかでも、傭兵なら基礎的な戦闘訓練は受けている為、報酬さえ払えば傭兵を好きに使えるクライアントからすれば、必要に応じて担当する仕事を変えるのは当然の権利であり、また日常的に行われていることであった。

だからこそ、こんな危機的な状態にありながらも平然と傭兵を返そうとするロクヒードにリースは納得がいかなかった。
クライアントが自由に使える傭兵をみすみす手放すことはほとんど無い。報酬以上に働かせようとするのが普通だ。
それをしないとなってくると、随分と理由が限られてくる。
その中でリースが真っ先に思い当たったのが、今の質問の中身だ。

「信用も出来ない、荷物一つ満足に運べない傭兵だから……」
「違う」
ロクヒードは今度ははっきりとした口調で否定した。
「それは……断じて違う」
リースの方からは後姿だけで表情は見えないが、どうやら顔は下を

向いているようだ。
「君は傭兵達の中で唯一ワシらの所まで来てくれた。フィノールの命まで助けてな」
「おじさん、ならどうして？」
ロクヒードの背中に向かってフィノールが疑問の声を投げかける。その声にロクヒードはしばらく黙った後、ノブにかけた手を静かに下ろした。
「……逆だ」
「逆？」
ロクヒードが静かに首を振る。ここから見える後姿からは、彼の表情は読み取れない。
「君にしか、こんな事を頼めんのだ」
彼の声には悲しみと、僅かな自己嫌悪の色があった。
「信用があり、最後まで忠実に責務を全うでき、経験と人情に富んだ人間。ワシは君をそう見込んだ」
ロクヒードの言葉はまだ続く。
「正直言って、ワシは君の力が欲しい。訓練を積まれた強靭な戦闘力、正確な判断力、迅速な指揮力……その全てがここでは貴重な能力なのだ。だがの、君には娘を救ってもらった恩がある。こんな所でその命を無駄な危険に晒してほしくはないのだ」
「では……他人を見捨てて俺にだけ逃げろと？」
「だからこそ、君に頼むのだ」
リースの少し語気を強めた問いに、ロクヒードはそう答えて振り返った。その顔はわずかに微笑んでいる。
だが、それはリース達へのものではなく、自らに向けられた自虐的なもの。
彼が見せる初めての、悲しい笑み。
「ただ君に帰れというわけではない」
すぐにその笑みを崩した彼は、顔は動かさず視線だけをフィノールに移した。

「君には『荷物を積んで』離れて欲しいと言ったのだ」
「おじ…さん？」
最初、見つめられたフィノールはロクヒードの言葉の意味が分からずきょとんとしていたが、意味を理解するとともに急に表情を変えた。
それに反して、眼鏡の男が全く反応を示さずに視線を落とした所からして、彼は既に知っていたのだろう。
「そんな……う、嘘！？」
「フィノールだけではない。我々で選抜した者達も乗せてもらうつもりだ」
「そ、そんなの嫌です！！私はみんなと残ります！それにおじさんも皆で力を合わせて、って言ったじゃないですか！」
慌てふためくフィノールをよそに、ロクヒードは再び視線をリースに戻した。
「もちろん、タダと言うわけではない。特別に報酬を弾もう」
そう言って彼は胸ポケットから細長い薄い紙をリースに手渡した。
リースはしばらくそれを眺めた後、再びロクヒードに視線を戻す。
「敵の情報ははっきりとしていない。ただ分かっているのは、工場を経て、兵力を持つほどのとてつもない財力を持っているという事と、冷酷無比で善人ではないという事だけだ」
そして、と彼は言う。
「今の状況では、ワシらが勝てるかどうかは五分五分と言った所だ。地の利はこちらにあっても、いかんせん戦力は向こうが上だ」
――もちろん、だからと言って妥協は一切しない――
ロクヒードの目からはそういった感じの決意が溢れている。
「だから、危険が及ばぬように一刻も早くその者達をここから遠ざけたいのだ。もうワシはこれ以上大切な者達を失いたくは無い……」

だから、引き受けて欲しい。

ロクヒードは改めてリースに懇請する。
しかし、リースはそれでも首を縦に振らなかった。
「……」
一見すれば深く考えている故の無表情に見えるが、フィノールにはすぐにそれが怒っている顔だと分かった。
それはただ単に、フィノールも同じ気持ちだったからそう見えただけなのかもしれない。

フィノール自身は行きたくないと思っていた。
ここに残って、みんなの役に立つ事をしたい。
どんな時でも、私はみんなと一緒にいたい。
大好きなこの町を守ろうとする人達と、それを必死に支えようとする人達。
そんな皆を置いてはいけない。

故にフィノールは怒っていた。
いくら自分の為とはいえ、彼にだけ都合のいい事を勝手に決めた町長に、おじさんに、理不尽だという気持ちがあった。
だから、目の前にいる傭兵の青年には絶対に承諾して欲しくなかった。
そのせいで、ずっとイエスと言わないリースの顔も怒っているように見えたのだろう。
しかし、リースの今の顔には妙に既視感があった。
自分が小さい頃に一度だけどこかで見たような、怖いけど、懐かしい……そんな顔に見えた。

そんなフィノールの気持ちを知ってか知らずか、リースはその顔を笑顔に変えた。

「ロクヒードさん。その搭乗者のリストをしばらくお貸し頂けますか？」
「ん、ああこれか。もちろん構わんよ」
別に返さんでもいい、と言いながら、ロクヒードは嬉しそうにリースに1枚の紙切れを渡した。
リースはそれを「特別料金」としてもらった紙と一緒に握り締めた。
それを見てフィノールが愕然とする。

傭兵とはこれ程までにお金で意思を変えれらるものなのか？
報酬さえ出されれば、自分の人情や心情を曲げて平気で尻尾を振ることができる生き物なのか？

フィノールの中で傭兵に対しての価値観が確実に変わってきていた。

しかし、それは唐突に終わりを告げる。

リースはしばらくリストの用紙に目を留めてから、きれいに畳んでベッドから立ち上がった。
「それでは、しばらく考える時間をくれませんか？」
「なに？」
商談は成立したと思っていたのか、ロクヒードは不意を突かれたような表情をした。
「決めるのは明日になってからでも遅くはありません。輸送機の修理には最短でも半日以上かかります。俺も手伝いますが、まず間違いなく明日にもつれ込むでしょう」
「だ、だがリストを受け取ったではないか？」
「それは必要最低限の流儀です。仕事をするなら『書類には目を通せ』と言ったのはあなたじゃないですか」
「確かにそうだが……」
突然の出来事にしどろもどろになっているロクヒードに、リースは

薄い紙切れを軽く手渡す。
「そ・れ・と、これはとりあえずお返しします。まだ仕事を請けてないうちから金品は貰えないので」
一部口調を強めてロクヒードに「特別料金」の紙を返したリースは、最後にフィノールの方に向き直った。
その顔は綺麗な笑顔だった。
「それとフィノール。ここの案内を頼めるかい？院内は一度一通り知っておいた方がいいだろうし」
「は…はい！！」
一瞬驚いた顔を浮かべ、それをすぐに笑顔に変えた彼女の、心の中の傭兵に対しての価値観は再び変わったようだ。

「そろそろ着替えるか」
夕陽に向かっての回顧を終えたリースは、立ち上がって部屋の隅に置いてあるロッカーに向かった。
自分より少しだけ背の高い古ぼけたロッカーは、軋んだ音と共にその中身を露呈する。
その中には自分が着ていた傭兵の装備一式が綺麗に吊り下げられていた。
「皺まで伸ばしてるな……」

自分が着ていた頃より美しくなっているＳＣのロゴ入りのユニフォームをしげしげと見ながら着る。
不燃性の特殊繊維で織られたとても軽いその服は、道具を入れる為のたくさんのポケットがついていて、戦場で相手に対して精神的な威嚇の効果を持たせるために、ユニフォームの色は紺色にカラーリングされている。
そして、それと同じ色に揃えているこれまたポケットのたくさんついたズボンをはき、ユニフォームの上にあまり嵩張らない特製のボディーアーマーを着込み、更に重ねるようにベルトやポケットのたくさんついた紺のベストを着用する。
このベストは自分用の幾つかの改造が施してあるオーダーメイド品だ。
最後に、ロッカーの小物入れに丁寧に置かれていたヘッドギアを右耳に着け、ロッカーをバタンと閉める。
「レイナードさん。準備はできましたか？」
リースが、閉めたロッカーの横に置かれている二つのアタッシュケースに驚いたのと、部屋の扉の向こうからフィノールの呼び声がしたのは同時だった。
「ああ、今行くよ」
アタッシュケースの小さい方だけを右手に持ち、リースは胸に芽生え始めた一抹の不安と共にドアへと駆け寄った。
そう、一体誰が自分を寝巻に着替えさせたのかという、ほんの一握りの不安と共に。

RECORD7：定まらない決意（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

ハイ、タッチの差で日付を跨ぎました。すみませんａｃｒｕｘです。
極一握りの僅かな定期読者様。本当に申し訳ありません。
ここまでずれてしまってはもう日曜から月曜に更新日を変えたほうがいい気もしてきます。
自分の文章力の無さに落胆です。
コレ自体は続けて書いていこうと思いますが、これからは不定期更新になるかもしれません。
８月はいろいろとあるので。

最後に、病室での会話のシーンが無駄に長いことをお詫び申し上げます。
動きが少ないので読んでて何がなんだか分からなくなってきます。
次からは部屋を飛び出して書きますので。

と、ここら辺りで次回に続きます。

RECORD8：精製場の一件

ミレースの町外れにある、閉鎖された工場。
その一角にある部屋に、一人の男が入っていった。
部屋には、計器や施設の映像が映し出されたモニターが壁中に取り付けられていて、首にスコープのような物をぶら下げた、黒いコンバットスーツに身を包んだ数人の男達が、キャスター付きの椅子に座ってモニターの下のコンソールを忙しそうに操作していた。
結構な大きさのその部屋は、機器も相まって多分制御室だろう。
「隊長。状況報告に参りました」
部屋に入った男はそのまま前進し、他の軍人には目もくれずに、部屋の中央に立っている軍服の後姿に敬礼した。
その声に反応してその姿が反転する。
声をかけられたのは白髪混じりの初老の男で、少しシワのよった顔に細めの瞳をしており、顎には短い白鬚を蓄えていた。
振り向いたその口元には煙草を咥えていて、少し汚れた軍服に包まれたガッチリとした体つきは年齢よりも彼を若々しく見せている。
「何だ、言ってみろ」
「は、はい」
煙草の煙と共に発せられた言葉に、敬礼をした男が少したじろぐ。
どうやら余りこういった経験がないようだ。
「ミレースのほぼ全域を我々の軍勢が掌握しました。現在町民を捜索中ですが、到着前にどこかへ逃避したようで、逃げられた少女一名を除き、町民を全く発見できない状態です」
「逃げただと？」
「はっ！見張りの兵の通信で判明しました。ジープ三台、計七人で追跡しましたが、どうやら振り切られたようで…」
言い辛い報告をする兵士の言葉が段々と尻すぼみになっていく。
そしてそれに反比例するように、隊長と呼ばれた男の目つきが鋭く

なっていく。
「兵隊七人がかりで小娘一人捕らえられんのか？」
自分の事ではなくただ報告に来ただけなのだが、ジロリと睨まれた兵士の額に汗が滲む。
「そいつらは今どこにいる？」
「それが……」
さらに言いにくい事を脅すような目で聞かれて、兵士は額にさらに流れる汗を感じながら口ごもった。
「つ、追跡したジープは正体不明の攻撃に見舞われ全滅……七名全員が死亡しました」
「何だと！？」
制御室に響き渡る声で怒鳴られ、伝令の兵士がビクッと身体を震わせる。
しかし、そんな二人のやり取りや男の怒鳴り声にも、機器を操作している黒服の男達は全く無頓着にそれぞれの作業を続けている。
「待ち伏せでもされていたのか」
歯をむき出しにした隊長が口の煙草をギリ、と噛みしめる。
それを見て伝令の兵士は自分の役目を少し呪った。
「分かりません。別の兵士が発見した時は既に……」
早くここを抜け出したいという気持ちでいっぱいだが、伝える事は伝えなければならない。

今の隊長はたいそう機嫌が悪い。
元々「組織」の仕事が忙しくただでさえ神経をすり減らしていたのに、先月に突然担当していたこの町の工場を閉鎖されて、出兵を余儀なくされたのだ。
それに加えて、この状況。
部隊の一割はこの町に来る前にある通信施設を妨害するのに消費しているし、細いでこぼこした道が山肌を這うように通っているこの土地では部隊の移動がどうしても鈍くなってしまうので、予定時間

より大幅に遅れをとってしまった。
だから、この町に到着した時には既にもぬけの殻。
頭にきた隊長が「捜索」と銘打って町の一部を砲弾で打ち抜く始末だ。
おまけにどうした訳か、これほど切羽詰った状況なのに工場の深部の探索には兵士を数名しか使おうとしない。
余程危険な物でも作っているのだろうか？
元々良い噂の無い人だが、今回の出来事で更に悪名が高くなりそうだ。

そんな事を考えていた伝令の兵士を現実に引き戻したのは、隊長の唸り声だった。
「どうして俺だけがこんな扱いを受けねばならんのだ！」
罵声と共に短くなった煙草を吐き捨て、新たな一本を口に含む。
そして伝令の兵士に背を向けるように中央のモニターを見た。
モニターでは一ヶ月放置されたこの工場が確実に目覚め始めていた。
だが、まだ点灯していない機器や反応を示さない計器が映し出されている辺り、完全に動き出すのはまだ先のようだ。
「俺は組織の中でも幹部候補（セカンダリー）なのだぞ！？それをこんな偏狭の森なぞへ飛ばしやがって！」
噛み付くように言って、そばにいたコンソールを弄る黒服に歩み寄る。
その口元にはいつ点けたのか、ゆらゆらと立ち上る煙があった。
「おい！施設の再始動はいつ出来るんだ？」
尋ねられた黒服の男が作業を中断し、静かに椅子を反転させる。
そのおかげで、伝令の兵にもその容姿を見ることが出来た。
男はかなり若いようだ。この隊のほとんどが経験を積んだ４０代を越える兵で構成されているのに、彼は見た目だけで判断すればまだ２０代の前半に見える。
着ている服よりも更に深い漆黒の髪は長すぎず短すぎずの長さで、

目の上辺りをさらさらと揺れている。
瞳の色も同じ位に黒い色をしていて、全身黒ずくめのようなその様は幻影的であり少し不気味でもあった。
「只今、全９エリア中５エリアの機能が回復しています。目下、全力で作業に当たっておりますが、残り４エリア中３エリアは全てＬｖ．４区域に位置していますので、調査隊の報告を待たなければ作業を続行できません」
「本当だろうな？」
淡々と言葉を紡ぐ男に隊長は顔を近づけはったと睨みつけた。
「貴様、俺の直属の部下ではないことをいい事に手を抜いたりしてないだろうな？」
顔が張り付きそうになるくらいに近づけて、まるで威嚇する犬のように唸る。
「貴様も今は俺の部下だ。もしそんな事をしてみろ。お前の細切れ死体をここの燃料棒に混ぜ込んでやるからな！」
ゾッとするような権力の濫用話を聞かされても、黒服の男は身じろぎ一つしなかった。
無表情に近い目を間近で燻（くす）ぶる煙草の先に迷惑そうに一瞬向けて、すぐに隊長の怒りが詰まった瞳に合わせる。
「ボテイン隊長のご命令とあれば、この命を無駄な危険に晒す事にも全く異論はありませんが、現在の貴方の部隊にはこの施設の構造を理解し、制御できる人員が我々しかいないということをお忘れなく。私を処分してもすぐに変わりの者が配備されるだけですが、その間に作業が大幅に遅れをとることと、私達の本来のリーダーである幹部（プライマリ）の方々からの風当たりが強くなることをよく念頭に入れられてから私共の処遇をお決め下さい」
「クソッ！」
抑揚のほとんど無いその声が小馬鹿にしたような口調に聞こえて、隊長は手近の機器を一度蹴り飛ばした。
その後でコンソールを弄っている黒服全員を見渡しながら、心を満

たす煙を胸一杯に吸い込んだ。
「まあいい……工場がちゃんと動くようになれば貴様ら全員をＬｖ．４で働かせてやる。何も知らない新兵達とせいぜい苦しむがいい」
そう言って不気味に笑い、恐らく身体の中の不快なものが幾多も詰まっているであろう煙を鼻と口から豪快に排煙する。
それでもイライラが収まらないのか、相変わらず噛みつかんばかりに歯をむき出しにしている。

その様子を見て、これ以上厄介事に巻き込まれたくないと思い当たった伝令の兵士がゆっくりと出口へ遠ざかる。
途中で幾つか自分の身分では聞いてはいけない事を聞いてしまった気がしたからだ。
Ｌｖ．４区域とやらの話や、そこへ何か大切な事を知らせていない新兵を送り込むという事。ここで作られるのは「燃料棒」と呼ばれるものだという事。
だが、数歩進むか進まないかの内に、自分が入ってきたドアが向こう側から開かれた。
外から入ってきたのは、煙草をくゆらす男が長らく待ち望んでいた存在。
「隊長！Ｌｖ．４区域の安全、及び諸機能の確保が完了しました！」
振り向いた隊長の前に五人の人物が横に並び、最初に部屋に入った男が先の伝令の兵と同じように敬礼した。
それに合わせて残りの四人も一斉に敬礼する。
そして、伝令の兵士は自分が部屋を出ようとしていたことも忘れて、大きく目を見開いて彼らの姿を凝視していた。
その瞬間、伝令の兵はこの工場産み出すであろう燃料棒というものが、とんでもない物ということをすぐさま理解した。
隊長に敬礼をしている、五人の「兵と思しき」人物。
彼らは皆、自分のような迷彩柄の薄汚れた軍服ではなく、不気味な

ほどに白く染められた物々しい防護服を身にまとっていた。
つま先から頭頂部まで彼らを完全に覆っているその衣服は、明らかに通常任務では着用するはずの無い物だ。
痩せて見えるほどに手足と胴体に密着した部分とは対照的に、頭の部分が不釣合いなほどに大きい。
視界を確保するために１８０度見渡せるように取り付けられている少し曇ったアクリル板が、辺りの景色を不気味に映し出していた。

「よし！よくやった！」
防護服に包まれた五人を見ながら、自分の部下の功績に隊長は嬉しそうに彼らに歩み寄った。
そして、どうだと言わんばかりに黒服の男の背に一瞥（べつ）を投げかける。
「それで、詳細は？」
早く言えとばかりに敬礼をした男を見つめる。
すると、言われた男は後ろから小型のパソコンを手早く取り出し、ディスプレイを隊長の方へ向けた――――

「ハッ、ハッ」
時折点滅する蛍光灯の薄明かりの中、一人の男が細い連絡通路を急ぎ足で駆け抜ける。
上も下も迷彩柄の服を着ているその姿はどうやら兵士のようだ。
額には汗が滲み、息は切れかかっている。相当急いでいるようだ。
ブーツが一歩踏み出すたびに、汚れた鉄板を敷き詰めただけの通路

がガタガタと軋み、天井には主のいないクモの巣が張り巡らされていた。
男は途中で分厚いドアに足止めを食らってしまう。
白字で「Ｌｖ．１」と大きく書かれた背丈より少し高めの隔壁に、男は額の汗を拭いながら、煩わしそうに横に立てかけられている端末をいじりだした。

この巨大な工場は、最も危険な状態になり得る最深部の区域をＬｖ．４とし、そこから同心円状にＬｖ．１までの区域指定をしている。
そこで精製される物の作業工程で分けると全９エリアとなり、全く危険の無いＬｖ．１エリアに工場全てを監督、操作できる制御室がある。
しかしどういうわけか、工場の入り口が全て「特殊な装備の着用は不要だが、作業に多少の危険が伴う」Ｌｖ．２区域に取り付けられているので、何か制御室に用があれば必然的にこのＬｖ．１隔壁を通過する事になるのだ。
この隔壁を非常時の砦にでもするつもりなのかは知らないが、はた迷惑な話である。

「……コード認証。Ｌｖ．１隔壁ロック解除」
十秒ほどで、エコーの少しきいた機械音と共に分厚い隔壁が左にスライドしていく。
重い鉄のかたまりを引きずるようなゴゴゴという音がしばらくの間鳴り響き、やがて厚さ５０センチはあろうかという隔壁が完全に開くと、男は隊長のいる制御室へ急ぎの用を伝えるべく疾走し始めた。

「――という調査結果から、精製に必要な高濃度結晶や機器、設備の全てがすぐにでも稼動できる状態です。汚染状況につきましては、我々の被爆量は総じて防曝服の耐久限度の０．１％でしたので、もし防曝服を身に着けていないとしても、施設が稼動するまでは貯蔵室に入らない限りどこを移動しても無害です。我々が試験稼動した時はＬｖ．３～４区域で少量の放射線が発生しましたので、我々のものと同じ防曝服が人数分必要になります。ですが……」

「何だ？」

「はい、実はこの工場は危険な設備を全てＬｖ．４区域に集中していますので、放射線が検出されるのは本来ならＬｖ．４区域だけのはずなのです……それが機器に異常も無いのにＬｖ．３区域にも検出されたとなると、この工場には設計段階で不手際があったことになります」

不可解な点を挙げる防曝服の隊員に、隊長の口元が僅かに持ち上がったのを伝令の兵は見逃さなかった。

「どちらにしろ、この二区域で働く人数分の服が臨時で必要になります――」

「いらん」

一瞬、制御室が静かになった。

これにはさすがの黒服の男達も、作業の手を一瞬止めて不敵に笑う隊長のほうを見るしか無かった。

「な……今、何と？」

「だから、防曝服は一着も必要ないと言ったのだ」

唖然とする部下を尻目に、隊長は不気味な薄ら笑いを浮かべたままだ。

そのまま再び短くなった煙草を床に落とし、踏みにじる。

「そんなものは必要ない。第一、あそこで働かせる奴らは皆この町の人間と新兵だ。どいつもこいつもここで何を作っているかなんて

微塵も知らないからな」
ハハハと高笑いした後、「ああ、貴様達もだな」と言って黒服の彼らを見て更に笑う。
「で、では今まで一度も防曝服を使用した事は……？」
「そんなことあるわけないだろう？工場に総動員しても余りある町民の数だ。変わりはいくらでもいる。それにそれだけの数の服を買うとなれば金が勿体無いだろう？」
嬉々として語る男に、あの黒髪の青年が嫌悪感をあらわにした目で隊長を見ていたが、当の本人は後ろからのその殺気に全く気付く様子は無い。
「それでは、俺がどうやってこれだけの大部隊を揃える事ができたと思う？」
「い、いえ……分かりません」
「金だよ、金」
制御室ではもはや隊長以外誰も声を出そうとするものはいなかった。隊長は両腕を方の高さに広げて、辺りを見渡すようにゆっくりと一回転した。
「今の世の中は便利なものでな、金さえ払えばいくらでも兵隊アリを雇える。そして8年前、俺には金が有り余るほどあった」
「ま…まさか……」

「工場を建てるのには膨大な金がかかるのを君は知っているかな？」
その一言で十分だった。
彼がどうやって大金を手にして大部隊を雇ったのか、どうして工場の一部で予想外の放射線漏れがあったのか。その全てが彼の一言で説明がついた。
「ボテイン隊長。その事を上層部の方々はご存知なのですか？」
「いいや。奴らは一切このことには噛んでないし、知る必要も無い。そして知ることも無い」

隊長の顔は狂気に染まっていた。
「隊長。それは『組織』に対する重大な反逆、背任行為です。工場建設の必要経費を横領して私用に使うなど、幹部候補（セカンダリー）にあってはならない事です。そんなことをすれば幹部達（プライマリ）が黙っていませんよ」
そう進言したのは黒髪の青年だ。
声こそ抑揚は無いが、眉を吊り上げてあからさまに怒りを露にしている。
「黙れ！！知られなければ良いだけの事だ！こいつらは俺の忠実な部下だから決して口外することはない。そして貴様らはこの工場で朽ちるのだ！俺は気が変わりやすいからな、やはりお前達には貯蔵庫の中で管理をしてもらおう！」
3日持てば奇跡だな、と言い隊長は下品な笑い声を出した。
「この一件が収まれば俺は晴れて幹部（プライマリ）に昇格だ。そうなれば誰も俺に反逆者などと呼べなくなるわ！」
声高にそう叫んだ時、三度制御室のドアが開かれる。
そこから蹴破るようにして入ってきたのは、通信施設の妨害に出ていた兵だ。
顔を真っ赤にして、珠のような汗をかいて息を切らしている。
「隊長！大変です！！」
それだけ言って大きく深呼吸する。
呼吸を整える間に五人の白い後姿をチラと見たが、それを気にも留めずにまたすぐに話し出す。

「たった今…無線を受信しまして……プライマリ・アリエティスがこちらに向かっておられるそうです！！」

「何だと！？」
そう言って振り返った隊長の目には、驚きよりも恐怖の色が濃く映っていた。
広げていた腕もすぐに元に戻す。

「明日の夕刻には工場に到着するそうで、閣下曰く『そろそろかわいい部下を返してもらう』とのことで……」
「ええい！強欲な奴め！！この作戦中くらいは俺に貸せんのか！？」
自分の事を棚に上げて、黒服たちを見て歯軋りする。
「アリエティスの属格……ハマルの奴か！！」
そんな悔しそうな隊長の様子を見て、黒髪の男が僅かに笑ったのを伝令の兵士は見た。
だがそれも一瞬だけで、今はコンソールを無表情で操作している。

「マズイ……このままでは工場の事がバレてしまう」
何とかせねば、と隊長が一人で思案を重ねだす。
既に彼の頭の中では絶対に黒服の男たちを生かしておく気は無いようだ。
制御室をうろうろしながら、どうやって彼らを始末するかというとんでもないことを考え始める。
工場の事を知られないようにするためには、この黒服たちをプライマリに会わせないことが最善手だ。
そうするには必然的に口封じをしなければならない。
だが、下手に殺せば必ず怪しまれる。
上官であるハマルが来る前に、どうやったら怪しまれずに秘密を知った彼らを消す事ができるか？
考察に考察を重ねた一人の男の狂気は、やがて一つの終点にたどり着く。
「……おいお前。ハマルの到着は明日の夜だったな？」
「は、はい。確かにそうだとお聞きしました」
上官の名前を平気で呼び捨てにする隊長に、呼ばれた兵が一瞬たじろぐ。
「よし、今すぐにここから通信施設に戻って、全軍を集めろ。いいな？」
「し、施設を放棄なさるのですか？」

「質問に質問で返すな。今日の夕刻までに兵を一人残らずここに掻き集めろ。いいな！？」
「は、はい！！」
鬼の形相で睨まれて、男は息を切らしてもう一度走り出した。
再び静かになった部屋で、隊長は次の命令を出すべく防曝服に身を包んだ五人に向き直った。
「お前達は、通信施設が空になったのを確認してから施設を破壊しろ。今の装備から爆薬を好きなだけ持って行って構わん」
「で……ですが、そんなことをすれば隊長の責任問題になりかねません」
「そんなことはどうでもいい！！この事が表に出れば責任問題だけでは済まないのだ！」
部下の気遣いも空しく、隊長のヒステリックな声に押しつぶされる。
「すこしでも無線封鎖をして時間を稼ぐ！そのためにはお前達が頼りだ。すぐに準備しろ！」
「はっ！」
五人は敬礼の後すぐに部屋を出た。
残されたのは隊長に睨まれた黒服の男達と、伝令の兵士一人だけ。
隊長はしばらくブツブツ呟いた後、振り向いて通信用の受話器を手に取ろうとした。
その時、必然的に伝令の男と目線が合う事となる。
「何だ、まだいたのか」
胡散臭そうに男を見つめた後、例の黒髪の男を呼び出す。
伝令の兵士の前で耳元に何かささやいた後、突然名前を呼んだ。
「伝令！」
「ハ、ハイッ！」
いわれの無い恐怖に声が裏返る。
「お前にはもう命令する事は残っていない。ここから消えろ」
男は一瞬立ちすくんだが、すぐに頷いてドアの方へと駆け寄る。
だが、この隊長が様々な事を漏れ聞いた人間をただ逃がすわけが無

かった。
「おっと待った。一人で帰るのは心細いだろう？エイリエス。彼をお見送りしろ」
「……了解しました」
エイリエスと呼ばれた黒髪の男が伝令の兵へと近づく。
立ち上がった彼の身長は思った以上に高かった。
そして右のホルスターに黒光りする鉄塊を見つけて、男は底知れぬ恐怖に慄(おのの)く。
「では、行こうか」
伝令の男より頭半分ほど背が高いエイリエスに背を押され、恐怖で逃げる事も出来ずにゆっくりと出口へ向かう。
部屋を出るときに伝令の男が最後に見たものは、相変わらず無表情で作業を続ける黒服たちと、受話器に向かって何かを語りかけている隊長の姿であった。
そして完全に外に出た後、扉がバタンと閉められる。
伝令の男にとって、それはまるで絞首台の床が抜けるような音に聞こえた。
人気の無い連絡通路にいるのは、死神のような黒ずくめの男に、今から訪れる恐怖に震える伝令の兵士だけ。
そして、それは唐突に起こった。
「おい、伝令」

男が反応する前に、一発の銃声が響いた。

硝煙の臭いに、鉄板の床を軽い金属音と共に転がる空薬莢。
「……悪いが、俺は無駄な殺生が好きじゃない」
瞳を開けた伝令の男が見たのは、銃を真っ直ぐこちらに向けている黒髪の男と、自分の耳元で僅かな煙を立ち上らせている弾丸だった。

目にも留まらぬ速さで撃ち出されたそれは、古ぼけた壁を深く抉っていた。
「早く行け。あの能無しは全ての兵の顔を覚える余裕は無い。今行けば助かる」
手に持つ拳銃のセーフティーをかけながら、エイリエスは通路の向こうに目をやった。
「ただし、この事は誰にも言うな。この事が広がれば兵士の士気が下がり、部隊としての能力が削がれる」
セーフティーをかけ終った銃をホルスターにしまって、震える男の肩を叩く。
「聞こえなかったか？ここにいても何も無いぞ」
そこまで言われて男はやっと自我を取り戻した。
エイリエスの言葉に何度も頷き、よろけるように通路の向こうへ走り去っていった。
「ハマル様……」
誰もいなくなった虚空に向かってその名を呟いた後、エイリエスは黒髪をなびかせて部屋へと戻った。

その頃、一機の輸送機が海上を飛行していた。
見た目はＭＨのようなフォルムをしているが、中はかなり改修されているようで、座り心地のいいシートが旅客機のように並べられている。
その一席で、窓際に肘を突いて外に広がる広大な海を眺めながら、

大きな欠伸をしている一人の人間がいた。
そこに近寄って来る、一つの人影。
「ハマル様。水をお持ちしました」
やってきたのは女性だった。手にはコップに入った水を持っていて、
それを窓際の人影に差し出す。
ハマルと呼ばれた人影はそれを受け取り、女性に手を振って感謝の
意を示した。
それから、女性に向かって何やら話し出す。
「斥候、ですか？ああ、アルレイシャのことですね？彼女なら無事
に向こうに着いてます……もちろん、ボテイン隊長には気付かれて
ませんよ？」
ハマルからの更なる問いかけに、女性がクスクス笑いと共に答える。
そして、ハマルが再び女性に話しかける。
話し終わると、女性の顔が僅かに驚きの表情になった。
「そんな事を？……了解しました」
女性は承諾すると、ハマルに一礼してから向こうへと消えた。
それを見送った後、ハマルは再び海へと目線をやる。
紅の夕陽に染まった海は美しく、なんとも幻想的だった。
日が当たる場所は紅く、日の当たらない場所は漆黒に。
「エイリエス……」
徐々に漆黒へと染まり行く海を見ながら、ハマルは手に持ったコッ
プを硬く握り締める。
手にした空のコップからは、濛々と湯気が立ち昇っていた。

RECORD８：精製場の一件（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

やっと日曜に更新を戻せました。ａｃｒｕｘです。
しかしながら再びズレる可能性大です。
今回の話は敵さんにスポットを当ててみました。
敵の中でも色んな人がいます

まだまだ、次回に続きますよ

RECORD9：傭兵の規則

「ねえねえ。アレ見てよ」
「あの人かぁ…」
「え、どこどこ？」
「ほら、フィンちゃんの隣に……」
「ああ！へぇ～……」

「す、すみません……」
「フィノールが謝る事は無いさ。それに、皆悪気があってやってるわけじゃないし」
フィノールとリースが病室を出た時から、ずっと好奇の目線とひそひそ話が二人を付きまとっていた。
どうやら眼鏡をかけた男の話は本当のようで、この病院にはすっかりリースの噂が響き渡っているようだった。
…まあ、リースが着ている物が場違いなせいかもしれないが。
目を輝かせてこちらを見る者、小さく手を振ったりする者、数人で固まって小声で話し合う者や、すれ違ってからわざわざ引き返そうとする者。
小さな子供から老人に至るまで、皆似たような反応だ。
そして彼の言った通り、その仕草や視線には一切の邪な感情が無かった。
どちらかといえば皆好奇心や憧れの目といった感じで、遠巻きに映画スターを見るようなその雰囲気には、リースが小さい頃に味わった気味の悪いものを見るような様子は微塵も無い。
それに正直言って、病室を出た時に最初にこういった目で見られたのはフィノールだったりする。

リースが病室を出た時、余程傭兵の服が珍しかったのか、フィノールの目がリースの姿に釘付けになったまましばらく固まってしまったのだ。
そのときの表情は、もしかしたら今浴びせられているものよりも数段強いかもしれない。
リースが大丈夫かと声をかけたらようやく反応してくれたのだ。
それも顔を真っ赤にしてわたわたしながら、「何でもないです！そ、それよりも早くここを案内しましょう！？」といまいち文法がまとまってない言葉を発しながら、リースを引っ張るように連れ出したのだった。

そして今。
リースはフィノールに連れられて、病院の中を彼女の説明を交じえながら一周している。
「レイナードさん。これで、西棟は全て周ったと思います」
「やっと三分の一クリアか……」
立ち止まって笑顔で振り返るフィノールに、後ろを歩いていたリースが小さなため息をついた。

ここが中々に広い所だということが、三十分以上歩いても未だ自分のいた棟しか周りきれてないリースには身に沁(し)みて理解できた。
この病院は都市の総合病院並みに規模が大きく、六階建ての西、南、東の三つの棟からなるU字型の様相をしている。
中央には中庭があり、更にその真ん中にはこの病院のシンボル的存在の噴水が備え付けられているそうだ。
そしてこれほどの規模に拘らず、森の中に建てられている事で町からは木立の影で完全に死角になっている。
隠れ家にするならまさにうってつけだ。
これだけの広さがあるのなら、一つの町に住む全ての人を収められるのも納得できる、とリースはしみじみ感じていた。

「西棟はほとんど病室だけなんだな」
「そう…ですね。一応全ての棟に病室はあるんですけど、最も数が多いのはこの西棟になります。他には、手術室や検査室、医師が駐留したりする宿舎があるのが東棟で、交換待ちの機器や道具を置いておく倉庫、そしてそれらを運び込む搬入エレベーターがあるのが南棟、といった具合です」
リースの質問に、口元に手をあてて少しだけ考える仕草をとってからフィノールが答える。
「ちなみに、正面入り口と来客・患者用のエレベータがあるのも南棟なんですよ」
「そっか。南棟からなら両方の棟にすぐに移動できるから……」
「当たりです」
今日二度目の言葉を同じポーズで言ってから、フィノールが微笑む。
「それじゃあレイナードさん。そろそろ南棟に向かいましょう？」
「ん……そうだな」
山育ちのせいなのか、いくら階段を昇降しても、長い廊下を歩き続けても息一つ乱さないフィノールに、リースは少し苦笑いして再び歩き始めた。

「えっと、これが機材の搬入用エレベーターですね」
「随分大きいな……」
南棟の一階、目の前に鎮座している大きな鉄の箱に、リースが正直な感想を述べる。
この棟には幾つかの病室や機材の倉庫などがあったが、一際リースの目を引いたのは他ならないこのエレベーターだった。
ホールまで日が当たるように三階辺りまで吹き抜けにして、壁の変わりにガラス板を敷き詰めた正面入り口のすぐそばにそれはある。

高さはさして普通のエレベーターと変わらないが、大人二人半を横倒しにしたくらいあるその横幅にはただただ目を見張るばかりだ。見たところグレーの扉は縦に二段階開く構造になっていて、まず下半分の扉を上半分の扉の位置まで引き上げてから、重なったそれをさらに引き上げて扉を開ける仕組みになっている。
そして、その巨大な搬入エレベーターの両端には一般人用の普通サイズのエレベーターが一基ずつ置かれ、大小計三基のエレベーターがリースの目の前にあるといった具合だ。
そしてやはり当然と言うべきか、左端のエレベーターの更に左には、上下に続く段差のきつい階段がその寂れた姿を覗かせていた。
この片田舎の病院がここまで広く、これだけ充実した設備を設けている事にリースはちょっとした驚きを覚えた。

「…あのさ、フィノール。一つ気になる事があるんだけど？」
「何ですか？」
横に立って同じものを見ていたフィノールが、首を少し傾けてこちらを見る。
「これだけ大きな病院だと、電力の消費とかが物凄いはずだろう？でもここは随分山奥だし……一体どこからそれだけの電気を手に入れてるんだ？」
「それはですね…町の近くを流れる滝に小さな古いダムがあるんです。そこで発電した電気を送電線でここまで引いてきてるんですよ」
今日三度目の人差し指を伸ばして語る彼女の仕草は、どうやら意図してではなく癖のようだ。
「十年以上ずっと使われていなかった施設なんですけど、町のそばにある発電所だけでは、工場と病院、町の全てに給電しきれなかったので、急きょダムを再始動してこの病院だけに送電しているんです」
それだけではないんですよ、とフィノールは続ける。
「ダムや送電線に何かが起きた時に騒ぎにならないように、この南

棟の地下一階には発電機が備え付けられているんです。燃料を使って発電するのでいつまでも…とはいきませんが、その間に電力の復旧を急ぐ事ができますし、手術中の患者やエレベーターに閉じ込められた人でも安全に対処が出来るんです」
そう言ってフィノールは伸ばしていた人差し指を別の方向に向ける。
それを目で追ってみると、そこにはさっきの階段が人の気配もなく蛍光灯の明かりに照らされていた。
それを見てなるほど、とリースが納得する。
ここが一階にもかかわらず上下に続くその段差は、地面より下にも人工物があることを示す何よりの証拠だった。

と、その時不意にフィノールの表情が曇る。

顔を少し俯けて、人差し指を立てていた手を、唇に指を這わすように当てる。
どこを見つめるでもないその瞳は少し険しい表情で、真剣に何かを考え込んでいるようだ。
「……どうかしたのか？」
リースが声をかけるが、フィノールは反応を示さない。ずっと直立したままだ。
珍しい……のかどうかはリースには分からないが、彼女がこれだけ思考に耽(ふけ)ることはあまり無いような気がした。
それにこの豹変のしかた……ただ事ではない事を考えているのだろうか？
仕方なくフィノールに数歩近づいて、自分より頭半分ほど低い位置にあるその顔を、僅かに屈んで下から覗き込む。
「フィノール……？」
「……」
「おーい」
「……」

返事が無い。ただの……
といった冗談はいいとして、数十センチの所まで顔を近づけても無反応を決め込む彼女の集中力は相当なものだ。
ここまで近づいてみると、フィノールの容姿の細かい所まで見ることができた。
バランスが整っていて、それでいて綺麗で、更に清楚な出で立ちが間違いなく美人の分類に入るだろうその顔。
眉根に少ししわを寄せて考え込むその姿もなんとなく愛嬌がある。
少し細めの瞳には露草色の光を宿し、その苦悶の表情は心の中で必死に何かと葛藤しているようだった。
そしてそれは見ようによってはそれは恐怖の表情にも見えた。
リースがその眼前で手を振るが、それでもフィノールは固まったままだ。
それを見て、リースは辺りに誰もいないことをゆっくり確認する。
状況が状況だからだろう。春の日の燦燦（さんさん）と当たる正面入り口を出入りする者はおらず、受付にも明かりこそ灯っているが誰もいない。
東西に続く通路にも人気が無いことを認めたリースは、ため息を一つついてから両手を口元で軽く丸めた。

すうっ

「フィノール！」
「ひゃあっ！？」
「おわっ！」
大きく息を吸ってから発せられたその声は、一人の少女を現実に引き戻すのに十分な量だった。
……いや、十二分な量だったようだ。
突然間近で聞こえる声に、フィノールが頼りない悲鳴を上げる。
彼女の予想外に大きな反応にリースもつられて驚いてしまった。
そして、フィノールは大きく見開いた瞳で二・三歩後ろによろけた

後、わたわたという擬音がぴったりな程に両手を振り回してから、辺りの景色を僅かに投影している床に勢い良く尻餅をついてしまった。
「フィ、フィノール……大丈夫か？」
「大、丈夫…です」
慌てて手を差し出すリースに向けられた露草色の瞳に光る粒がある時点で、今の言葉は嘘だとすぐに分かる。
「……って、仕掛けたのレイナードさんじゃないですか」
「いや、こうでもしないと気がつきそうに無かったから」
瞳に涙を溜めながら抗議するフィノールに、リースが後頭部を軽く掻いて答える。
リースの手を借りて立ち上がったフィノールに何事かと事情を聞くと、今度はあからさまに狼狽し始めた。
「わ、わ、私、そんなに固まってましたか？」
「あぁ、心の中で何かと葛藤してるみたいだった気がする」
リースの言葉に、乱れたストールを羽織りなおすフィノールの額に冷汗が流れる。
「下の発電室に何かあるのか？」
固まった時期から推測して、リースはその線が強いと考えていた。そして案の定、彼女の表情が「ぎく」といったものに変わる。
「え、えっと……その、発電室はこの病院が建てられた時からあるんですけど、まだ一度も使われてないし、点検すら一回たりともされていないんです」
「確か、建てられて五年だったっけ？」
「はい。だから、何かあったらと思うと少し不安で……」
フィノールはそう言って不安そうに顔を陰らせるが、それくらいのことであんなに長い時間固まるだろうか、とリースは訝しんでいた。その悩みだけでは、何かと葛藤していたようなフィノールの表情も説明できない。

しかし、リースはその事について深く考えない事にした。
気にならないと言えば嘘になる。
人間には「好奇心」という感情があるからだ。
でもその感情は、表に出していい時と悪い時がある。
リースには今は後者のような気がした。
だから聞かないことにする。
人間、誰しも一つや二つは聞かれてはまずい事を持っている。
それは子供から老人まで、老若男女全てについて言えることだ。
もちろん、それはリースにおいても例外ではない。
それを証明するかのように、リースは後ろ手に左腕を右腕で強めに掴んでいた。
「そうか。確かにそれは少し危ないな」
「でしょう？」
意図的に会話を合わせたリースに気付かずに、フィノールの顔が安堵の表情に染まる。
まあいいか、とリースは思った。
このまま話を続けて、さっきの事をうやむやにしてしまおうとする。
だが、それは唐突に起こってしまった。
「それなら、案内がてらに後で点検にでも行ってみるか？」
何気なく言ったその一言は、少女にとって地雷だったようだ。
「え……」
それも飛びっきり強力な。

「……え！？」
「…フィノール？」
ころころ変わるフィノールの表情にリースが戸惑う。
笑って、悩んで、驚いて、少し怒って。
今度のはなんだろう？
そんな不謹慎な考えがリースの頭を一瞬横切るが、答えは目の前で完成していた。
「て、点検ですか！？今日ですか！？私がですか！？今夜にですか！？」
完全に混乱している。
目は見事に渦巻き模様になり、瞳の涙は三割増し。
そして一言一言に合わせて壮絶なジェスチャーを繰り出す。
一言目と共に階段を指差し、二言目に自分の立っている地面を指差す。三言目で自分を指差し、最後は柱にかけてある時計を「ビシッ」といわんばかりに突き示す。
そんなフィノールの姿は、リースにとって見慣れた日常の風景を髣髴（ほうふつ）とさせた。
――リースさん！！
自分を見つければ千切れんばかりに手を振る彼女。
――わ、す、すみませんっ！！
成功よりも失敗ばかりが目立つ、たった一人の補佐（パートナー）。
彼女は今どうしているだろうか？

今でも自分のエイドでいてくれてるんだろうか？
リースの表情は自然に暗くなる。

傭兵の世界はとてもシビアだ。
恐らく軍隊よりも厳しいものがあるだろう。
死んだからといって二階級の特進もなければ自分の墓も無く、果敢に取り組み成功した依頼に対しては勲章一つ、労いの言葉一つたりとも与えられない。
軍隊よりも人数が多いＳＣでは、多量の人員を管理する為にとてもシンプルな決まりを作っている。

救難信号を受信すれば「第一次通告」を、それから二十四時間以上経てば「死亡通告」を、その傭兵に属するエイドに手渡す。

簡単なことだ。
この規則のお陰で、毎日山というほどの書類が作成される。
そしてその紙切れがエイドに手渡された時、そのエイドには二つの選択肢が与えられる。

「死んだ」ことになった主を待つか、契約を解消してほかの主に就くか。

数あるエイドの内、大半は後者を選択する。
だがそれは決して冷たい感情ばかりではない。
大抵は事務的な関係にしかないからだ。
傭兵に言われた雑務や事務をこなし、自分はその見返りとして賃金を貰う、単調な繋がり。
中には顔を数回しか会わせたことがない者もいる。
エイド達も仕事なのだ。
報酬が無ければ稼げず、生きていけなくなる。

通知によって死亡扱いになった傭兵からは賃金は発生しない。
つまりはタダ働き。奉仕活動。ボランティア。
余程の関係に位置しなければ居残る事を選びはしないのだ。
その点で彼女(あいつ)は――イルマは――どうなのだろうか？
数多くのエイドの中で、たった一人だけリースの格安賃金に手を挙げた少女。
時間的にはもう通知を受け取っているはずだ。
そのときにイルマはどんな反応を取ったのだろう？
他のエイドのようにもう離れているのだろうか？
だとしたら残念だ。
せっかくの只一人のパートナーなのに。
それに約束していた甘い物もまだ奢っていない。
……でも、もしかしたらそれ目当てで残ってくれているかもしれない。

――もう待ちくたびれましたよ。さ、早く行きましょう！
彼女は甘い物に対しての食い意地が張っているから。
足早にリースの前を行き、振り返って嬉しそうに微笑む。

――リースさん！もっと急いでください！

―リースさん！お店に人が並んじゃいますよ！

リースさん！

……

「リースさんっっ！！！」
「うわっ！！？」

突然叫ばれた自分の名前に、リースが頼りない奇声を上げる。
その後は完全にフィノールに「右ならえ」だった。

「いつつ……フィ、フィノール？」
派手に尻餅をついたリースが見上げると、そこには両手をメガホンの形にしたフィノールが目を丸くしてリースの事を見ていた。
「……これって結構効果があるんですね」
「…俺と違って怒鳴ったからな」
「でも、そうでもしないと気が付きそうにありませんでしたから」
微笑んでそう言った彼女の前には、ピンと立てられた人差し指があった。
「分かりましたか？人間誰しも考え事をすると周りが見えなくなるんです」
両目を閉じてリースのそばまで歩み寄るその姿は、立てた人差し指も相まってまるで何かを教える先生のようだ。
そのままリースに手を差し伸べて、さっきとは逆の構図で引き起こす。
「何回も呼んだんですよ、名前？」
「悪いな、気付かなかったよ……」

それだけ考えに没頭してしまっていたのだろうか？
だとしたら少し不覚だったな……
同じ事を仕返されるなんて。

そんな事を考えて、悔しさ半分、恥ずかしさ半分に頭を掻くリース

に、フィノールがくすくすと笑う。
「これでおあいこですね」
「そうだな」
そう言ってから、二人はどちらからともなく笑い出した。
誰もいない南棟のホールに、二人の笑い声がしばらく木霊する。
ガラス張りの正面玄関の外では、斜めに差し込む夕陽が今にも消えそうになっていた。
そんな中、笑い終わった二人の中でリースが最初に口を開く。
「…じゃ、さっさと残りの東棟も周るか」
「はいっ！」
元気のある返事と共に、二人は再びフィノールの説明を片手に東棟の方へと歩き始めた。

隣を笑顔で歩きながら、東棟にある医師用の宿舎について説明するフィノールを見ていると、リースはこの町を守ってやりたいという気持ちの源が、親友の死の他にもう一つあるような気がした。

ちなみにリースが、頬を少し赤らめて、さっきよりも嬉しそうに歩いているフィノールに名前の呼び方を変えられたことに気付いたのは、随分後になってからだった。

RECORD9：傭兵の規則（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

久しぶりに深夜になる前に投稿できました。
本当はまだ続くのですが、長くなりそうだったので二話に分割しました。

しばらく言ってませんでしたが、感想、評価は作者の力の糧になります。

とことん、次回へ続きます。

RECORD10：力の結晶

「リースさん。私、少し寄って行きたい所があるんですけど、構わないでしょうか？」
「寄りたい所？」

東棟の巡回も終えた二人は今、日が暮れた西棟をリースの部屋へと向かっていた。
「はい。リースさんと同じ西棟にいる私の知人に会おうと思いまして」
二人はそのまま階段を上り、上の階へ。
全ての階が全く同じにつくられているこの建物では、どこまで歩いても同じ景色だ。
「ああ、それなら全然構わないけど……って、俺に許可取らなくてもいいんじゃないのか？」
「リースさんにも一緒に来て欲しいからですよ」
西棟には病室が多いせいか、二人が歩く廊下には未だ多くの往来があった。
通り過ぎていく周りの人達の視線を縫うようにして、リースはフィノールについて行く。
「私の命を助けてくれて、積荷まで無事に運んできてくれた傭兵さんがいたんです、って教えてあげたら、是非一度お会いしたいって」
「そうなのか」
「はいっ。話が面白くて、とっても優しい人なんですよ」
リースの言葉に、フィノールが笑顔で返した。

「あ、ここです」
六階でも数ある病室の中の一つ、「Ｗ６０５」と書かれたドアの前でフィノールが立ち止まる。
Ｗという表記は多分西棟を意味するのだろう。

コン、コン、コン。

フィノールが軽く三回ノックすると、「どうぞ」と中から女性の声が聞こえてくる。
それを確認してから二人はゆっくりと部屋に入った。

病室の中はリースがいた部屋とは違い、複数のベッドが一つの部屋に収められていた。
六台のベッドが部屋の両側に等間隔で並べられている様は、どこにでもある普通の病室だ。
その内幾つかはどうやら空所のようで、きちんと整えられた白いシーツに、ベッドの周りには荷物の類が一つもなかった。
三つほどのベッドには仕切りのカーテンがかけられている。
「こんばんは、ケイトおばさん」
そのうちの一番手前、右側のベッドにフィノールが歩み寄る。
カーテンがかかっていないベッドだ。
リースも後について行き、部屋から持って来ていたアタッシュケースをベッドのそばに置いた。
「あら、もしかしてフィノール？」
だがそこには先客がいたようだ。
歩み寄ったベッドでは、ナース服を着た年の若い女性が、ベッドで

寝ている年老いた女性の体調をチェックしていた。
歳はリースよりも上のようで、動き回る彼女に合わせてブロンドの長髪が可憐に揺れている。
忙しくてこちらを振り向く暇が無いらしく、今の返事は彼女の肩越しにかけられたものだ。
「フィノール？フィノールが来てるのかい？」
「ええ、そうみたいね」
起き上がろうとする老女の身体を支えながら、手に持ったペンのような機械の先を彼女の額に器用にかざす。
すると、ピッという短い電子音が機械から出た後、ナースの女性がそれを手にとって見つめた。
「ん。平熱よりちょい上か。問題なさそうね」
そう呟いてから手早く体温計を入れ物にしまう。
素早く慣れたその手つきは長い経験の積み重ねだろう。
「メイベルや、早くフィノールに会わせておくれ」
「はいはい。急がなくても彼女は逃げたりしませんよ」
患者との会話も手馴れた物だ。
そうこうしているうちに周りの物の片づけまで終らせる。
「よし、終わった！じゃあフィノール、私は前検査の報告に行かなくちゃならないから、代わりに彼女の話相手をおねが……」
ようやくこっちを向いた看護師の女性とリースの目が不意にかち合う。

しばらく部屋に漂う、静寂の時間。

「ど…どうも」
中々沈黙を破らない彼女に、痺れを切らしたリースが先に挨拶する。
すると、まるで見えてはいけない何かが見えてしまったかのように、ナース服の女性が自分の目をゴシゴシ擦りだした。
だが、それでも視界から消えないと判明すると、今度はフィノール

の方へ視線を向ける。
「フィノール。彼は？」
「え、えっと……」
ズズイと迫る彼女にフィノールが気圧される。
「け、ケイトおばさんに連れて来て欲しい…って頼まれてた人、かな？」
言いながら、「しまった」とフィノールは後悔する。
彼女もまた、リースの噂を聞いて目当てにしていた人間の一人なのだ。
今の彼女は、まるでずっと欲しかった商品を発売前に手に入れたかのような表情でリースを見つめている。
「おやフィノール。本当に傭兵の方を連れてきてくれたのね」
「やっぱり！！」
ベッドから上半身を起こして顔をこっちに向けていたおばさんの一言で、ナース服の女性の表情が嬉々としたものに変わる。
「でかしたわフィノール！多分ここの職員で彼と話をするのはあなた以外で私が最初よ！」
両手でバンザイしながらそう言って、小躍りと共にドアの前まで行く。

カチッ

とノブから小気味良い音が立った。
「…て言うことだから、帰るのはもう少し後にする～」
まるで十年分の好きな行事が一度に来たかのような彼女のはしゃぎっぷりに、フィノールが重いため息をついた。
「ゴメンなさい、リースさん」
「別に大丈夫さ。ご丁寧にドアに鍵までかけてくれてるから、彼女以外の人が来なくて済むし」
「彼女を甘く見ない方がいいですよ……」

「え？」
真剣な口調でいうフィノールにリースが振り返ろうとすると、目の前に先程のナース服の看護師が仁王立ちになっていた。
丁度フィノールとの間に壁を作っているように見える。
「ねね、傭兵さんっ！私としばらくお話しましょうよ～」
ハッ、とリースが気付いた時には彼の両手が彼女にガッシリと握られていた。
それは友好の証と言うよりも、リースを逃がさないようにする手かせの意味合いが大きいようだ。
「あ、ああ」
リースがたじたじになりながらそう答える。
「良かった！そういえば傭兵さん、名前は何ていうの？」
「リースです。リース・レイナード」
「じゃ歳は？」
「今年で２３になります」
「どんなアビリティを使えるの？」
「基本は属性のないものだけなんですけど、雷系統も一応は…」
「うっそ！！ランク４のＡＰの中でも習得した人がほとんどいないっていうあの雷撃のアビリティを！？」
そう叫ぶとリースから手を離して胸の辺りで組む。
「すっごーい……」
恍惚とした瞳でリースの事を見つめる。
「なんて人なの……適齢だし、体つきは丁度いいし、顔も悪くない…いいえ、むしろ上玉よ……そして雷撃を扱える上級ＡＰときてる。想像以上ね……」
つま先から頭の上まで舐め回すようなその視線に、リースは身体に良くない震えが走るのが分かった。
「完璧だわ……」
――彼女を甘く見ないほうがいいですよ――

目の前でなにやら思案しだす彼女を見ていると、フィノールの言う事の意味がなんとなく分かった気がした。

「ねえ、フィノール」

「な、何ですか？」

「彼と何か一つでもシた？」

「ぶっ！！」

「なっ……！！」

ボンッ！という音が聞こえそうなほどに、フィノールの顔が一瞬で真っ赤に染まる。

リースも、余りの話の飛躍ぶりに思わず吹き出しそうになった。

「あらぁ、その様子じゃ全くと言っていいほど進展が無いみたいね」

「あ、あ、あ、当たり前じゃないですか！そういう感情を持って近づいたわけじゃないし、なにより知り合ってまだ三日も経ってないんですよ！？」

「何言ってるの。私ならその三日で男を落とす自信があるわよ」

そう豪語してから、ナース服の胸の辺りの膨らみをトントンと指で弾いた。

そしてリースの腕をぎゅっと抱き寄せる。

「じゃそういうことだから、彼は私が貰い受けるわね～」

「何でそういう話になるんですか！？」

「そうですよ！それに『そういうこと』、ってどういうことですか！？」

ここが病室だという事を忘れてフィノールが大声を出す。

それでもカーテンが開かないあたり、この部屋にはベッドの上の老女以外に人はいないらしい。

「何よ、フィノール。あなた知らないの？」

リースの腕から離れた彼女がフィノールの方を向く。

「この病院の中でレイナード君の評判はとってもいいのよ？突然の

不意打ちを受けて壊滅状態だった傭兵部隊のたった一人の生き残りで、戦友を失なう憂き目をみたにも拘らず、町長の帰還命令を拒否し、健気にこの町の皆を護る決意を固める孤高の戦士……」
とても芝居がかった話し方で語る彼女。
最後の方に至っては、右手を胸元に、左手をしなやかに伸ばして、まるで悲劇を演じる舞台俳優のような姿勢をとる始末だ。
「い、いや、俺は別に断ったわけじゃ……それになんでその話を――」
「ここでの噂の広がる速さと正確さを舐めちゃいけないわよ。それに、あなたは絶対に町長の依頼を断わるわ！」
否定するリースに、伸ばしていた左手を探偵顔負けにビシッと指差す。
「だって、帰る気があるなら絶対に一度目で受けたはずだもの。直接断るのが忍びなかったから時間をくれって言って誤魔化しただけでしょ？」
「う…」
痛いところを突かれてリースが黙り込む。
実際、リースにはロクヒードさんの頼みを素直に受ける気は無かった。
その理由は色々あるのだが、ここでは割愛しよう。
「フィノール。見てみなさいよ、彼のこの謙虚さを。ここの女達ったら、今言った肩書きだけでもう半分染まっちゃってるのよ？それに加えてこのプロフィール。年齢、容姿、能力、加えて性格までも全て良し。まるで文句のつけようが無いわ」
「そ、染まってるって……」
顔を引きつらせているリースを無視してナースの話は続く。
「考えても見なさいよ。今時能力が使えるからってだけでこれほどの注目は集まらないわ。ここの医者達がいい例じゃない。みんな色気の無い男には靡(なび)かないのよ。ここに来る途中で女性陣が浴びせた目線がぜーんぶ色目の入ったものや物色していたものだったって、

普通は気付くわよ？」
ま、そこに気付かない彼の純真さがまたいいんだけどねぇ、と言ってナースは笑った。
「だ・か・ら、争奪戦が激化する前に手を打とうって魂胆なわけ」
「まあまあ。メイベルや、もうその辺りでいいでしょう？」
突然聞こえたその声にリースが驚く。
声の主はさっき「おばさん」と呼ばれた女性だった。
「何言ってるのよ。これからが始まりじゃない」
「私が話をしたいと言って無理にここまで連れて来て頂いたのよ。これじゃあまともに会話が出来ないじゃない？」
皺の多い顔でメイベルと呼んだナースを見つめる。
「私も向こうへ行く前に少しでもお話がしたいのよ」
「……んー、分かったわ」
先程までの威勢はどこへいったのか、渋々聞き分けるメイベル。
あっさり横にどいてくれたので、リースは初めてベッドで寝ていた女性の前に立つことが出来た。

一見して七十くらいの歳の女性だ。
ベッドから上半身を起こし、皺のよった顔をリースの方へ向けている。
ここまでやつれていなければ、もっと若く見えるだろうとリースは思った。
「こんにちは、傭兵さん。私はケイト、ケイト・マーゴットよ」
「リース・レイナードです」
そういってリースが手を差し出し、彼女がそれに応じる。

彼女の手がリースの出した手の上の宙を大きく掻いた。

その様子に、フィノールは悲しそうに目を伏せ、メイベルは顔を背けた。
おばさんはすぐにもう一度手を出して、二度目でやっとリースの手を捉える。
リースは大きく目を見開いた。
「もしかして、目が……？」
「ええ。何故だか最近急に視力が落ちてねぇ。もうほとんど見えてないのよ」
困ったものだわ、と言って力なく笑うおばさん。
「咳も良く出るし、一度どこかを切ってしまうと中々出血が止まらないから大変」
言い終わるか終わらないかのうちに、おばさんは数度咳き込んだ。
「だから今晩、その中でも一番治る可能性のある目を治療するために、手術を受けるのよ。後一時間もしないうちに南棟へ移動するわ」
そう言って窓の外の中庭、そしてその向こうにある棟の方へ顔を向けた。
恐らくその瞳は光を捉えてないのだろう。
「だから、その前にあなた達と話をしようと思ってねぇ」
皺だらけの顔をゆったりと微笑ませる。
「でも、その前に一つ謝らないと」
リースの手をしっかりと握る。そこから測ったのか、彼女の顔はリースの目を自然な動作で捉えた。
「メイベルの事は悪く思わないで下さいね。根はとてもいい子なのよ」
「はぁ」
「彼女のほとんどは私譲りなのだけれど、悪戯好きなところが旦那に似てしまってねぇ。他人をからかうのがとても好きなのよ」
「はぁ……、は？」
微笑みと共に放たれた衝撃発言に、リースが素っ頓狂な声を上げる。
「い…今、何と？」

「あら？」
そんなリースのリアクションを不思議に思ったのか、メイベルが割って入って来た。
「私、まだ名前を言ってなかったかしら？私もマーゴットなのよ？メイベル・マーゴット」
「お、親子なんですか！？」
「ええそうよ」
涼しい顔で言うメイベルにリースが愕然とした。
フィノールの、「えーと、その…ね？」という表情を見る限り、彼女もこの二人の間柄を知っていたようだ。
「まあまあ、それよりもお話をしましょう。もう余り時間が無いのだから」
「そ、そうですね！」
おばさんの提案に、リースの目線から逃れるようにフィノールが賛同する。
「フィノールも良く来てくれたねぇ。あたしゃ嬉しいよ」
「そんな。呼んでくだされば いつでもここに飛んで来たのに……」
「随分仲が良いんだな」
嬉しそうに語り合う二人にリースが正直な感想を言う。
「はい。おばさんもメイベルさんも、私の前住んでいた家の隣にいたものですから」
「馴染みの深いお隣さん、ってやつね」
「はいっ」
メイベルとフィノールが嬉しそうに笑う。
「それも随分長い付き合いよ。フィノールがやっと一人で歩けるようになった頃にはもう傍にいたし」
「そ、そんなに長かったですか？」
「ええ！だからフィノールをからかうネタなら尽きないわよ。たとえば……そうね、４歳のときの誕生日会なんてどうかしら？」
「わっ！その話は言わないで下さいよ！」

「そうねぇ。あの時は大変だったわ」
「お、おばさんまで！」
「どう、レイナード君。聞いてみない？」
「やああぁっ！！」
そんな感じの話をしながら、四人は楽しい時間を過ごした。

しかし楽しい時間と言うのはあっという間に過ぎていくもので、もう二十分足らずでおばさんが手術室に向かう時間になってしまった。
そして彼らの話を遮る要因になったのは、悲しいかな、彼女の喘息に近い咳だった。
「母さん、大丈夫？あんまり無理しちゃ駄目よ？手術も近いんだから」
「大丈…夫よ。これっ…くらい……」
「ケイトおばさん！！」
激しく咳き込むおばさんに寄り添って、フィノールが一生懸命背中をさする。
あまり容体は良くないようだ。
いや、悪化を辿るばかりだから手術を決心したのだろう。

だが、手術が成功しても体調が良くなるとはリースには思えなかった。
多分、彼女もあの工場の影響を受けているのだろう。
症状を見れば大体分かる。
そしてもしリースの想像通りなら、たとえ目は治せたとしても、弱くなった体は治療できない。

酷く苦しそうにしているおばさんを見て、リースはある決心をつけた。

「レイナード君……？」
フィノールに背中を摩られているおばさんを少しでも楽にする為、咳止めの薬を探していたメイベルが、アタッシュケースを持ち出したリースをまじまじと見つめる。
「リースさん、どうしたんですか？」
「いや、ちょっと特効薬をな」
「特効薬？」
少し疑るような目でリースを見る二人をよそに、リースはアタッシュケースの四桁ロックを手際よく解いた。

ガチャッ、ガチャッ。

持ち手の両側にある留め金が外れる音と共に、三人の前にケースの中身が姿を現す。
「うわぁ……」
おばさんの背中を労わりながら、フィノールがうっとりしたような声を上げる。
メイベルも一言も発さずにケースを凝視しているあたり、フィノールと同意見らしい。

ケースの中は実に散らかっていた。
開けたケースの上下両側に物を収納できるタイプであるにも拘らず、中身は溢れんばかりに詰め込まれている。
普段のフィノールなら眉根に皺が寄るような光景のはずだが、散らばっているものが散らばっているものなだけに邪険に出来ない。
ケースの中では、綺麗な宝石がひしめき合っていた。

数十個もの色とりどりの美しい宝石達が、蛍光灯の明かりに照らされて輝かしい自己主張をしているのだ。
赤、青、黄色、緑……様々な色の宝石達。
後ろがうっすら見える透き通ったものや、文字通り石のような一色のもの。
他には、メノウみたいな模様が入ったものまでその種類は豊富だ。
だが形だけはほとんど皆一緒で、正八角柱の胴に尖った先端を持った細長い形をしている。
数学かなんかの試験に出題されそうなほど規則正しい形だ。
大きさは人差し指くらいだろうか？
そんな光景を目の当たりにして、フィノールは生まれて初めて散らかっているものが綺麗だと思った。
そして、この目も眩むような光景の中でも、フィノールは色の無い透明な石が群を抜いて多い事に気いた。
色のついた宝石が一色につき二個くらいしかないのに対して、透明なものは優に二十個以上はあるのだ。
そして、透明な石だけはその形に僅かながらバリエーションがあった。
鋭利な円錐型や、縦長の釣鐘型。まん丸な球体などだ。

「あなた……これって、エレメントでしょう？」
散らばった宝石を一つ一つ手にとって何やら吟味しているリースに、メイベルが信じられないといった口調で話す。
「こんなにたくさん、一体どこで手に入れたの？」
しゃがみ込んだメイベルが、ケースの中から透き通った黄色の石を取り出す。
光を惜しげも無くその身に通し黄色に輝く様は、フィノールにどことなく夏の向日葵を連想させた。
「ん？えー…まあ、色々な所からだけ…ど、……あった、これだ」
メイベルへの応答も程々に、リースが石の山の中から真珠を押し固

めたような乳白色の石を取り出す。
「エレメント、って何なんですか？」
ベッドで自分に背を預けているおばさんに近寄るリースを見ながら、フィノールが聞いた。
「エレメントって言うのはね、アビリティの力の内一つだけを濃縮、結晶化させた物なの」
「力の結晶？」
「そう。本来アビリティっていうのはＡＰ専用の能力で、そのＡＰですら、強力なものや長時間のアビリティの使用には体が耐えられないものなの。でも、エレメントは違う。純粋に能力だけを結晶化したものだから、ＡＰ以外の人にも扱う事ができるし、ＡＰも、自分が本来使うことの出来ない能力を発揮したり、既存の能力を強化、補助することができる。……ホラ」
フィノールがリースの手を見てみると、淡い乳白色の石が一瞬陽炎のように歪んで見えた後、淡く光り始めた。

「きれい……」

フィノールのその一言が、今の情景を余すとこなく表わしていた。
石から放たれるその淡い光は、蛍光灯の眩しい光には遠く及ばない、小さなもの。
しかし、蛍光灯には絶対に出せないであろう温かさが、その乳白色の石から放たれていた。
光はまるで春の太陽のように、優しく、暖かく、辺りを撫でていく。
石の光は、温かい湯にトップリと浸かったような感覚でフィノールを満たした。

「……！」

そこで、フィノールはある変化に気付く。

さっきまで苦しそうにしていたおばさんが、今や何ともなかったかのように穏やかな顔をしているのだ。
瞳を閉じたその顔には、先程までの苦痛の色は微塵もない。
「そう……これがエレメントの力。今使っているのは“治癒”の能力の結晶よ。これを使えば、量によってはたとえ死の淵にいる人間であっても束の間の延命を図ることができる…」
でも、とメイベルは続けた。
「どんな結晶であっても、無限に能力(ちから)を蓄えているわけじゃない。彼の石ももうすぐ力尽きるわ」
フィノールが視線を再び石に戻すと、石から放たれる光がみるみる減衰していくのが見えた。
やがて、最後の一片の光も消えてしまった時、石の表面に大きな亀裂が入っていく。

パリンッ！

光を失った石が、まるで中身が空洞でできたガラス細工のように、軽い音を立てて砕け散った。
それはまるで砂のように、下で受け止めていたリースの手のひらに降り注いでいく。
「……マーゴットさん。御体は大丈夫ですか？」
「ええ、とっても楽になったわ。どうもありがとう」
リースの質問に、元気になったおばさんが笑顔で答える。
「メイベルさんは随分とエレメントに詳しいんですね」
「まあね。最近はエレメントの事も資格試験に出るから、一時期勉強したのよ」
リースからの質問に、メイベルが思い出すのも嫌そうに答える。
「それにしても、とっても不思議な石なんですね」
フィノールがケースの石を興味深そうに見つめる。
「…そうだな」

リースは、手のひらに砕け落ちた石の欠片を見た。
「本当に……不思議な石だ」
とその時、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。
「マーゴットさーん。お時間になりましたのでお連れしに参りました」
随分間延びした声だ。
「先生の準備も既に整ってますので――」
ガチャ。

ガチャガチャ。

「あ、あの…？マーゴットさん？」
「しまった！私ったら鍵の事すっかり忘れてたわ！」
そう言って、メイベルは慌ててドアまで駆けていった。

「へぇ、エレメントか……」

老人をストレッチャーに乗せて部屋から出て行く彼ら――取り分けケースを持った青年――を、東棟の屋上から眺める影があった。

「生き残りがいるとは思ってたけど、まさかＡＰだったとはねぇ～」

どうやら彼らの話を聞いていたらしい。

「まあ、それなら生き残ったのも納得だけど」

影が見つめる一室には、既に誰も居ない。

「んー……随分メンドくさいのが残っちゃったなぁ」

言葉とは裏腹に、その口元は僅かに微笑んでいる。

「それに…」

影が視線を落とすと、Ｕ字の病棟の北端……中庭の北側で、盛大な火花が散っていた。

火花の中心には、薄汚れた機体が垣間見えている。

「あんな物まで残ってるし。アノ調子じゃ、明後日までには動きそうね」

そこで影は大きな欠伸をした。

「あーあ。相手側にこれだけ戦力を渡しちゃうなんて、ここの幹部（セカン）候補（ダリー）も救いようの無い能無しだね」

そう言ってから、最後に一回だけ例の部屋を見る。

「それにしても、あの石の数……一体どうしたんだろ？自力で集めたんならすごい執念だけど。ま、ワタシ達と同類ならその必要も無いけどね」

空の部屋を見るのは飽きたのか、その影は屋上のコンクリートをトン、と蹴った。

すると、まるで体が羽で出来ているかのように影が宙に浮き上がる。
「どっちにしても、アノ人面白そう……。おっちゃんもたまには良い仕事くれるじゃん」

そういい残して夜の帳に去っていく影を見送るものは、誰もいなかった。

RECORD10：力の結晶（後書き）

※ここからは作者の見るに耐えない駄文ですので読み飛ばして下さってもなんら問題ありません。と言うより読んだ方が時間の無駄かもしれません。

…すいません、一週間すっ飛ばしてしまいました。
自分の中で予定していた日程の突然の変更など色々あったのですが、一番の原因は私自身の遅筆にあります。
ですので、誠に勝手ながら、以降の更新は不定期にさせていただきます。
数少ない読者の皆様、すみませんでした。

RECORD11：疑問と発見

「メイベルさん。前診断の結果は早めに出すようにって言われてるじゃないですかー」
「あ、ごめん！すっかり忘れてたわ」
「まあ、特に異常が無かったから良かったですけどー」
部屋の前で同僚のナースに平謝りするメイベル。
リースに惚けていたせいで、検温などの前診断の結果を提出してなかったことを指摘されたのだ。
間延びした声で話すナースのもとには、宙に浮いたストレッチャーに横になったおばさんがいる。
27世紀の産業革命の賜物、バルジウムを使った機具はこんな所にも利用されているのだ。
「あ、もうこんな時間ですね。じゃあそろそろ行きますんでー」
「はい、お疲れ様。母さんも頑張ってよ！」
「頑張ってください！」
「また今度お話でもしましょう」

遠ざかっていくおばさんに手を振る三人。
これから行う目の手術は、医師によれば、「初歩的なので大きな危険は無い」ものらしい。
ただ唯一の問題は、おばさんの体力が持つかどうかだそうだ。
この後二時間ほどの手術を施して、翌朝元気なら、一週間ほどでその目は光を取り戻すと医師は言っていた。
どちらにしろ、今のリース達にはただ祈る事しか出来ない。

そんなおばさんが見えなくなったところで、メイベルが急に慌てだした。
「あぁーっ！」

「ど、どうしたんですか？」
「あ、あのさ、フィノール。悪いんだけど、食堂の席取りを私の代わりにやってくれないかしら？」
「席取り…ですか？」
「ええ、さっきの診断の結果を届けに行かなくちゃならないのよ。でもこの時間帯、行きたくても食堂が混んじゃうから」
お願い！と両手を合わせて懇願するメイベル。

なんでも、この病院には食堂は一箇所しかなく、食事持参や部屋から出ることの出来ない人を除き、医師、看護師、患者、ほとんど全ての人がそこで食事を取るそうだ。
そのため食堂の混み具合はすさまじく、この時間帯は特に熾烈を極めるらしい。
更に、座席は患者優先になっているので何かあればすぐに席を譲らなければならず、メイベルのような一看護師はとても食事を取りにくいのだそうだ。
“患者の席を取っていいのか？”というリースの問いには、“取るのは患者ではなく同僚の席。自分が食べられず同僚だけが食事を取るのは許せないから”ととてもストレートな返事を返してくれた。

もちろん、頭を深く下げて頼むメイベルに、フィノールは当然の如く快諾した。
「分かりました。あ、リースさんも行きませんか？あそこなら夕食も済ませられますよ？」
「あー…ごめんフィノール。輸送機の修理を手伝おうと思ってるから……」
案内するというメイベルに、リースがすまなさそうに答える。
院内を一周しているときに見かけたのだが、中庭の北端では既に輸送機の修理が始まっていたのだ。
あの種類の機体はパイロット本人にしか修理が施せない部分もある

ので、リースが行かなければ修理が終らなくなってしまうのである。
「あ…そうでしたね。じゃあ私一人で行ってきます」
「頼んだわ。十分ほどで終わるから！」
パタパタと階段のほうへ消えていくフィノールを、メイベルが手を振って見送る。
やがて角を曲がったフィノールは、リース達の方から見えなくなった。

「……彼女は、人を疑うことを知らない人なんですね」
フィノールが消えた廊下を見つめながら、リースがポツリと呟いた。
「ええ。誰にも誑かされる事なく、純粋に育った子だから」
メイベルが少し誇らしげに言う。
「それなら今の嘘、少し言い辛かったんじゃないですか？」
「あ、私が診断結果をあのナースにこっそり手渡してたの、見えてたのね」
「いいえ。ただの勘です」
リースの答えにメイベルが目を丸くする。
「まあそんなことより、これであなたがご所望の一対一の会話が出来ます」
「……」
再び静かになった廊下で、リースはメイベルと向かい合った。
窓の外は既に日が暮れており、二人を照らすのは頭上の古い蛍光灯だけだった。
「よく気付いたわね。私が二人だけで話がしたかったって事」
「…他人の心は目を見れば大体分かります」
「へぇ。中々便利な特技ね」
「はい。これが無ければ、自分は生きていけませんでしたから……」
そう言ったリースの表情が少し暗くなる。
が、それも一瞬の事。すぐに元の表情に戻った。

「で、用件の方は？」
「まずはお礼よ」
メイベルはそう言って微笑んだ。
「母さんを助けてくれてありがとう。とても感謝しているわ」
「いえ、そんな」
頭を下げようとするメイベルをリースが慌てて止める。
「エレメントについて学んだとはいえ、まさかあんなに効果があるとは思わなかったわ。あれほど落ち着いた母さんの顔を見るの、久しぶりだもの」
「そうですか」
笑顔で話すメイベルに、リースは複雑な表情を浮かべる。
「確かにあれは、ケースの中の石でも最も強いものの一つでしたから…」
「え？」
「あ、いえ、何でもないです」
そう言って、リースは慌ててメイベルから視線を離した。

（……）
思わず心の声を表へ出してしまったことを、リースは少し後悔した。恐る恐る横目でメイベルを見てみると、少々訝しむ様な顔はしているが、何とかさっきの言葉は誤魔化せたようで、リースはホッと胸をなでおろした。

リースの心情を複雑にさせている、乳白色の“治癒の石”。
正直に言えば、あれはとても大切なものだったりする。
だが、リースは決して石を使ったことを後悔しているわけではなかった。
あの時の判断はリース自身がつけたものだし、今でもあれで良かった、正しかったと思っている。

ただ……あの石には、余りにもリースの想い出が詰まり過ぎているのだ。
ＡＰとしての力があるせいで暗闇の中だったリースの過去に、一条の光を生んだ幸福の石であり……
そして同時に、彼の家族を失うきっかけを作った不幸の石でもある。
そんな様々な想いが詰まった石だから、リースは少し寂しかったのだ。
例えるなら、小さい頃にはしゃいで見ていたテレビ番組の最終回を見るようなもの。
見終わってしまうと、なんだか胸にポッカリと穴が空いたような、寂しい、悲しい気分になってしまうが、だれもが見たことを後悔したりはしない。

リースは今、そんな気分なのであった。

「それよりも、早く本題に入りましょう。メイベルさんも色々と都合があるでしょう？」
「ん…それもそうね」
大体聞かれることの目星はついているが、リースはメイベルに本題に入るよう勧めた。
それを聞いたメイベルも、何か差し迫った予定があるのか、苦笑いで頷く。
「私の用件は、他でもないあなたよ。あなたについて、色々と聞かせてほしい事があるのよ」
「と言うと？」
「簡単なことよ」
メイベルは探るような視線をリースの碧の瞳に向けた。
「あなた、一体何者なの？」

暫し訪れる、静寂の時間。
最上階のためか、ここには他の人間はいない。
階下から聞こえてくる喧騒が、酷く離れて感じられた。
「……ご存知の通り、ただの一傭兵です」
「そういう意味じゃない」
リースの答えをメイベルが手を振って遮った。
「なら、質問の意味が分かりかねます」

「石よ」

古びた蛍光灯が不規則に明滅する中、メイベルがキッパリ言い放った。
「どこの世の中に、それだけの数の石を持った人間がいるっていうのよ。不自然だわ」
そう言いながらリースの手に掴まれているケースを指差す。
「フィノールには言わなかったけど、そのエレメント、並みの人間では生きてる間に拝むことすら叶わないわ」
私だってビックリしたんだから、とメイベルは言う。
「あなたもその石を持ってるんなら、価値ぐらいは分かってるんでしょう？」
「……ええ」
リースは冴えない声で答えた。
そして、懐からさっきの透明な石を取り出す。
メイベルに見えるように手のひらに置いたそれは、明かりを受けてキラキラと光っていた。
「本来、ＡＰしか使えないはずのアビリティを凝縮したこの結晶は、特殊な状況下でしか生成できない、希少価値の高いものです。それに加えて、利便性も高く、十分に信頼できる代物なので、自分の持っているサイズの結晶なら、半分に割っても家が建てられるくらいの値打ちがあるでしょうね」

「その通り」

アビリティの能力を結晶化させた石、エレメント。
その不思議な存在が発見されたのは今からほんの数十年前だ。
よって、未だ解明されていない部分の方が目立つ石だが、ＡＰでない人間もアビリティが扱えるようになる石であること、その力の蓄積量には上限があること、石が自然発生する確率が限りなくゼロであること等は、近年の研究の結果で判明している。

「そんな今では金持ちのクレジットカード代わりに使われるようなものを、どうして傭兵のあなたが大量に持ってるのよ」
納得いかないといった表情でメイベルが詰め寄る。

そう。今の時代、エレメントは少しずつ金持ちの道楽と化しているのだ。
世界中を探し回ったとしてもほんの僅かしか見つからないその貴重さ。
宝石と見紛うばかりの美しい結晶でありながら、アビリティも発揮できるその能力。
余りに複雑な特性故に、決して偽造物が出回らないその信頼性。

金やプラチナよりも希少価値があり、見た目ばかりの宝石よりも需要があり、そしてクレジットカードに勝る信用もある。
三拍子揃ったこの魔法の石は、今や世界中で利用され始めているのだ。
最も研究の進んでいる「治癒」の石は病院などで重宝され、そのほかの石も実用化に向けて日夜研究が重ねられている。
だが、今の所は石の保有者のほとんどが上流階級の富豪であり、多様な可能性を持った石もインテリアや小切手程度にしか扱われていないのが現状である。

「やっぱり変ですか？　傭兵がこんなにエレメントを持っているのは？」
「傭兵じゃなくても、そんなにたくさん持ってたら誰でもおかしいと思うわよ」
「それもそうですね」
そう言ってリースは寂しく笑った。
そして、もう一度手に持ったケースを見つめる。
「実は、この中の石のほとんどは、昔に自分が貰い受けたものなんです」
「貰ったぁ？」

リースの言葉にメイベルが眉を吊り上げ、目を細くする。
その表情はまさに「信じられない」を体現していた。
汚い手を使ったとしても入手困難な量なのに、それを買うでもなく、報酬として手に入れるでもなく、ただ貰ったとなれば、とても信じられる話ではなかった。

「…思いっきり信じてませんね」
「そりゃそうよ。そんな豪邸がスパスパ建っちゃうような量の石、一体誰がタダでくれるって言うのよ？」
「そういう人がいたからここにあるんですよ」
そんなの不条理よ、と不機嫌になるメイベルに、リースがケースを持ち上げて苦笑する。
「じゃあ、一体誰なの？そんな物をパッとくれちゃった人は？」
「それが……自分にも分からないんです」
「はぁ！？」
頭を掻いて答えるリースにメイベルが素っ頓狂な声を上げた。
「じゃ、じゃあ何？それだけ高価な物をそれだけたくさんくれた人の、名前すら知らないってわけ？」

「まあ、そういうことになりますね」
「はぁ……ある意味大物ね、あなた」
メイベルが呆れ顔で盛大なため息を吐いた。

（自分に莫大な出費をしてくれた人の名前すら覚えて無いだなんて……）
私なら絶対にありえないことだわ、とメイベルはつくづく思う。
もし自分にも同じことが起これば、名前はもとより、顔や性格、その人の好みの一つ一つまで覚えていられるだろう。
それは記憶力云々よりも、その人のモラルの問題なのだ。
たとえ貰った物が高価でなくとも、便利でなくとも、その人について出来うる限りの事を頭に入れておくのは至極当然の事のはずだ。

メイベルのそんな気持ちを察したのか、リースが表情を少し暗くした。
「顔なら覚えているんですけどね」
「え？」
視線を下げて話すリースの顔は、どこか物憂げだ。
片手に乗せた透明な石を、持て余し気味に指で転がしている。
「あの時は、お互いに知り合う時間さえありませんでしたから……」
その後もリースはしばらく石を転がしていたが、やがてそれを再び懐へと仕舞い込んだ。
「すいませんね。なんだか話を逸らせてしまったみたいで」
「まあいいわ。とりあえず、あなたがそれだけの石を持っているのは、あなたが特別なんじゃなくて、ただのどこかの大富豪の気まぐれだったってことは分かったから」
「……今の言葉、微妙に棘がなかったですか？」
「気のせいよ」
そう言ってメイベルが笑う。
どうやら、彼女は欲しかった答えを無事に得られたようだ。

「あ、そうだ。あなたにもう一つ言いたい事があったのよ」
「何ですか？」
「診断の事なんだけどね」
今更言う必要も無いとは思うんだけど、とメイベル。
「あなたがここに運ばれてきた時、検査をしたのは知ってるわよね？」
「はい。それで自分がＡＰだってことも分かったんでしょう？」
「そ。…で、その検査なんだけど、実はまだ大型の機械を使った検査は一つもしてないのよ」
「レントゲン撮影とか？」
リースの問いに頷いたメイベルは更に続ける。
「その通り。他にも、Ｘ線ＣＴスキャンとか、ＭＲＩなんかもまだやってないわね。あなた、見たところ骨折や内臓の損傷も無さそうだったから、そういった検査を省いたのよ」
メイベルが話しながらリースの腕や腹の辺りを指差す。
「でも、万が一ってこともあるでしょ？だから、『もし望むならそういった検査を受けさせてやりなさい』ってあの町長さんからありがたいお言葉を頂戴してるのよ」
そう言ってメイベルはリースに一歩近づいた。
「で、どうする？大した予定は入ってないから、今からでも検査は受けられるけど？」
しかし、メイベルの誘いにリースは首を横に振った。
「お気持ちだけ受け取らせてもらいます。自分の体の事は自分が一番良く知っていますから」
「あらそう…」
こころなしか残念そうな表情のメイベル。
だが、すぐに持ち前の明るい顔に戻った。
「ま、いいわ。検査を受けたくなったらいつでも言って頂戴。すぐに準備するから」
「ありがとうございます」

リースがお礼の言葉と共に深々と頭を下げる。
こういう心遣いができるのも、町長が信頼を集められる理由の一つなのだろう。
「これで話したかったことは全部よ。付き合ってくれてありがとう」
「いえ、こちらも色々話せてよかったです」
「じゃあ輸送機の修理、がんばってね」
「はい」
走り去るメイベルにリースが手を振って応える。
やがて、彼女もまたフィノールと同じ場所で曲がり、リースの方からは見えなくなった。

古びた蛍光灯が明滅する、六階の寂れた廊下。
今そこには、リース一人しかいない。
「……検査、か」
下に降りる階段のある、皆が消えていった曲がり角を見つめながら、リースはポツリと呟いた。
そして、さっき懐に石をしまった自分の左手をもう一度持ち上げる。
「もし全部の検査を受けてたら、尋問くらいはされてたかもな……」
蛍光灯の眩い光にかざした左手は、一切の光を通していなかった。

ミレースの町外れにある、ほんの少し前まで閉鎖されていた工場。

その中の、徐々に機能を取り戻しつつある司令室では、再びいざこざが起きていた。
「何だと！それは本当なのか！？」
「計測の結果、まず間違いありません」
計器以外の明かりがほとんど無い、薄暗い司令室。
いざこざの渦中にあるのは、くわえた煙草を噛み千切らんほどに歯軋りするボテイン隊長と、今現在彼の部下である黒髪の青年、エイリエスだ。
他の物は皆、そのいざこざに興味を示すでもなく、それぞれの仕事に着手している。
そんな司令室に、再び隊長の罵声が飛んだ。
「施設が稼動できないだと？Ｌｖ．４区域の調査結果は既に出ているはずだ。なのにどうして稼動できん！？」
辺りに唾を撒き散らしながら隊長が吼える。

ボテインは今、非常に焦っていた。
彼は今、逃げ場の無い袋小路に徐々に追い詰められているのだ。
工場の建設資金を私用に使ったことは、明日の夜幹部（プライマリ）がやってきた時に全てばれてしまう。
それを阻止する為には、秘密を知った者を全て始末すればよい、というのが彼の考えだったが、それは同時に施設の生命線を司る目の前の黒服達全員を始末する事に繋がる。
施設が無事に稼動してから彼らを特に放射線が強い貯蔵庫に放り込んだとしても、間違いなく数日は生き延びてしまうだろうし、それでは間に合わない。
おまけに、彼らを全員首尾よく始末したとしても、それを幹部のハマルが不審に思わないはずが無い。

そして今、元来の目的であった施設の起動すらままならない状況に陥っている。

これでは完全な八方塞だ。
だから彼は思考を張り巡らし、幾つかの手を打った。
もしその策が上手く運べば、これらの心配は一切必要無くなる。
しかし、もし失敗すれば、彼の末路が悲惨なものになるのは火を見るより明らかだった。

「施設が稼動できない原因は、端的に言えば電力不足によるものです」
「電力不足？」
ボテインが眉をひそめる。
「しかし、ワシの部下が計測を行った時は電力不足なぞ無かったぞ」
「それは、彼らが行ったのが試験稼動だったからです。試験稼動なら通常の電力の半分以下の量で動かすことが可能ですから」
「…では、ここの奴らは一体どうやって施設を動かしていたのだ？」
ボテインが更に質問を重ねる。
そう、この施設は一ヶ月前まで確かに稼動していたのだ。
司令室の管理はこちらの人間が行っていたが、電力が不足したなどという話は一度たりとも耳に入った覚えが無い。
「ミレースには、つい昨日まで正常に機能していた発電施設がありました」
ボテイン隊長の目を見つめながら、エイリエスが語り始める。
「その施設は、この工場に十分な量の電力をずっと供給し続けていたのです」
「まさか……」
ボテインの表情が恐れに歪む。
しかし、エイリエスの話は止まらなかった。
「そう。昨日とある部隊が『捜索』と銘打って町の数々の建造物を破壊しました。その中の一つが例の発電施設です」
エイリエスはそこで視線を外し、コンソールに向き直った。
「発電施設は全壊こそ免れましたが、現在では以前の六割程の出力

しか出せない状況です」
「で、では一体どうするというのだ！？」
案の定、隊長がエイリエスに向けて怒鳴り散らす。
自分のミスを他人を怒鳴り散らす事で紛らわそうとする、この男らしい反応であった。
「……幸いな事に、この施設のＬｖ．４区域にある精製プラントは全部で四基あります。フル稼働は不可能ですが、二基程度なら現在の電力量でも十分に機能するでしょう」
「その場合、作業工程はどのくらい遅れるのだ？」
「そうですね……」

ピーッ　ピーッ　ピーッ

エイリエスがおおまかな計算を始めた時、司令室の無線機が連絡が来たことを知らせるアラーム音を発した。
ボテインはそこで一旦話を切り、無線機の元へ歩みを進める。
「何だ？」
少し威圧的な、ドスの聞いた声だ。
「……そうか、無事に完了したか……施設の方はどうした……？」
どうやら、数時間ほど前に通信施設を爆破するように命令を出した彼の部下からしい。
「…ならいい。今すぐ戻って……、何だ？」
帰還の命令を出そうとしたボテインが、無線越しに何かを言われて黙り込んだ。
「…何だと？それは本当か？」
エイリエスに言ったものとは明らかに違う口調だ。
「……ああ、とりあえずそこへ向かえ……そうだ、必要なら殺しても構わん」
無線で話す隊長の顔が醜く歪んだのが、エイリエスの方から見えた。
知らせはどうやら彼にとって吉報だったようで、隊長は嬉々とした

表情で通信を切った。
「エイリエス。一つ調べ物をして貰いたい」
隊長は歪んだ笑顔のままでエイリエスの元へ歩み寄ってきた。
自分に対して妙に優しい口調になった彼に、エイリエスが悪寒を覚える。
「何を、調べるのですか？」
「通信施設の近くには川があってな。ワシの部下がその近くでダムを発見したらしい。発電機構があるかは分からんが、一度調べてくれ」
「…了解しました」
エイリエスは胸に残る悪寒に耐えながら、発電所のシステムへのアクセスを開始した。
簡単なプロテクトを突破し、発電施設の管理プログラムへ侵入する。
答えは五分とかからずに出た。

「……今使っている発電施設以外にも、もう一基稼動している発電施設があります」
そう言いながら、検索結果を表示したモニターを隊長に見せる。
すると、彼の顔はみるみるうちに狂気のそれへと変貌していった。
「よし、いいぞ！電力をこっちに回せば四基全てのプラントが稼動できる！それに見てみろ、奴らの塒（ねぐら）まで突き止めたぞ！」
「しかし隊長！この発電施設は……！」
「黙れ！！悪いのはあんなところに避難した奴らの方だ。大人しく従っていれば医療ぐらいは保障してやったものを！」
吐き捨てるようにそう言った後、隊長はダムの接収が済むまでの間、二基だけでも今すぐ起動するように周りに命令を出した。
その姿に向けて、黒髪の青年が憎しみの込もった一瞥を投げかける。
「悪く思わないでくれよ……」
再び向き合ったモニターに向かって、黒髪の青年が懺悔の言葉を吐

いた。

モニターに映し出された、ミレース一帯の地図。
町の近くを流れる川には、現在も稼働中である一基のダムが表示されていた。

……森の中の病院へと一直線に続く、送電を意味する赤い線と共に。

RECORD11：疑問と発見　（後書き）

すみません。投稿が大幅に遅れてしまいました。
とは言っても読者の方は余り多くは無いのですが…

今や執筆に取れる時間がほとんど無く、一日に十分ほど×3回分ほどしか書ける時間が取れない状況です。
故に、以降の投稿も遅れる可能性がありますが、できる限り頑張りますのでどうか気長にお待ち下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1793c/

Unattribute〜アン・アトリビュート〜

2010年11月6日00時15分発行